



総合研究大学院大学 文化科学研究科
学術交流フォーラム2014 活動報告書

平成 27 年 3 月

総合研究大学院大学 文化科学研究科 平成26年度 学生企画委員 編集

はしがき

本報告書は、平成26年12月20日（土）21日（日）に実施した総合研究大学院大学文化科学研究科による企画事業「学術交流フォーラム2014 文化をカガクする？」の活動報告書です。

学術交流フォーラムは、総合研究大学院大学文化科学研究科の学生・教員の学術交流を図るために実施されてきた事業です。今回で6回目を数え、今年度は1年間の事業の見直しを経ての開催となりました。今回は学生が中心となってプログラムを構成することで、従来の口頭発表やポスター発表に加え、パネルディスカッションやワークショップ、研究公演など多様なセッションが組み込まれました。その結果、文化科学研究科ならびに学内他研究科を含めた多様な研究分野の方に受け入れられる魅力あるプログラムを提供することができました。

その一方でフォーラムの準備に際して、学生・教職員の間ではフォーラム事業の目的や意義、各企画の立案・実施について協議と交渉を重ねてきました。そして改めて準備から開催までの経過を顧みたとき、そこには学生・教職員の協働のあり方や外部団体との協力体制の構築など、本事業に関与した全ての方々と共有すべき成果と課題が認められました。さらにはフォーラム事業実施の背景となっている大学院教育プログラムの一層の改善のため、各個別企画の成果と課題の整理、及び本事業全体の成果と課題の共有を図る必要性を考慮しました。こうした背景から、「学術交流フォーラム2014 文化をカガクする？」の活動報告書を作成することとなりました。

執筆にあたっては、学生企画委員会で用いた資料や議事録、本事業実施に際して作成された内部資料、企画立案にあたって参照した参考文献を用いています。

本報告書が総合研究大学院大学文化科学研究科における、学生・教職員の協働によるフォーラム事業の道標になるとともに、大学院教育に携わる研究者・教職員の方々にとっても、教育プログラムの開発や改善の一助となることを願ってやみません。

平成27年2月5日

平成26年度学生企画委員長
総合研究大学院大学 文化科学研究科 地域文化学専攻
東城義則

目次

はしがき	1
第1部 事業概要と経過報告	
1 学術交流フォーラム2014「文化をカガクする？」事業概要	6
1. 学術交流フォーラム概観：実施内容の変遷	6
2. 事業実施に向けた構想	17
3. 学生企画委員による開催趣旨の検討	21
4. 協働のあり方	25
5. 当日の様子	26
6. 反省会の実施	28
7. まとめと今後の課題	30
2 学術交流フォーラム2014「文化をカガクする？」経過報告	36
1. 委員会の経過	36
2. 事務局の仕事について	43
3. 今後の課題	44
4. おわりに	45
第2部 研究成果の公開状況	
1 口頭発表	46
1. 企画趣旨	46
2. 準備の経過	46
3. 当日の様子	47
4. 今後の課題	48
2 ポスター発表	49
1. 企画趣旨	49
2. 準備の経過	49
3. 当日の様子	51
4. 今後の課題	52
3 パネルディスカッション：共同研究から見つめる文科のいまとこれから	56
1. 企画趣旨	56
2. 準備の経過	57

3. 当日の様子	58
4. 今後の課題	59
第3部 個別企画の成果報告	
1 総研大クッキングスクール：パレスチナシャーム地方のムジャッダラを食す	60
1. 企画趣旨	60
2. 企画の準備過程	60
3. ワークショップ当日の様子	62
4. 収支報告	67
5. まとめ	68
2 寄り添いの音・音楽 ―伝える・祝う・送る―	70
1. 開催目的及び趣旨	70
2. 前日までの準備過程	70
3. 前日・当日の準備及びタイムテーブル	71
4. 当日の様子	72
5. 後片付けと事後処理	76
6. まとめ及び今後の課題	76
3 研究公演「石見大元神楽」	78
1. 企画趣旨	78
2. 企画の準備過程	80
3. フォーラム当日の報告	84
4. まとめ	90
第4部 分析と講評	
1 アンケート分析	94
1. フォーラム事業に関するアンケート集計結果	94
2. 研究公演「石見大元神楽」に関するアンケート集計結果	105
2 企画運営の課題	118
1. 準備作業・役割分担	118
2. 当日作業・フォーラム全体	119
3 講評	121
1. はじめに	121
2. 学生企画委員の活動とその成果	121

3. 学生企画事業の課題	123
4. おわりに	123

第5部 総括

1 文化科学研究科 学術交流フォーラム2014 成果瞥見と将来への展望	125
2 平成26年度学術交流フォーラムを終えて	127

資料

1 平成26年度学生企画委員事業実施要領	
2 第1～8回学生企画委員会議事次第	
3 参加募集要項	
4 学術交流フォーラム2014「文化をカガクする？」広報チラシ その1	
5 学術交流フォーラム2014「文化をカガクする？」広報チラシ その2	
6 神楽研究公演「石見大元神楽」広報チラシ	
7 当日プログラム	
8 当日会場案内図	
9 神楽公演パンフレット	
10 学術交流フォーラム2014 アンケート調査票	
11 神楽公演アンケート調査票	
12 学術交流フォーラム2014 参加者所属内訳	
13 当日の写真	
14 反省会ワークシート① フォーラムをカガクする（1）～反省会事前ブレスト～	
15 反省会ワークシート② フォーラムをカガクする（2）～私とあなたとフォーラムの未来を築くためのWS～	
16 反省会ワークシート③ ロールプレイ①：委員長編.	
17 反省会ワークシート④ ロールプレイ②：未来の委員長・委員編.	
18 反省会ワークシート⑤ ロールプレイ③：未来の研究者編	

学術交流フォーラム2014 企画・運営＜執筆分担＞

巻末

第1部 事業概要と経過報告

1 学術交流フォーラム2014「文化をカガクする？」事業概要

1. 学術交流フォーラム概観：実施内容の変遷

学術交流フォーラム事業（以下、フォーラム事業と略す）は、総合研究大学院大学（以下、総研大と略す）の文化科学研究科の6専攻（地域文化学専攻・比較文化学専攻・国際日本研究専攻・日本歴史研究専攻・メディア社会文化専攻日本文学研究専攻）間の学術交流を目的として平成18年度より実施されてきた。フォーラム事業の原型は、平成17年度に実施された「学生合同セミナー」に遡り、平成18年度より同セミナーは名称を「文科（文化科学研究科の略）フォーラム」と改められ、現在まで続くフォーラム事業としてスタートした。「文科フォーラム」は、学生が主体となり2年間実施された。また平成19年度からは教員主体の「学術フォーラム」も立ち上げられ、「文科フォーラム」と並行して実施されてきた。平成20年度に「文科フォーラム」と「学術フォーラム」とは統合され、1つのフォーラムとして開催されるようになる。現在の「学術交流フォーラム」の名称は、平成21年度より用いられ現在に至っている。

現行のフォーラム事業は、平成23年度より総合研究大学院文化科学研究科連携事業¹の一環として実施されている。実施体制としては、文化科学研究科に所属する学生がRAとして雇用され、学生企画委員という立場（学生企画委員については後述する）からフォーラム事業の運営にあたる。そしてフォーラム事業を担当する基盤機関に属する専攻長1名が、フォーラム担当教員として学生企画委員によるフォーラム事業の企画立案を補助するとともに予算執行責任者として事業を管理する。そして総合研究大学院大学葉山本部学務課事務局基盤総括事務係（以下、基盤総括事務係と略す）が、各基盤専攻の学生・教職員と連携を取ることで、作業全体の事務統括を行う体制となっている。なお今年度の分掌体制については、「協働のあり方」にて後述する。

フォーラム事業が構想された背景としては、文化科学研究科の教育プログラム「総合日本文化研究実践教育プロジェクト」が、文部科学省の事業「魅力ある大学院」イニシアティブ」に採択されたことに基因する。「魅力ある大学院」イニシアティブ」事業とは、現代社会の新たなニーズに応えられる創造性豊かな若手研究者の養成機能の強化を図るため、大学院における意欲的かつ独創的な教育の取組（「魅力ある大学院教育」）を重点的に支援する、平成17年度より開始された文部科学省の事業である。本事業の申請書において、次の2点を目的としてフォーラム事業（当時の学生合同セミナー）が構想されていることが明らかとなっている。①学生・教員の出席を義務づけることで、学術活動の事後評価と他専攻学生との討議を通じた学術交流の場とすること、②学生・教職員が一堂に会することで、互いの活動を相互評価できる場を目指すこと、以上の2点である²。

以下、学生合同フォーラムから前回の学術交流フォーラム2012までの開催内容について触れ、フォーラム事業の実施内容について概観する。

1) 平成17年度 学生合同セミナー

学術交流フォーラムの源流は、前身の学生合同セミナーにある。基盤総括事務係に残る記録によれば、「総合日本文化研究実践教育プロジェクト」の一環として、平成17年度に実施された学生合同セミナーが第1回の開催とされている。同セミナーの事業企画は学生・教職員によって構成される「平成17年度文化科学研究科学生企画委員会」が担い、事務統括は、総研大（葉山本部）教育研究推進室が担当している。2005年12月12日・13日の日程で、ヤマハつま恋りゾートを会場として実施されている。学生合同セミナーの開催趣旨文は次の通りである。

文化科学研究科では、平成17年度文部科学省「魅力ある大学院教育」イニシアティブ（研究拠点形成費等補助金）に採択された「総合日本文化研究実践教育プログラム」事業の一環として、専攻の枠を超えた教育研究活動を一層推進するために研究科学生合同セミナーを開催して学生間交流を促進するとともに、海外学術交流支援事業の成果報告会を合わせて実施する。平成17年度（第1回）のテーマは、「知的資源の共有化」です。³

この趣旨文に明記されているように、学生合同セミナーは文化科学研究科に設置された各専攻学生間の交流と、海外学術交流支援事業の成果報告会⁴との2つの目的が掲げられ開催された。セミナーのテーマは「知的資源の共有化」である。プログラム内容としては「研究科選定国際会議等派遣事業参加者」と国際「学会報告者」とによる口頭での成果報告が中心であり、報告内容についてはセミナー企画委員側より「学会会場内外の様子・滞在記・研究者たちとの交流など自身が体験してきたこと」「自身の研究発表とそれに対する反応」「これらの体験がいかに自身の「糧」になったか」を課題として提示されていた。そして各専攻の学生間交流を目的として掲げていたことから、プログラムにレセプションとコーヒープレイクを交えることで専攻間の学術交流が促進できるよう配慮されていた。

2) 平成18年度 文科フォーラム

平成18年度より学生合同セミナーは文科フォーラムと改称され、2006年9月15日・16日の日程で、国立オリンピック記念青少年総合センターを会場として開催される。事業企画の担当は、学生・教員・特定専攻・文化科学研究科イニシアティブ委員会によって構成される「平成18年度文化科学研究科学生支援相談員会議」である。事務統括は、前年度同様に教育研究推進室が担当している。開催趣旨文は次の通りである。

「名実ともに総合研究大学院大学の大学院生です」と自己紹介できるとすれば、聞き手はどのようなイメージを彩ることができるでしょうか。

もちろん、総合的な研究ができると言い切るのは一生不可能なことかもしれません。しかしながら、総合研究を志向する意思や視野は形成できるに違いありません。

ではその発想のきっかけを用意してくれるものは何でしょうか。それは、様々な分野の人と

の交流であることは言を俟ちません。しかし、それは口でいうのは易しいのですが、いざ実際に実行しようというとき必ずしもそういった機会に恵まれない現実が一方では存在します。

それを積極的に活用しようというのが総研大文科フォーラムの試みです。民博、日文研、歴博、メディア、国文研の多様な教員や院生のイメージがすぐに浮かび、実際に面識があり、研究の相談や新しい研究会の提案ができる、そういった行動力とネットワークを培うことが、総合研究大学院大学で研究できる最大の良さであると考えています。

昨年に船出した学生合同セミナーは、今年は総研大文科フォーラムと名称をリニューアルしました。本年度は、多くの先生方に参加していただける日程に照準を定め、さらに在學生はもとより、とりわけ新入生に参加していただくようお願いしました。一年目から今後の博士課程でお互いの知的関心を触発しあえる交流の基盤を築けるようにと考えているからです。

「なぜそのような研究をされるようになったのですか」、「現在どのような研究関心をもっていらっしゃいますか」といった普段なかなかじっくり話せないような質問を先生や院生みなさんにぜひしてみてください。そのような発想の源泉たる本質的な議論ができるよう多くの機会を設けてあります。

ひとたび熱き交流が生まれれば、基盤機関が離れ離れになっている現状が、かえってダイナミックな分散であり、スケールの大きさを用意しているのであるという能動的な捉え方さえ生まれてくるかもしれません。専攻の壁を越えた交流は、お互いの研究テーマの共通点や問題意識を大いに刺激してくれるはずです。

異なる事物同士をつなげて新しい意味を創出する、そしてそれが社会に響きうる。この総研大文科フォーラムが、新しい可能性創出の場になることを願って、みなさまとの良き出会いが豊かな発火となればこれに勝る喜びはありません。⁵

フォーラムのWEB報告書によると、文科フォーラムは「一年の間に行われたイニシアティブ事業の成果報告の場として、また日常的には東京、千葉、大阪、京都に分散する教員・院生の交流の場として、今回のフォーラムは企画された」とされ、本フォーラムはイニシアティブ事業の成果報告と教員・学生間の交流を目的としていた。なお当年度のフォーラム事業については、成果報告書が出版されている。

3) 平成18年度 学術フォーラム

この年度より、本学教員が中心となって企画される学術フォーラムも開催される。同フォーラムは2007年2月24日に京都市リサーチパークを会場として開催されている。事務統括は教育研究推進室が担当している。テーマは「ナショナリズムの歴史と現在」とされる。開催趣旨は次の通りである。

ナショナリズムという概念はこれまですでに多角的に論じられており、多義化が進むあまりに定義が困難になっている用語の一つです。語源そのものは古く、古代ローマ帝

国にさかのぼりますが、今日一般に論じられている「ナショナリズム」の起源は、近代化の過程で国民国家が形成された歴史的現象に発しています。

この概念は、現在の日本では、六十代以上の年長者にとって「慰撫史観」であると同時に、価値観のゆらぐ若年世代にとって「癒しの運動」になっているという二層構造が指摘されています。現代のさまざまな事象をいかに読み解くか、そのために必要なのは何よりも、正確で幅の広い知識ではないでしょうか。

このたび、総合研究大学院大学文化科学研究科を構成する5つの基盤研究機関が連携し、多様な観点からナショナリズムの諸側面に関する話題を、公開共通レクチャーとして提供し、参加者とともに議論するフォーラムを開催します。

なお、本事業は、大学院イニシアティブプログラム「総合日本文化研究実践教育プログラム」の一環として実施されます。会場では、本事業のもとでこれまで実施された、学生の諸活動に関するポスターセッションも行います。⁶

上記の開催趣旨文によると、同フォーラムは公開共通レクチャーを実施して参加者とともに議論を交わすことを目的として企画されるとともに、「総合日本文化研究実践教育プログラム」によって実施された学生による活動の成果報告も兼ねていた。

4) 平成19年度 文科フォーラム

前年度まで「魅力ある大学院」イニシアティブ」事業に基づく教育プログラム「総合日本文化研究実践教育プログラム」の一環として実施されていたが、2年間の採択期間が終了したことから、平成19年度は学内処置として、「総合研究大学院大学文科科学研究科スチューデントイニシアティブ実践教育プログラム」に基づきフォーラム事業は実施された。

当該年度の文科フォーラムは、7名の学生企画委員が参画して企画運営された。フォーラムは2007年9月14日・15日の日程で行われ、初日は財団法人日本青年館、2日目は農林水産省共済組合南青山会館を会場とした。事務統括は総研大学務課研究協力係が担当している。初日は学生による口頭発表とレセプションが実施され、2日目には学生によるポスター発表とワークショップ「文科フォーラムワークショップ～他専攻なりきり企画～」が実施されている。開催趣旨文は次の通りである。

文化科学研究科は、総合研究大学院大学の中の唯一の人文系の研究科です。人文系の研究は独創性と多様性にあふれるという特性があります。一方で、その特性は閉鎖的な体質、偏狭な見方というマイナス面をもたらす場合もあります。

文化科学研究科内においても、学生の行う研究は多岐にわたり、常に一丸となって研究を進めているわけではありません。むしろ、個々人が時に孤独に研究を進めていると言っても過言ではありません。

文化科学研究科では、そのような人文系研究の閉鎖的な体質を打破するために、2005年度より、文化科学研究科内で学際的に交流する文科フォーラムを開催してきました。

もちろん始めは、互いの研究の意義や方法論が理解できず、各専攻、個人間の溝を認識しながらのスタートでした。しかし2005年度、2006年度、と回を重ねるにつれて、文化科学研究科の学生の中で確実に互いの研究を認め合い、発展し合う学際的な空気が生まれてきつつあります。

2007年度の文科フォーラムでは、過去の文科フォーラムの良い点を引き継ぎつつ、さらに新たな挑戦をおこないます。今年は様々なイベントを企画し、さらに体験的に学際的交流を促進しようと考えています。

2007年度の文科フォーラムが文化科学研究科内の学際的交流に寄与し、さらに新たな人文学研究の在り方を学生や教員の皆様に発見していただくきっかけになれば、幸いです⁷。

5) 平成19年度 学術フォーラム

前年度に引き続き、教員主体による学術フォーラムが、2008年2月22日・23日に京都センチュリーホテル・アランヴェールホテル京都を会場として開催された。テーマは「[方法]の発見」である。事務統括は、前年度同様に学務課研究協力係が担当している。開催趣旨文は次の通りである。

研究者が、自らの研究を何らかのかたちでまとめようとするとき、その背後には、必ずその研究者固有の、またその研究分野に共通した方法意識が存在する。自分にあった方法を発見・獲得することで自立した研究者となり、また、自分がそれまで取ってきた方法に縛られていると感じて、苦しむこともある。

今回の学術フォーラムでは、本研究科の教員が、個々の、また専攻に共通した、あるいは分野・専攻を超えて応用可能な方法（論）を、他専攻の教員・学生に対して開示することで、聞き手の一人一人が改めて自らの「方法」を振り返り、また自他の専攻における方法（論）の近似性や相違を認識し合う。

また、複数の教員をパネラーとし、それぞれの方法的模索に基づく、自分野の拡張、または異分野との融合の可能性について、パネルディスカッション方式で議論することを通じて、従来の自分野に充足せず、チャレンジを重ねることの苦しみと喜びを理解する。

このふたつの試みを通じて、文化科学研究科の所属メンバーが、互いの方法を尊重しつつ、補い合い、交流し合うためのきっかけとする。⁸

6) 平成20年度 文科・学術フォーラム2008

平成20年度より学生側の負担が大きいことと、参加する教員の所属基盤に偏りが生じていることから、2つのフォーラムを1つに一本化して実施することとなる⁹。そして当該年度のフォーラム事業は、「総合研究大学院大学文化科学研究科総合日本文化研究実践教育プロジェクト」の教育プログラムの一環として実施された。フォーラム事業には、10名の学生企画委員が参画して、計11回の学生企画委員会が実施されフォーラムの運営に関わった。フォーラムは2008年12月12日・13日・14日の日程で、初日はコンベンションルームAP大阪を

会場として、2日目・3日目は梅田センタービルを会場として行われた。WEB報告書における開催趣旨には「文化科学研究科では、平成16年度以来、イニシアティブ事業の一環として、学生が中心となって研究科内の交流を図る文科フォーラムをすでに4回開催し、平成18年度からは、教員が中心となって行う学術フォーラムを、これとは異なる日程で2回開催して来た。研究科6専攻の横断的連携にとって大切な行事に成長した両フォーラムを、今回は一本化して開催することにした。従来の実績を踏まえたこの催しが、教員・学生一堂に会しての、さらに活発な議論と交流の場となることを、心から願うものである」と記され、計3日間にわたってさまざまなセッションが企画された。初日はオープニング・セッション、ワークショップ「地域」、レセプション、2日目は学生による口頭発表・シンポジウム「文化科学研究における地域」、3日目はポスター発表、ワークショップ「学際」である。

特筆すべきは、自己紹介を含むグループ・ディスカッションとしてオープニング・セッションを設け、これまでのフォーラム事業を全体で振り返るとともに、今後の専攻間交流の促進を図るディスカッションが行われたことである。WEB報告書によれば、「本フォーラムの大きな意義のひとつは異分野間交流であり、専攻や研究分野の異なる者同士が共に触発し合えるような場を提供することにある。そのためには、個々が立脚する方法論間の差異／ズレを相対的に意識する必要があるだろう。過去のフォーラムにおいて、そういった諸々の「差異／ズレ」を積極的に認識することが、如何に有益な学際的研究の可能性を開いてきたかという点を、続く映像セッション「これまでのフォーラムをふりかえって」にて辿った¹⁰とフォーラム事業を振り返ると共に、グループ・ディスカッションの後に、平成17-19年度のフォーラムの様態を収めたダイジェスト映像を上映して、歴代の学生企画委員より解説を加える作業を行っている。その後、ワークショップ「私にとって『地域（ローカル）』とは何か」を実施している。ワークショップの手法としては全体を小グループに分け、前述テーマに関し議論を行い、最後にグループの代表者より全体に報告する内容で行われている。このワークショップは、2日目のシンポジウム「文化科学研究における地域」を念頭として実施され、参加者同士で「地域」概念について意見交換を行うことで、各自が規定している作業概念としての「地域」を明確化することを目的としていた。

このほかに特徴的なこととして、当フォーラムよりポスター発表のセッションが教員にも開放され、この回より学生・教員によるポスター発表が定着したことがあげられる。さらに、ポスター発表を活用したワークショップ「学際」も実施されている。具体的な手法としては、初めに全体を小グループに分け、選出されたポスターについてポスター発表においてわかりにくかった点や他分野から見て魅力的な点などを、発表者を交えて小グループ内で話し合っている。続いてグループ内での意見交換をふまえ、ポスター発表者は全体の前で改めてプレゼンテーションを行っている。その後、全体投票によりベストプレゼンテーション賞を選出している。このワークショップの企画経緯について、WEB報告書には、「今回は、各々の研究成果であるポスター発表をクローズアップしたい、多分野による積極的な議論を交わす場を設けたい、という意図からこのようなワークショップを提案した。(中略)学際的な研究が求められる今日、研究者には他分野の研究者とともに新たな研究を切り開き、かつそれを

魅力的なプレゼンテーションをもって広く発信していく能力が必要とされている。今回の試みが学際的な交流やプレゼンテーション能力の向上につながる機会となったならば幸いである」¹¹と企画経緯と結果についてまとめられている。

7) 平成21年度 学術交流フォーラム2009

平成21年度のフォーラム事業は、「総合研究大学院大学文化科学研究科スチューデント・イニシアティブ事業」の一環として実施されている。フォーラム事業には、最大10名の学生企画委員が参画して、計9回の学生企画委員会を実施してフォーラムの運営に携わった。フォーラムは2009年10月17日・18日の日程で、会場は国立民族学博物館において行われた。全体テーマとして「極限の文化—人はどこで生きているか生きられるか」が設定され、国立民族学博物館との共催を実現している。初日はみんなくゼミナール、学生・教員によるポスター発表、特別展示案内が実施され、終了後にはレセプションが行われている。2日目は学生による口頭発表、シンポジウム「極限の文化—人はどこで生きているか生きられるか」が実施されている。開催趣旨文は次の通りである。

[テーマ]

「極限の文化—人はどこで生きているか 生きられるか—」

[概要]

飢餓、傷病、争乱…。人類は常にさまざまな極限状況に直面してきた。こうした危機を克服するために獲得し、生活習慣となって受け継がれてきたものが諸民族社会の文化である。食糧獲得加工の知識技術、呪術行為などの伝承や、それらの総体から創造された民族固有の神話・伝説に基づく世界像である。

総合研究大学院大学文化科学研究科の創立20周年を記念して、文化誕生の秘密を探る。¹²

当該年度では、フォーラム終了後に実施された第9回学生企画委員会において「座談会 総研大・文化科学研究科「学術交流フォーラム」をふりかえって」が行われている。当座談会では、学生企画委員・フォーラム担当教員のほかに、月刊みんなく編集担当の民博教員も参加して、学生・教員間で当年度のフォーラムを振り返っている。座談会の内容はテーマ設定の事情や委員会間の役割分担、シンポジウムの内容など多岐にわたっているが、そのなかでフォーラム事業の意義についても言及されている。

梅■わたしが入学した二〇〇六年は、フォーラムを始めたばかりで、誰も何もわからない。みんなが自由に意見を出しあって進めたのが刺激的でした。今年は経験者の荻野さんにすっかり頼りきって、他の人たちがあまり頭を使わなかったみたいです（笑）。マンネリ化もよくない。教員ももっと関心をもって欲しい。

荻野■企画委員の半分くらいは昨年からの続きで、今年はどうするかという進め方をしていました。それも意味があることですが、逆に昨年を引きずってしまって新しい発想

が出てこない。後期から参加した大森さんから「これはどういう意図で?」「どういう趣旨で?」と改めて質問されて、ちゃんと説明していなかったなあと気がつきました。梅さんが言うように、初心に戻ってフォーラムの意義を考え直す、コンセプトから問い直すことも必要だと思います。[人間文化研究機構国立民族学博物館編2010:6]

引用した発言は、前年度からフォーラムを担当した2名の委員の発言である。これによると前年度から継続して委員を務めていた人物が事業の企画立案を主導しており、そのため今年度の後期からフォーラム事業に参画した委員に対して事業の趣旨について説明を行いながら進められていたことがわかる。そうした経緯もあり学生企画委員会のなかでは改めて「フォーラムの意義を考え直す、コンセプトから問い直す」ことが必要であると言及されている。

8) 平成22年度 学術交流フォーラム2010

平成22年度のフォーラム事業は、「研究活動の組織化と成果の社会還元をめざす実践的学習プログラム」の一環として行われた。当該年度のフォーラム事業では、7名の学生企画委員が参画し、計8回の学生企画委員会を実施してフォーラムの運営に携わった。フォーラムは2010年11月6日・7日の日程で、会場を東京駅至近の貸会議場として行われた。初日は学生による口頭発表とポスター発表、終了後にはレセプションが行われた。2日目にはシンポジウム「共生」が実施されている。開催趣旨は次の通りである。

人の判断は何らかの価値基準に照らして行われる。その価値基準は通常は学術の世界とも連動している。ところが、昨今の学術を取り巻く環境はかなり変化著しいものがある。それも単に環境だけの問題にとどまらない場合が多い。今日の安易な変動は、学術の世界がいまだ本物をつかみ得ていないことを示していると感じられてならない。文化科学の学術フォーラムはその根源的な問題を思考する。シンポジウムのテーマは、異文化・異分野・異界の可能性を追求する《共生》である。

日本文学研究専攻長 中村康夫¹³

9) 平成23年度学術交流フォーラム2011

平成23年度のフォーラム事業より、現在まで続く「総合研究大学院大学文化科学研究科連携事業」の一環として実施される。最大8名の学生企画委員が参画して、計8回の学生企画委員会を実施してフォーラムの運営に携わった。フォーラムは2011年12月10日・11日の日程で、会場は国際日本文化研究センターにおいて行われた。初日は学生による口頭発表とポスター発表、終了後にはレセプションが行われた。2日目にはシンポジウム「日本の中の世界、世界の中の日本」、ワークショップが実施されている。開催趣旨は次の通りである。

今年度の学術交流フォーラムは、昨年度の評価と反省を踏まえて、これまで以上に学

生主体の事業となるよう工夫が施されています。従来どおり学生の口頭発表がなされるほか、ポスター発表でも学生の研究の成果報告あるいは中間報告を中心としました。さらに新しい試みとして、教員によるシンポジウムに引き続き、シンポジウム参加教員を核として学生のグループを構成し、グループごとのフリー・ディスカッションを行うワークショップを企画しました。シンポジウムのテーマは「日本の中の世界、世界の中の日本」です。斬新な発想と堅実な方法論に裏打ちされた教員の発表から、学生諸君がどんな研究の糸口をつかみ、どんなアイデアを引き出すか、それが見どころになります。

国際日本研究専攻長 戸部良一¹⁴

10) 平成24年度 学術交流フォーラム2012

平成24年度のフォーラム事業では、6名の学生企画委員が雇用され事業運営にあたった。特筆すべきこととして、日本歴史研究専攻の修了生1名が学生企画委員として雇用されて事務局に近い役割を担うことで、少人数の学生企画委員の能力を引き出すことに成功したことがあげられる。学生企画委員会は反省会を含めて計5回開催している。フォーラムは2012年10月21日・22日に国立歴史民俗博物館において行われ、初日に学生による口頭発表・ポスター発表・レセプション、2日目にシンポジウム「博物館の役割—集める・保つ・伝える・究める—」・ワークショップ「研究を伝える」が実施された。フォーラム開催趣旨文は次の通りである。

今年度の学術交流フォーラムは、前年よりもさらに学生の主体的な企画・立案・運営による事業としての性格が強くなっています。リサーチトレーニング（RT）事業による国内外の調査をおこなった学生を中心とした口頭発表とともに、ポスター発表も学生中心の成果報告や中間発表の場となっております。また、フォーラムでは、日本歴史研究専攻が置かれている国立歴史民俗博物館が会場となっていることにちなみ、「博物館の役割—集める・保つ・伝える・究める—」というテーマで、各専攻の教員に自己の研究における資料の扱いや公開などの手法を開陳していただき、学生からのコメントによりディスカッションを展開することにしました。さらに、ワークショップでは、テーマの「伝える」ということに焦点を当て、開催中の企画展示「行列からみた近世」や各分野の学生研究を素材にして、一般の人々にどのように効果的に伝える（展示する）かの方策を協働して考える場としたいと思います。

日本歴史研究専攻長 仁藤 敦史¹⁵

全体テーマは設定されておらず、シンポジウムのテーマとして「博物館の役割—集める・保つ・伝える・究める—」が設定されている。その他にワークショップ「研究を伝える」が開催されている。今回のフォーラム開催後、フォーラム事業の実施体制の見直しが行われる

こととなり、平成25年度の事業企画は休止されている。

以上、フォーラム事業の沿革を紹介した。沿革を踏まえることで、これまでの事業の方向性として、①学生派遣事業の成果報告、②専攻を超えた学生・教員の交流、③シンポジウムやワークショップを中核としたテーマ設定、以上の3つの方向性が認められ、フォーラム事業はこれらの方向性が並存しながら実施されてきた。3つの方向性は、学生合同フォーラムから一貫して維持されているとともに、開催年度ごとに3つの方向性がさまざまな尺度で解釈されているため、毎年のフォーラムごとに開催趣旨やプログラム内容が異なる結果となっている。開催時のプログラム内容が異なる要因としては、関与する学生・教員間の事業企画に対する合意内容や、事業の企画立案時の構想により、事業の実施形態が一定していないことが想定される。

【表1】文化科学研究科フォーラム事業の沿革

1	平成17年度 学生合同セミナー
全体テーマ：「知的資源の共有化」 開催場所・日程：ヤマハつま恋リゾート（12月12日・13日）	
1日目：海外学術交流支援事業成果報告・レセプション・学生交流会（各専攻で洛中洛外 図屏風を解説） 2日目：海外学術交流支援事業成果報告・教員講演会	
2	平成18年度 文科フォーラム
テーマなし 開催場所・日程：国立オリンピック記念青少年総合センター（9月15日・16日）	
1日目：レセプション（自己紹介・研究キーワード説明） 2日目：口頭発表（学生）・ポスター発表（学生）	
3	平成18年度 文科学術フォーラム－共通レクチャー－
全体テーマ：「ナショナリズムの歴史と現在」 開催場所・日程：京都リサーチパーク（2月24日）	
レクチャー（教員）・ポスター発表（学生）・パネルセッション（教員）	
4	平成19年度 文科フォーラム
全体テーマ：「学際的研究との出会い」 開催場所・日程：本青年館・南青山会館（9月14日・15日）	
1日目：口頭発表（学生）・レセプション 2日目：ポスター発表（学生）・ワークショップ	
5	平成19年度 学術フォーラム
全体テーマ：「「方法」の発見」 開催場所・日程：京都センチュリーホテル・アランヴェールホテル京都（9月22日・23日）	
1日目：レセプション 2日目：講演（教員）・ポスター発表（学生）・ポスターセッション（教員）	
6	平成20年度 文科・学術フォーラム2008
全体テーマ：「地域」 場所・開催日：コンベンションルームAP大阪・（12月12日・13日）	

1	1日目：オープニング・セッション(これまでのフォーラムをふりかえって(映像+解説))・ワークショップ「地域」・レセプション(実技による研究紹介)
2	2日目：口頭発表(学生)・シンポジウム(教員発表・学生コメント)
3	3日目：ポスター発表(学生)・ワークショップ「学際」
7	平成21年度 学術交流フォーラム2009
	全体テーマ：「極限の文化－人はどこで生きているか 生きられるか－」 開催場所・日程：国立民族学博物館(10月17・18日)
1	1日目：みんぱくゼミナール・ポスター発表(教員・学生)・特別展示案内・レセプション
2	2日目：口頭発表(学生)・シンポジウム(教員発表・学生ファシリテーター)
8	平成22年度 学術交流フォーラム2010
	シンポジウムテーマ：「共生」 開催場所・日程：TKP東京駅八重洲ビジネスセンター(11月6・7日)
1	1日目：口頭発表(学生)・レセプション
2	2日目：シンポジウム(教員発表)・パネルディスカッション・ポスター発表(教員・学生)
9	平成23年度 学術交流フォーラム2011
	シンポジウムテーマ：「日本の中の世界、世界の中の日本」 開催場所・日程：国際日本文化研究センター(12月10・11日)
1	1日目：口頭発表(学生)・ポスター発表(教員・学生)・レセプション
2	2日目：シンポジウム(教員)・ワークショップ
10	平成24年度 学術交流フォーラム2012
	全体テーマ：「博物館の役割－集める・保つ・伝える・究める－」 開催場所・日程：国立歴史民俗博物館(10月21・22日)
1	1日目：口頭発表(学生)・ポスター発表(学生)・レセプション
2	2日目：シンポジウム(教員発表・学生コメント)・特別展示案内・ワークショップ

※学融合推進センター教員による内部資料を改変して使用。冒頭の数字は、開催回数を示している。このほかに、文化科学研究科連携事業ホームページ(<http://www.initiative.soken.ac.jp/>)も参照のこと。

【表2】これまでのフォーラム参加者数

6	平成20年度 文科・学術フォーラム2008
1	1日目：学生32名、教員14名
2	2日目：学生25名、教員21名
3	3日目：学生27名、教員14名
7	平成21年度 学術交流フォーラム2009
1	1日目：学生28名、教員23名、修了生7名、事務15名、ゲスト1名(計74名)
2	2日目：学生27名、教員19名、修了生4名、事務14名、ゲスト1名(計65名)
8	平成22年度 学術交流フォーラム2010
1	1日目：学生24名、教員22名、事務11名(計57名)
2	2日目：学生24名、教員18名、事務11名(計53名)
9	平成23年度 学術交流フォーラム2011
1	1日目：学生26名、教員16名、事務13名(計55名)
2	2日目：学生18名、教員15名、事務12名(計45名)
10	平成24年度 学術交流フォーラム2012

1日目：学生17名、教員23名、事務16名（計56名）

2日目：学生21名、教員18名、事務17名（計39名）

※基盤総括事務係の調査による。冒頭の数字は、開催回数を示している。1～5回目の参加者数については正確な資料は残されていない。6回目については、事務職員の参加者数が不明であるため、合計参加者数は不明である。

2. 事業実施に向けた構想

1) 個別企画方式の導入

今年度フォーラム事業の構想は、前年度にあたる2014年1月7日に国立民族学博物館にて開催されたフォーラム検討委員会より始められた。文化科学研究科内の教育プログラムの改変とコースワークの設置に伴い、フォーラム事業は1年間事業を休止していた。そこで再び事業を再構想するため「学术交流フォーラム検討会」が開催される運びとなった。本検討会には、学術資料マネジメント開発委員の教員、学融合推進センターの教員、そして地域文化学専攻・比較文化学専攻・国際日本研究専攻・日本歴史研究専攻の各専攻より計6名の学生が出席し、次年度のフォーラム事業の実施内容について意見交換が行われた。

このとき地域文化学専攻の代表として出席し、後に学术交流フォーラム2014の学生企画委員長を務める東城より、立命館大学先端総合学術研究科が導入している教育プログラムPBPの理念の応用による事業運営が提案されている。以下、今回のフォーラム事業と関係する立命館大学先端総合学術研究科の採用するPBP（プロジェクト・ベースト・プログラム）について紹介したい。

2003年に設立された立命館大学先端総合学術研究科では、学内の研究所・センター群との連携によるプロジェクトを基礎とした新しいタイプのコースワークが導入されている〔渡辺2005〕。今回の事業設計にあたって参照した考え方に、コースワーク設計の背景となる考え方のPBPがある（今年度のフォーラム事業とは直接関係しないためコースワークの紹介は省略する）。以下、PBPの概要を紹介する

研究所・センター群との連携によるプロジェクト研究を基盤とした本研究科の基本的発想は次の4つの特徴を持っている。1つ目はプロジェクト運営の実践の中で研究力量を鍛えること（広義のOJT－オン・ザ・ジョブ・トレーニングともいえる）である。2つ目はプロジェクトの成立には、院生自身の強い問題意識と明確な研究テーマが求められるということである。3つ目はそのような院生の問題意識を尊重し、伸ばしつつ統合できる柔軟なプロジェクトを立ち上げることである。4つ目はプロジェクト運営をスキルとして教育しうるプログラムであるということである「魅力ある大学院教育」とは何よりも、院生自身の研究テーマを深化させ、博士論文につなげられる場でなければならない。こうしたプロジェクトを基礎としたプログラムを私たちはPBP（プロジェクト・ベースト・プログラム）と呼んでいくこととする〔渡辺・片岡2008：38〕

PBPの基本的発想として提示されている4つの特徴のうち、「プロジェクト運営の中で研究力量を鍛えること」「院生自身の強い問題意識と明確な研究テーマ」「院生の問題意識を尊重し、伸ばしつつ統合できる柔軟なプロジェクトを立ち上げる」「プロジェクト運営をスキ

ルとして教育しうるプログラム」という部分について、1年単位の活動になるフォーラム事業においても有効に活用できると勘案した。その理由は、フォーラム事業の性格にある。これまで触れてきたように、フォーラム事業は文化科学研究科における大学院教育プログラムの一環として位置づけられており、事業の企画と運営は学生側が担うこととされてきた。その一方で、教員側は学生による事業の企画と運営を管理する側にあり、フォーラム事業の企画と運営を学生の今後の研究活動に結びつく実践的なトレーニングとして位置づける必要がある。学生と教員との協働としては、学生が自身の関心に沿った企画を立案して教員に提示することで、教員は人文科学における研究上の潮流やこれまでの学術活動の経験に沿って助言を行うことが基本となる。これによって学生自身の研究テーマに沿った事業企画が可能になるとともに、学生は能動的な企画立案作業を通して、現在取り組んでいる研究テーマの洗練や問題意識の深化が期待される、大学院教育プログラムとしてフォーラム事業を位置づけることが可能となる。さらには、フォーラム事業を一般公開型の事業として定着させることで、研究内容のアウトリーチの方法を探究する場として機能させることが可能であると予想されたためである。

また本委員会では、本学生命科学研究科において実施されている、異なる専攻間の学問的交流により広い視野を持つ人材の育成を目的にした教育プログラム「生命科学リトリート」（以下、リトリートと略す）も紹介された。リトリートは生命科学研究科に所属する教員6名・学生14名による「リトリート運営委員」によって運営されており、プログラム内容の企画立案は学生が、事務調整については教職員が担っている。リトリートは研究内容の発表以外に、ディスカッション・プレゼンテーション・語学対応力の養成を含んだ教育プログラムとして、研究科・専攻内において必要な事業であると認知されている。総じてリトリートは教育プログラムとして教員間における合意形成のもと実施されており、フォーラム事業が学生主体であるのに対して、リトリートは教員主体であることが特徴である。

このように、リトリートは教員間の合意形成のもと大学院における教育プログラムとして確立されているのに対して、学生が主体となるフォーラム事業では、学生側の企画立案を文化科学研究科長・フォーラム担当教員を通して教員側に協力を要請する形式をとるため、リトリートの運営方式をそのままフォーラム事業に応用するには、教職員と学生側とのさらなる連携が必要であると予想された。また博士論文執筆が活動の中心となる博士後期課程の学生にとって、学生・教員間の交流を目的とする事業では、博士論文の執筆に直接関わらない作業が増加することや、キャリアパスに直結する活動として認知されていない現状から、企画立案にあたる学生企画委員にとって、フォーラム事業に加わる魅力や意義といったモチベーション維持が課題になると想定された。それゆえ今回のフォーラム事業構想においては、フォーラム事業に参画する大学院生が能動的に活動することで、問題意識の深化と研究テーマの洗練の可能性が見込まれるPBPの理念を参照することとした。

2) 事業構想

続いて、事業構想について触れる。まず事業実施にあたっての予算である。今回のフォー

第1部 事業概要と経過報告

ラム事業は、総合研究大学院大学学融合推進センターの公募事業である学融合教育事業「次世代研究者育成教育プログラム」の枠を利用して活動予算を捻出することとなった。そこで、文化科学研究科地域文化学専攻長の佐々木史郎教授が事業担当者となり、「学術交流フォーラム「学術資料から歴史を読み解く」の開催」と題した主題で事業申請を行っている。この事業申請書には、事業の概要・期待される成果・中期目標・計画との関連性が提示されている。はじめに事業の概要としては、「学生と教員が協力し、学術交流フォーラムを実施する。その目的は文化科学研究科所属の全専攻の学生と教員が交流し合うことで、教育・研究の質の向上と、最新の研究に関する情報を交換し合うこと、そして本研究科の教育研究成果の一端を全学並びに一般社会に公開することにある。フォーラムのタイトルは「学術資料から歴史を読み解く」（仮題）とし、「歴史」を研究するために、資料、史料、試料からなる学術資料類をいかに活用するのかをテーマとする予定である」とされる。続いて期待される効果としては、「フォーラムでは研究報告（口頭、ポスター）と質疑応答だけでなく、各専攻に豊富に存在する学術資料類の収集、保存、管理、分析、記録化などについてのワークショップも実施する。それによって、学生の研究能力とプレゼン能力の向上とともに、学術資料の取り扱い技能の向上も期待できる。また教員にとっては他の研究分野における資料類の取り扱い方を知る機会ともなる」と掲げられている。最後に、中期目標・計画との関連性として「本事業は、中期目標・中期計画で謳われている「専攻や研究科を横断する教育研究活動を行うための教育体制の整備」、「専攻間の分野を横断し、新たな学問領域の開拓にもつながる科学の総合性」といった教育に関する目標と計画を達成することを目指している。研究分野を横断する教育活動を通じて、「高い専門性」と「国際的な通用性」を兼ね備えた人材育成を図る」ことが掲げられている。

以上のような申請内容のもと、2014年2月21日に平成26年度学融合教育事業ヒアリング審査が行われている。その際のプレゼンテーションにおいて、従来までの学術交流フォーラムについて、以下の4点について課題とそれに対する解決策が示された。1点目として事務局調整等の作業による学生側の負担が認められることから、解決策として本学修了生を事務局として登用することで、在学生を支援する方向性が提示された。2点目として学生のフォーラムに参加するモチベーションの確保が課題として示され、これに対しては単位の確保、業績評価、賞の設置などによって対処することが掲げられた。3点目として教員の関心と参加意欲の盛り上がり不足が指摘され、準備段階からの教員の積極的関与と参加費用の確保とが解決策として掲げられた。4点目として開催基盤や学生・教員側の都合による開催日程の調整の難しさが指摘され、これについては早い段階から準備を行うことで対処することで解決可能であると示された。以上の課題と対応策がプレゼンテーションによって示され、総研大学学融合推進センターにおいて事業内容の審査が行われた。その結果、本事業は採択され、3,335,000円の予算枠が設定された。

事業申請の一方で、開催予定の基盤機関となる国立民族学博物館では開催に向けた準備が進められた。2014年3月19日に国立民族学博物館4階大演習室において、次年度の学術交流フォーラムに関する打ち合わせが実施されている。本学における特別経費プロジェクト採択

事業「学術資料マネジメント教育プログラム開発によるグローバルな人文研究者の養成機能強化」¹⁶を担当する学融合推進センター教員が準備の中心となり、平成26年度に実施予定の学術交流フォーラムの概要について「開催日程」「事務局員の雇用」「フォーラムの方向性および実施内容について」の3点について検討が行われている。次年度学生企画委員の東城が中心となって開催構想を練り、佐々木史郎教授を中心とする学術資料マネジメント教育プログラム開発委員の教員、および学融合推進センターの各教員が助言を行うことで、実施にあたっての事業の方向性や意義について模索された。このように平成26年度のフォーラム事業は、事業実施の予算を学融合推進センターの学融合教育事業へ申請することで捻出するとともに、特定人物がチームリーダーを担当することを前提として事業企画の構想が立てられた。

3) 学生企画委員の業務

以上のように、本年度のフォーラム事業は平成25年度末までにおおよその事業構想が練られた。そしてフォーラム事業企画に参画する学生は、平成26年度4月に各基盤機関内の専攻において1～2名決定され、学生企画委員の名称で総研大文化科学研究科のリサーチアシスタント（RA）として雇用される。この学生企画委員による活動は、学生企画委員事業とされ、「文化科学研究科連携事業」の各事業（『総研大文化科学研究』刊行事業や学生派遣事業、FD推進事業を指す）を推進するために、文化科学研究科の各専攻に配置されている。この学生企画委員に加え、フォーラム担当教員・基盤総括事務係が事業企画の中核となり、第1回の学生企画委員会の開催へと段階を進むことになる。

なお学生企画委員の雇用は、「平成26年度学生企画委員事業実施要領」に則り行われる。当事業実施要領には、学生企画委員の業務内容は次のように定められている。

（学生企画委員の業務）

- 4 学生企画委員は、リサーチアシスタント又はティーチングアシスタントとして雇用する基盤機関が定めた業務を遂行するもののほか、本プロジェクトの事業を推進するとともに、所属する専攻の専攻長等の指導又は助言を得て、学生の研究活動に対する研究的または教育的支援に係る次の各号に掲げる業務を行う。
 - (1) 学生が所属する専攻以外の専攻を置く基盤機関等の研究環境を活用するときに、当該学生の研究計画作成等の相談又は助言、並びに当該基盤機関等における研究活動等の支援を行う業務
 - (2) 学生が所属する専攻が実施する中間論文報告会又は博士論文公開審査会、もしくは当該専攻を置く基盤機関等が実施する研究会その他の事業に係る情報収集又は学生周知等支援業務
 - (3) 文化科学研究科が主催するフォーラム等の企画・運営に関する業務
 - (4) 前各号に掲げるもののほか、事業遂行により学生の研究能力又は教育能力の開発、育成に資すると専攻長が認めた業務

以下、各項目を確認すると、(1)は他専攻の学生が、他専攻の設置されている基盤機関を利用できるよう「研究計画作成等の相談又は助言」することと、配属基盤機関における「研究活動等の支援を行う業務」への従事が明記される。続いて(2)においては、学生企画委員の所属する専攻の「中間論文報告会又は博士論文公開審査」、及び「基盤機関等が実施する研究会その他の事業に係る情報収集又は学生周知等支援業務」と記載されており、こちらも所属専攻・配属基盤機関における研究活動情報の収集と周知という、所属院生に対する研究支援業務への従事が約束されている。そして(3)において、ようやくフォーラム事業に関する記載として、「フォーラム等の企画・運営に関する業務」が職務内容として明記される。その他(4)においても、「学生の研究能力又は教育能力の開発、育成に資すると専攻長が認めた業務」という学生の研究活動に対する支援について言及されている。このように(1)～(4)の業務内容を確認すると、学生企画委員の業務とは、学生に対する研究的教育的支援¹⁷を業務内容としていると規定できる。

3. 学生企画委員による開催趣旨の検討

学生企画委員会の経過については、第2部と重複することになるが、今年度のフォーラム事業の概要に関わる範囲で記述を行う。

年度ごとのフォーラム事業のテーマや内容は、学生企画委員会において検討され、1つ1つの議題ごとに学生・教職員のあいだで合意形成が図られる。そして合意形成された議題に即して、学生企画委員・教職員の間で特定のタスクが設けられる。設けられたタスクを、学生・教職員側で次回の学生企画委員会までに消化することが、フォーラム実施までの流れとなっている。そしてフォーラム終了後は、フォーラム実施時に生じた事項の振り返りを実施するとともに、WEBによる実施報告書の作成を行う。WEBによる実施報告書の完成を待って、1年間にわたるフォーラム事業は終了となる。

毎回の学生企画委員会の開催にあたっては、まず学生企画委員長側と基盤総括事務係で開催通知を作成して専用のメーリングリストに連絡を行う。開催通知者は文化科学研究科長とフォーラム担当教員である。そして学生企画委員長が、委員会の議事次第とその時々で委員会が必要となる資料を作成する。これに基盤総括事務係側が議事進行に必要な事務資料を追加して、全ての資料を統合したうえで当日配布資料が完成する。そして委員会前日までに、メーリングリスト等で各基盤の学生企画委員・教職員に事前に配布される。

今年度の第1回の学生企画委員では、顔合わせ、今後のスケジュール確認、協働のあり方についての確認、事業運営の方向性について意見交換が行われている。委員の顔ぶれは、次の通りである。民博に設置されている地域文化学専攻からは、人類学・民俗学・環境教育研究の立場から動物救護活動や狩猟活動を研究する東城義則が、同じく民博に設置されている比較文化学専攻からは、人と鳥類の関係を人類学・美術解剖研究の立場から研究する西山文愛が学生企画委員に就いている。国際日本文化研究センターに設置されている国際日本文化研究専攻からは、近世の音楽療養史・医学史を専門とする光平有希と、近現代の動物愛護運動史を専門とする春藤献一とが委員を務める。国立歴史民俗博物館に設置されている日本歴

史研究専攻からは民俗学の立場から民俗芸能研究を行う鈴木昂太が委員に就いている。そして国文学研究資料館に設置されている日本文学専攻からは、中世日本文学における『徒然草』の漢籍受容を研究する黄昱が委員に就いている。そして学生企画委員長には東城が就き、事業として学術交流フォーラム2014は正式にスタートすることとなった。

【表3】フォーラム企画案の対比表

フォーラム企画案の対比表 (平成26年8月21日作成)

提案者	テーマ	開催趣旨	keyword	プログラム						その他 特記事項
				口頭 発表	ポスター 発表	パネル ディスカッション	シンポジウム	ワークショップ	展示 見学	
東城	いくつもの史料 いくつもの総研大	文化科学研究科内に多様な専門分野の学生・研究者が併存していることを確認したうえで、お互いの研究手法について理解を深めるとともに、自分の研究内容・分析手法の外溢を広げることを目的とする。 ただし、楽しく学び語りあふれあう場としてフォーラムを設定する。学生・教員・外部研究者同士の交流でゆるやかな研究交流を実現させつつ、新たな発想・着想を得る場としての役割をもたせる。	研究内容・手法の外溢を広げる 交流による新たな発想・着想		○	○	○	○		交流会 (夜の部) 賞の設定 一般公開
西山	聞いて美味しい、見て美味しい、食べて美味しい、そして食べられフォーラム!	おながが高たされると、人は来る!はず! 食の場は、人と人とのコミュニケーションが円滑になると考えています。食べて、飲んで、沢山の人と交流する事で、各々の学術発展につながるのではないのでしょうか。 生きていく上でかかせない食。みんなの研究者の方々にはフィールドで様々な地域の食を口にしていたり、文学や日本の歴史においても食は共通して語る事の出来るテーマではないでしょうか。 フォーラムと言う機会に、自身の研究外の事をリサーチして発表する事で何かしら得る機会になるのではと考えております。	飲食 交流 他分野の研究動向を知る			○	○		○	食品展示 食事会 映画上映
春藤	歴史研究の技術を探ろう	学術資料を入手する技術を共有することで、研究を加速させる 最先端の研究の話+(マニアックな)学術資料を入手する技術の話が聞きたい! 新しい研究手法を知ることで、新しい資料を発見できる可能性が生まれる ・他分野の研究手法を知ることで視野が広がる ・発表の場、発表練習の場 ・交流の場 ・同じ研究科の学生や教員が何をしているかを知ることができる(重要)	発表の場 交流の場 情報収集の場	○	○		○	○	○	アンテナの事前実施
光平	「史料」を見る・聞く・読む・伝える	「史料」には文字で書き記された文獻のほかに、考古学上の遺物・遺跡や、絵画・写真・音楽などの芸術作品、さらにはオーラル・ヒストリーや、伝統芸能を含む各種事象など、多岐にわたるものが含まれている。 学生の多くは何らかの「史料」を見る・聞く・読む(読み解く)・「伝える」ことを通じて研究を重ねていると思われるが、自身の研究領域以外での「史料」を用いた研究手法や過程に直接触れる機会はあまり多いとはいえない。 今回、本フォーラムで「史料」に関し、多領域における研究手法や研究過程を幅広い観点から検討し、学術交流することは、学生にとって、同領域の研究からは相互理解のもとに異なる研究の深化を、また他領域の研究からは研究における新たなヒントを得る機会になると考えられる。	史料・資料 他の研究手法を知る 相互理解による研究深化、ヒントの獲得	○	○		○	○	○	ゼロの開催
鈴木	今、歴史をどう読むか —史料・メディア・パフォーマンス—	歴史を伝える「史料」、博物館や出版物という「メディア」、ダンスや音楽、民俗芸能という「パフォーマンス」に焦点を当て、それぞれの資料が持つ情報から、歴史をどう伝え、どのように生かすことができるのかを議論し、発信する。 発表者には、自身が扱う資料(対象)がどのような性質のものであり、それを用いることによって歴史研究のなかでこんな良い点があるということや、その資料が持つ力(政治性だったり、新たな語り(編り)を創る可能性)を前座に話してもらい、資料に対する批判を経て歴史を語る営みの場にしていきたい。 狙いは、文化科学研究科の学生にとって共通する「歴史」をキーワードにして、総研大生が研究していることを公開の形で発表することです。(多くの学生にしっかりと口頭発表してもらいたいので、モチベーションを上げる方を考えないと) —それによって、業績の一つになる。 普段会うことができない神楽の伝承者とワークショップを通じて交流するとともに、音と舞という身体技法で歴史を伝える方法に実際に触れてみる。	資料のもつ情報を引き出す 歴史を伝える、生かす 公開 交流	○	○		○	○	○	神楽公演 一般公開
黄	資料・史料との対話	各専攻の研究において資料・史料の扱い方など、他分野の人に自分の分野の研究方法を伝え、お互いの分野の研究方法を知ることを目指します。 皆さんは普段は自分の研究分野だけに集中して研究しておられると思いますが、学術などでも他分野の研究を知りたいとは思っていません。せつかく文化科学研究科にこれだけの専攻が揃っているので、お互いの分野の事を知り、自分の研究の刺激にもなると思いますし、交流の場と発表の場にもなり、いかに全く違う分野の人に自分の研究分野の方法や意義をわかりやすく伝えるかの練習の場にもなります。	資料・史料の扱い方 交流の場 発表の場	○	○		○	○	○	

6月16日に開催された第1回学生企画委員会では、チームリーダーとなる学生企画委員長側で、先に示した個別企画方式の導入を前提としたうえで、プログラム内容の勘案と研究

成果の公開・共有（アウトリーチ）方法についての検討を開始した。そこでまず開催趣旨を定めるため、委員長よりメーリングリストを用いて、各学生企画委員に企画案の提出を求めた。提出された企画案をもとに、7月10日に開催された第2回学生企画委員会において全体テーマと開催趣旨の方向性について合意形成を目指した。だが同委員会は、台風の影響により急きょ各基盤機関を繋いだTV会議となり議事進行に支障が生じた。そのためテーマ・企画趣旨・セッション内容の確定は、8月21日に開催された第3回学生企画委員会まで持ち越されることになった。

第3回企画会議では、第2回学生企画委員会において各委員が提示したテーマ・セッションの企画案を【表3】の通りまとめ全体で意見交換を行っている。そして前回までの各学生企画委員の意見に加え、第3回学生企画委員でも改めて全体テーマについて意見交換が行われた結果、全体テーマとして鈴木委員より「文化をカガクする？」が提案され、学生・教員の合意形成のもと全体テーマとして設定された。そしてテーマを補完するサブタイトルは設けず、ワークショップや研究公演のセッションを統合する企画趣旨が構想されることになった。その結果、学生企画委員長より、最終的に下記のような開催趣旨が提示された。

学术交流フォーラムが2年ぶりにかえってきました。今回のテーマは「文化をカガクする？」です。

私たちの所属する文化科学研究科は、5つの基盤機関においてさまざまな対象を扱い、多様な方法論を用いて研究を進めています。それゆえ同研究科に所属する私たちにとって、“カガク”とは人文科学の規範に根ざした学術研究を指しているといえます。しかしそれは特定の普遍的な分析手法が確立される代わりに、価値判断の留保がなされる“science”とは異なるものであり、明確な定義を行うことは難しいのが現状です。それでも最大公約数的には、文化を“カガク”する営為には、以下の2つの内容が含意されているはずで、1つめは研究に関わる者として、先行の研究史や方法論を咀嚼することで、次世代の人々のために新たな知識を産出するという事です。2つめは現代社会を形成する一員として、成果創出の過程で生じた知識や経験を、人々と分かち合い、よりよく生きるための理念や価値を生み出すということです。このことは「公共」という言語を冠した研究領域が、さまざまな研究分野で出現している状況からも窺うことができます。

以上のような現状認識のもと、学术交流フォーラムの再出発にあたり、私たちは学生・教員間の交流を通して、各自が取り組んでいる研究課題の特徴、各研究分野において蓄積されてきた研究方法論の役割について考え共有することを目的としました。

これらを達成するため、本フォーラムは次のセッションから構成されます。意見交換と問題解決を促進する口頭発表・ポスター発表、総研大のプロジェクトを知るパネルディスカッション、音に親しみながら研究に用いる「しりょう」の様態を問いなおす探究型ワークショップ、イスラム文化圏に伝わるレシピの再現を通して中東地域特有の食と慣習を体系的に学ぶ体験型ワークショップ、そして身体表現と伝承の役割を再考する神楽の公演です。私たちはこれらのセッションを通して、改めて文化科学研究科における

学術研究“カガク”のいまを、参加の方々とともに考え共有することで、人文科学の研究が担う“文化”の未来について発信します。

今回は全セッションを一般公開いたします。また他研究科の方の発表、他大学一般の方の参加も歓迎します。多くの方々の参加をお待ちしています。

学生企画委員長 東城義則

これまでのフォーラム事業でも実施されてきた口頭発表とポスター発表のセッションは、文化科学研究科学生派遣事業に申請して調査活動や成果報告を行った学生や、その他の希望する学生・教員の研究成果を発表する場として引き続き実施されることとなった。その他にパネルディスカッションやワークショップ、研究公演など、現在の人文科学における研究課題や潮流について主催者参加者の間で共有できる内容を目指すとともに、研究内容のアウトリーチに関わる部分を全面に提示することを目指した。

このような背景のもと、学生・教員間の意見交換により、平成26年度の学術交流フォーラムでは、口頭発表・ポスター発表・パネルディスカッション・ワークショップ・研究公演の各セッションが企画立案された。そして学生企画委員長の主導により、各セッションには企画責任者として1名ないし2名の学生企画委員が就き、企画責任の委員が中心となって個別企画の立案を行う方式を採用した。これによりフォーラムの運営は、近年採られていた学生企画委員長・フォーラム担当教員が中心となって関係者全員でフォーラム全体を管理運営する全体管理方式から、個別企画の拡充によって複数の魅力ある企画を準備する個別企画方式へと変更された。この結果、各企画責任者の研究内容や問題意識が最大限に発揮されることになり、従来までにはみられなかった各企画責任者の学術的実践的背景を確認することのできる企画が立案されることとなった。特に料理体験ワークショップ、音・音楽ワークショップ、研究公演の3つのセッションは、企画担当者の研究内容、開催基盤である国立民族学博物館の博物館としての機能と役割、そして企画立案に能動的に取り組むことで、日々の学術論文執筆作業からでは得ることの難しい、さまざまな関係者とのコミュニケーションによる問題意識の涵養と、多分野の方々と触れることで生じるアウトリーチ活動に対する意識の深化が各担当委員のなかで図られた。

同時に文化科学研究科内の学術成果の共有と発信を目指すため、学融合推進センターにて採択されている学融合共同研究事業の代表者・共同研究者の方にパネルディスカッションを依頼した。「共同研究から見つめる文科のいまとこれから」とテーマ化したパネルディスカッションでは、文化科学研究科で行われている研究動向や共同研究のあり方について共有することを目標とした。さらにこれに加え、従来の口頭発表とポスター発表を行うことで、大学院生・教員による学術成果の共有と発信を実現させている。

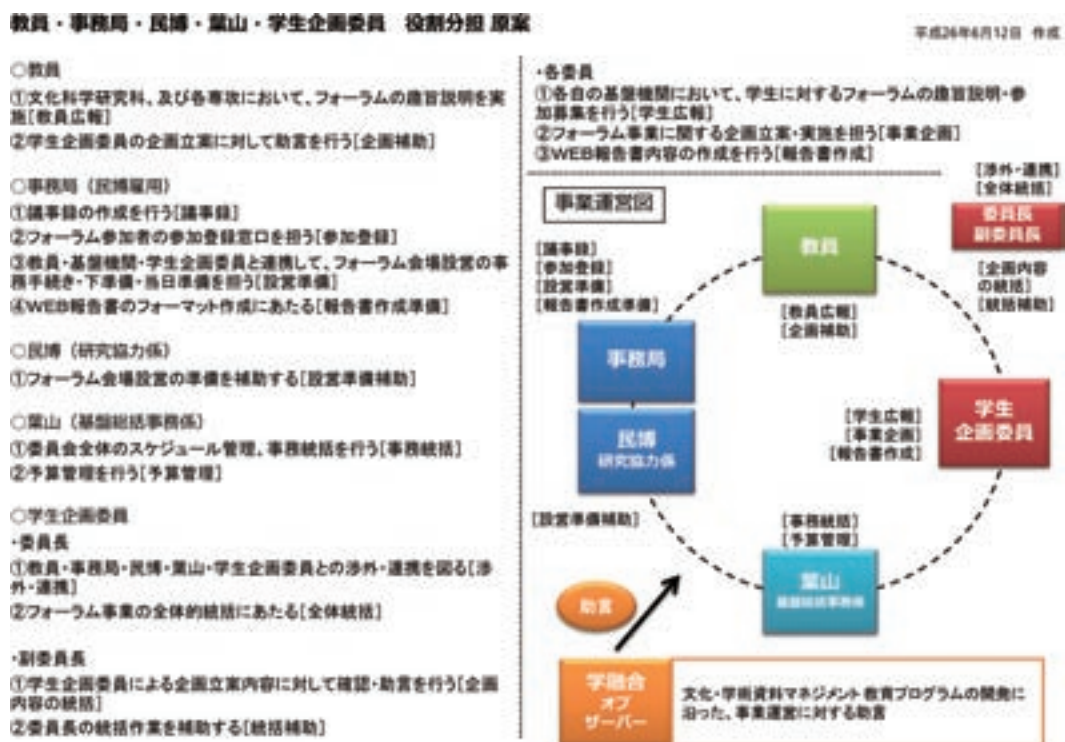
前述したフォーラムの全体テーマである「文化をカガクする？」は、これらの各企画の構想を支える問題設定としての役割を果たしている。人文科学による学術研究の意義と役割について、さまざまな場面において問われるなか、本テーマの「文化をカガクする？」とは、

文化科学研究科の学術研究「カガク」のいまを、主催者・参加者でともに考え共有することで、人文科学の学術研究が担う「文化」の未来について発信する狙いが込められている。特に今回は、「しりょう」（資料・史料・試料）の役割・意味に注目することで、学術研究のかたちを人びとと共有する方法や発信する手段を共通の課題にすることとした。これにより全体テーマ「文化をカガクする？」には、研究方法や発信方法の異なる全セッションを繋ぎ合わせる役割が与えられ、主催者参加者ともに全体の内容を整合して把握することが可能となった。

4. 協働のあり方

フォーラム事業は、学生・教職員間の協働で取り組む事業である。今回は初めてフォーラム事業に参画する学生がほとんどを占めたことから、事業の開始にあたり各担当の分掌体制を図式化して参画メンバー全体で共有する作業を行っている。その際に作成されたのが【図1】にあたり、第1回学生企画委員会において分掌体制と協働のあり方を示すために用いられた。

フォーラム事業に参加する教員は、文化科学研究科長と開催基盤にてフォーラム事業を担当する教員である。教員の役割は、①文化科学研究科、及び各専攻において、フォーラムの趣旨説明を実施すること、②学生企画委員の企画立案に対して助言を行うこと、とした。またフォーラム担当教員については、後述する基盤総括事務係に対して予算執行に対する指示を出すこととなっている。



【図1】 教員・事務局・民博・葉山・学生企画委員 役割分担 原案

続いて国立民族学博物館側と労働条件等に関する調整を図ったうえで、本学修了生で国立民族学博物館外来研究員の宮脇千絵に事務局の業務を依頼している。事務局の役割は、①各会議の議事録の作成、②フォーラム参加者の参加登録窓口を担う、③教員・基盤機関・学生企画委員と連携して、フォーラム会場設営の事務手続き・下準備・当日準備を担う、④WEB報告書のフォーマット作成にあたる、とした。ただし事務局制度は今回のフォーラムから試験的に導入されたものであり、フォーラムの規模や実施体制により、その役割は事業の進捗に伴い流動的になることが予想された。なおフォーラム会場となる国立民族学博物館の側では、管理部研究協力課研究協力係が窓口となり、フォーラム当日の設営補助を担うこと、とした。

基盤総括事務係の役割は、委員会全体のスケジュール管理・事務統括を行うこと、②フォーラム担当教員の指示のもと予算執行を行うこと、となっている。

学生企画委員長の役割は、①教員・事務局・民博・基盤総括事務係・学生企画の間の渉外連携を図ること、②フォーラム事業の全体的統括にあたること、としている。学生企画副委員長は、学生企画委員による企画立案内容に対して確認・助言を行うこと(企画内容の統括)、②学生企画委員長の統括作業を補助すること、を役割とした。最後に学生企画委員の役割については、各自の配属されている基盤機関において、①学生に対するフォーラム趣旨の説明と参加募集を行うこと、②フォーラム事業において実施する企画の立案と実施を担うこと、③文化科学研究科内にて行う、WEB報告書の作成を行うこと、を役割とした。

なお総研大の特別経費プロジェクト分採択事業「学術資料マネジメント教育プログラム開発によるグローバルな人文研究者の養成機能強化」の一環として、文化科学研究科連携事業における教育プログラム設計を担う学融合推進センター教員は、オブザーバーとしてフォーラム事業の企画運営に関わることになる。

以上のような役割分担を行うとともに、図を作成して共有することで、学生企画委員・教員・基盤総括事務による分掌体制を可視化して把握できるよう務めた。なおこのほかに、音・音楽ワークショップのセッションにおいて国立民族学博物館の収蔵品を利用した関係から同館情報企画課標本係と、そして研究公演のセッションにおいては同館講堂を施設利用したことから同館管理部広報企画室企画連携係と実施内容や施設利用の形態について調整作業をおこなっている(同館との連携については、第3部の報告を参照のこと)。

以上のようにフォーラム事業における分掌体制とそれに基づく協働のあり方は、持続的な実施によって学生・教職員間の確立された部分がある一方で、年度ごとに参画する学生や教員の事業に対する事業の捉え方や背景となる大学院教育プログラム事業の予算額により、年度ごとに分掌体制や役割分担に相違が生じる。そのため、学生・教職員の顔合わせとなる第1回の学生企画委員会において、当該年度の分掌体制と協働のあり方をすり合わせる必要がある。

5. 当日の様子

以上のように学生企画委員長が中心となり、フォーラム実施の基礎となる事業設計を行うとともに、今年度のフォーラム事業における協働の枠組みを可視化することで、事業に参画

第1部 事業概要と経過報告

するメンバー全体でこれからの協働のあり方を共有できるよう務めた。これ以後、おおよそこの協働の枠組みに沿って、全体統括と個別企画の準備とが進められることになる。各学生企画委員会における議論の流れについては第1部の事業経過の記述を、各個別企画の内容と実施までの経過とについては第2部・第3部の記述を参照していただきたい。事業概要の紹介を中心とする本章においては、事業設計と協働の成果を確認するためにフォーラム当日の様子とフォーラム後の反省会とについて触れる。

フォーラムは、2014年12月20日（土）・21日（日）の2日間にかけて実施された。初日は、まず国立民族学博物館第5セミナー室において、13時より開会式が行われ、稲賀繁美文化科学研究科長の宣言と東城義則学生企画委員長による趣旨説明が行われた。続いて第3セミナー室と第5セミナー室を会場として口頭発表が行われた。口頭発表の後、1階のエントランスホールを会場として、学生・教員によるポスター発表が行われている。口頭発表では、総研大生と修了生による口頭発表が6題、他研究科の学生も加わったポスター発表が23題にのぼった。ポスター発表終了後には、学融合共同研究事業に関するパネルディスカッションが行われ、第2セミナー室では「観相資料の学際的研究」が、第5セミナー室では「在ハワイの日本歴史・文化資料をめぐる国際共同研究—ハワイにおける日本文化の受容」の成果報告とディスカッションが行われている。共同研究の構想背景や実際の経過、その後の成果について、教員・学生・外部研究者からの報告とフロアからの質疑応答とが行われた。終了後、パネルディスカッションに参加した方々にはコメントペーパーを記入していただき、懇親会場においてコメントペーパーを提示することで、報告参加者のあいだで報告内容についての意見交換を促進できるよう配慮した。

2日目は10時から2種類のワークショップを実施している。1つ目のワークショップは、料理体験ワークショップ「総研大クッキングスクール：パレスチナシャーム地方のムジャッダラを食す」である。本ワークショップの企画責任は、比較文化学専攻の西山文愛委員である。国立民族学博物館の石毛直道名誉教授が、民博4階生活科学実験室において教職員向けのクッキングスクールを開催していたことを西山委員が知り、自身の料理に対する学術的関心に加え、創作活動の多様な実践的可能性まで踏み込むことで当ワークショップは構想された。総研大の多様な分野の学生・教員に食の文化を体験して、特定の学術的テーマを共有できるスタイルを目指した結果、西山委員は食に用いられる具材や調味料を「しりょう」ととらえることで、味覚・嗅覚・触覚・視覚・聴覚の五感を用いて加工して食する体験を前面に出した、食にまつわる「文化」を学び共有するワークショップを企画立案した。当日は国立民族学博物館の菅瀬晶子助教にレクチャーを依頼し、参加者全員で該当地域の家庭料理であるムジャッダラを調理することで、料理を通して伝わる文化的背景や地理的条件について学ぶ体験ができるよう考慮した。これによって、五感を通して「しりょう」を把握する体験の共有が達成された。

2つ目のワークショップは、音・音楽ワークショップ「寄り添いの音・音楽—伝える・祝う・送る—」である。企画責任は、国際日本研究専攻の光平有希委員が務めた。音楽療養思想の研究に取り組む光平委員が、民博の収蔵品を用いたうえで、音・音楽の多面的な側面に

ついて参加者と共有することを目標とした。構想にあたっては、光平委員が関心を寄せていた音・音楽を用いた「伝える・祝う・送る」場に注目することで、「しりょう」としての音・音楽が多様な様態をとることに着眼した。そこでまず国立民族学博物館外来研究員の伊藤悟氏にひょうたん笛の演奏を依頼し、音・音楽に対する人びとの感性を主題として扱うこととした。続いてガムランを用いた音楽普及活動を行うチャンドラ・バスカラに、ガムランの演奏と舞踊の実演を依頼するとともに、本学メディア社会文化専攻の仁科エミ教授にはガムラン音に関するレクチャーを依頼することで、ガムランの演奏と舞踊がもたらす共同体内での役割や音を感受することで生じる脳反応について扱った。そして最後は、主催者参加者が一同になり、民博に収蔵されているガムランを用いた楽器の実体験を行っている。こうして「しりょう」のあり方、「しりょう」とのかかわり方、「しりょう」を通して人びととつながる可能性について、主催者・参加者をはじめ多くの方々と共有された。

そして13時から研究公演「大元神楽研究公演」が行われた。本セッションのみ、国立民族学博物館との共催である。企画責任は、日本歴史研究専攻の鈴木昂太委員が務めている。鈴木委員は中国山地において、民俗学（民俗芸能研究）の立場から神楽の研究を進めており、今回は鈴木委員の調査研究活動の一環で信頼関係（ラポール）のあった、島根県江津市で活動する市山神友会による大元神楽の公演が実現した。研究公演のセッションでは、はじめに市山神友会の方々より「太鼓口」「御座」「鐘馗」「五龍王」の4種の演目が公演された。そして慶應義塾大学の鈴木正崇教授、市山神友会会長の本山徳幸氏に鈴木委員を交え、民俗芸能研究の成果と今後の課題について意見交換するパネルディスカッション「大元神楽のイマ―無形文化財制度と民俗芸能伝承活動」が行われている。国立民族学博物館の展示室には、大元神楽の天蓋と仮面が展示されており、無形民俗文化財の保存と伝承、博物館の機能と役割を主題として扱っている。一般公開された本セッションは278名にもものぼる一般の方々の来場があり、大元神楽の公演とパネルディスカッションの内容とについて、教員・学生・一般を含めた多くの方々と共有を果たすことができた。

6. 反省会の実施

フォーラム終了後、平成27年1月6日に第7回学生企画委員会を開催している。第7回と続く第8回の同委員会では、ワークショップの手法を採用することで、今年度のフォーラム事業全般についての振り返り作業を実施している。まず第7回の同委員会では、付録に掲載されているワークシート「フォーラムをカガクする(1)～反省会事前プレスト～」を用いたワークショップを実施している。ワークショップを実施する狙いは、事業全体を振り返る反省会を実施するにあたり、その際に全体で意見交換すべき項目を学生・教職員の間で事前に検討するためである。そこで、反省会を実施する意図として次の3点を参加者に提示している。①次年度に引き継ぐべき内容を整理するため、②反省会を通じて個々の長所・能力を伸ばすため、③フォーラムの準備と実施を通して明らかとなったさまざまな失敗や人為的ミスを省みること、各自で取り組むこれからの作業へ生かしていくため、以上の3点である。

続いて、当日実施したワークショップの具体的な手法について報告する。用いたワーク

シートのうち、「1. 今年度のフォーラムで、取り上げるべき反省課題を1フレーズで列挙していきましょう」について、5分間の時間制限のもと、各自の手元に付箋を用意したうえで、課題となる事項を1枚の付箋に1項目ずつ書き出す作業、いわゆるブレインストーミング（brainstorming）を行った。これによって、学生企画委員・教職員のなかで事業実施上の課題と認識された事項を、各自で言葉にして（言語化して）整理するとともに、共同で議論を尽くすことで、今後の事業継続のため、ならびに各自の学術活動で活用するために解決すべき課題の洗い出しを行った。そしてそれぞれがホワイトボードの前に立ち、各自が付箋に記した内容について発表して、ホワイトボードに課題を列挙する作業を行っている。そしてファシリテーターが近接した項目を関連付ける、グルーピングの作業を行い、第8回の学生企画委員会において取り上げるべき課題の整理を行っている。なお時間が超過したため、「2. 次年度のフォーラム（あるいは類似企画）のために、意見交換すべき課題を1フレーズで列挙してみましょう」については、ブレインストーミングを行わず、第8回の同委員会にて後述する役割演技のワークショップを実施することで代替することとした。



【写真1】ブレインストーミングの様子（2015.1.6）

このように、全員で検討すべき課題の確認をブレインストーミングにて行った後、1月19日に第8回学生企画委員会議を開催して2度目の反省会を実施している。付録に掲載されているワークシート「フォーラムをカガクする（2）～私とあなたとフォーラムの未来を築くためのWS～」を準備して、フリップディスカッションと役割演技（role playing）のワークショップを行っている。

フリップディスカッションは、その場で設定された議題内容について、各自の手元に用意されたホワイトボードやノートの媒体に意見や所感を書き込み、その後、媒体に書き込んだ内容を全体に発表しながら意見交換を行う方法である。前回委員会のブレインストーミングの結果をもとに、6つのテーマを用意して意見交換を行うことで、学生・教員がフォーラムの企画立案から実施に至



【写真2】フリップディスカッションの様子（2015.1.19）

るまでに学んだ技法や知識、フォーラムの実施準備で生じたさまざまな課題の共有と解決策の模索を目的とした。実施にあたっては、付録に添付したワークシートにて「用意したテーマに対して、ボードに自分の意見を書き込みましょう(3~5)」と作業内容を指示し、続いて、①テーマの設定、②予算のあり方、どう考えますか?、③開催時期、④準備運営はどうあるべきか?、⑤役割分担をどう考える?、⑥研究との向き合い方、以上の6点についてそれぞれフリップに書き込み1人ずつ発表を行った。

続いて、学生企画委員がフォーラム事業において身につけた技能(skill)や知識を、別途の事業や企画においても活用できるよう、ファシリテーターの指名による役割演技のアクティビティを実施している。アクティビティの実施に際しては、ワークシートを利用している(同ワークシートについては付録を参照)。各学生企画委員の現在の在籍年次やこれからのキャリアを念頭に、「委員長編」「未来の委員長」「未来の研究者編」の3つの立場と役割に分け、それぞれ与えられた立場と役割を擬似体験することを通して、これまで獲得してきた技能や技法(technic)、知識をさまざまな状況と局面において引き出せることを目標とした。

「委員長編」は、実際に次年度に委員長に指名される可能性のある2名の委員に対して実施された。両名には来年度のフォーラムを構想するため、ワークシートに以下の6項目を設定して実際に自身の考え方について書き出してもらった。6項目とは「来年度に引き継ぐべきことは」「フォーラムの開催目的は、どこに置きますか?」「役割分担について(学生・教員・事務・外部業者)」「予算の規模について」「開催場所(開催基盤・貸しホール・合宿施設等々)をどのように設定する、使用する?」「プログラムについて」である。この項目を埋めることで、両名が実際に委員長に就いた場合、どのようにフォーラム事業を運営・統括するのか想定できるよう配慮してワークシートが作成されている。続いて「未来の委員長・委員編」は、フォーラム事業が今後も継続された場合に、将来的に再び学生企画委員として活動する可能性のある委員に対して、これから研究活動において活動できる技能や知識の確認と、今後のフォーラム事業実施における構想のシミュレーションを目的として実施している。項目は「今回のフォーラム経験は、今後の大学院研究活動にどのように役に立ちそうですか?」「今後もしフォーラムに関わるとしたら、どのようなフォーラムを構想したいですか」の2つを設定している。最後に「未来の研究者編」は、今後フォーラム事業に関わる見込みの少ない、在籍年数を重ねた学生企画委員に対して実施している。「今回のフォーラムで行ったこと学んだことを、あなたは自分の研究活動にどのように生かしていきますか?」という項目を設定することで、今回のフォーラム事業の体験を今後のキャリアパス、並びに中長期的な研究活動においてどのように関わるのかを考えさせる内容として設定されている。ワークシートの内容は異なるものの、いずれの役割演技も学生側の視点と発言から本事業に参画することで生じた教育的効果を捉えることを目的としている。

7. まとめと今後の課題

1) まとめと今後の課題

以上、これまでのフォーラム事業の紹介を行いつつ、本年度のフォーラム事業の活動内容

を概観してきた。本年度のフォーラム事業の特徴として、以下の3点を指摘することができる。

1点目の特徴として、立命館大学大学院先端総合学術研究科におけるPBPの理念を参照することで、フォーラム事業に参画した学生の博士論文のテーマや問題設定を活かした事業の企画立案作業を行ったことである。これによってフォーラム事業における過去の問題設定や事業企画を再利用するのではなく、フォーラム事業の企画立案作業に参画した学生の研究テーマや問題意識を深化させる取り組みとしたことである。

このことは、2点目の特徴である個別企画方式による実施と関わる。上述の特徴を生かしてフォーラム事業を実施するためには、これまでに見られたチームリーダーとなる学生企画委員長と、事業の顧問格となるフォーラム担当教員とが統括して事業運営を行う全体管理方式から、学生企画委員の研究テーマと関心を重視した個別企画方式に運営方式を転じることが必要であった〔東城2015〕。これによって個別企画の責任者となった学生企画委員は、能動的に企画立案の作業を行うとともに、企画された内容はワークショップや研究公演という形態をとった各自の研究成果や学術活動の公開へと結実した。

3点目として、今年度のフォーラム事業が1年間の休止を経ての実施であったことから、今後も事業が継続する場合に備えて、参画した学生・教職員内でフォーラムの事業企画の段階で体得した知識や技術を全体で共有する必要性が生じていた。そこで過去にフォーラム事業に参画した学生や教職員が中心となり、初めて事業企画に参画する学生に対して、研究科内で連携して事業を運営するための知識の伝達や学生企画委員・教員・職員といった異なる立場の業務に対する相互理解が図られた。さらには委員会や会議、フォーラム開催直前の準備作業を共同作業として経験することで、異なる立場の人々と協働するためのコミュニケーションやファシリテーションに関する技能の習得が図られた。これらは、フォーラム事業に参画することで、事業を円滑に進めるための知識・技術の習得や、他の専門研究分野や専門業務を持つ学生・教職員との関係を構築していることを意味している。総じて、初めてフォーラム事業に加わる者はフォーラム事業の実施組織に正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation: LPP)〔レイブ&ウェンカー1993〕することにより、フォーラム事業の運営において各種作業を円滑に進めるための技能と知識を学びつつ、各参画者がそれぞれの立場や専門研究内容を背景に何らかの役割を担うことで事業の企画運営が成立していると指摘できる。

さてこうした特徴が今年度のフォーラム事業に認めただけで、事業運営の面において今後の課題も散見された。ここでは課題として次の2点、①フォーラム事業の実施責任の所在、②大学院教育プログラムとしてフォーラム事業の位置づけ、についてまとめたい。

既に概観してきたように、フォーラム事業は学生企画委員会において事業の企画・運営が行われ、学生・教職員が集まり1つ1つの議題に対して合意形成を行いながら事業は進められる。ただし各回の学生企画委員会は、議事進行の中心は学生企画委員が担うものの、委員会の開催主体は研究科長・フォーラム担当教員であり、実質的には研究科長・フォーラム担当教員・学生企画委員・基盤総括事務係を含めた合同運営の形式をとって実施される。そのため、フォーラム事業や各回の学生企画委員会は、関与した関係者全体で実施責任を担う実行委員会形式には正確には該当しない。このことは、実施主体組織が明確化されないことに

より、責任の所在が不明確になる危険性が生じる。加えて今回のような一般公開に伴う実施要項の作成時や、外部団体への出演交渉時においては、参加者や協力団体に対して主催組織の説明を行うことに時間を要することとなる。このようなフォーラム事業の実施責任の不明確さは、合意形成を行いながら進めるフォーラム事業の企画立案時にコミュニケーションの齟齬をもたらす事態も将来的に懸念される。

続いて、フォーラム事業の大学院教育プログラムとしての位置づけであるが、そもそもフォーラム事業自体は、単年更新の合同運営形式による活動であり、それ自体は事業の企画・運営に参画する学生にとって有益になる教育プログラムとして設計されていない。そのため、まずはこれまでに実施されている大学院教育プログラムを参照する形で、教育プログラムとしてのフォーラム事業のあり方を検討する必要がある。そこで以下では、総研大の実施する「学生セミナー」を参照してフォーラムの事業モデルについて言及する。

総研大では、約20年にわたり新入生を対象とした学術交流事業「学生セミナー」が実施されている。近年、同セミナーでは準備実施にあたり、具体的な企画や課題を少人数グループによって実施・解決することで学習する教育手法、いわゆるPBL（Project Based Learning）が導入されている。これにより同セミナーの企画立案を行う学生は、同セミナー実行委員会として特定企画の立案・実施を行うことで、企画実施によって得られた成果を学生セミナーにおいて活用するようになった〔桂・岩瀬2013〕。同セミナーにみられる、協調学習に基づいた教育プログラムの導入は、新入生同士の交流を促進させることを目的としつつ、ファシリテーターとして総研大学融合推進センター教員が入ることで、大学院教育プログラムとして円滑な事業運営が達成されている。その一方で多様な立場・身分の人びとによる、1年更新の実行委員会形式に基づいて運営されるフォーラム事業においては、学生・教職員間の事業実施をめぐる合意形成がより重要となる。さらに5年一貫制の1年次学生が中心となって企画立案を進める学生セミナーとは異なり、学術交流フォーラムは博士後期課程在籍1年目～5年目の学生が企画立案にあたることから、当初からPBLをはじめとする協調学習の方法論を前提とした企画運営では、事業実施に必要な合意形成や企画の準備経過によっては、実施する企画内容と参画する学生の問題意識や研究テーマとが結びつかない事態も生じうる。博士論文の執筆に集中して取り組む博士後期課程の学生にとって、フォーラム事業の企画立案作業が研究活動に直結しないと認識されることでモチベーションの低下につながるものが憂慮される。そのため、個別研究内容の更新を目標として大学院に入学した博士後期課程の人文科学を専攻する大学院生にとっては、外発的な形で問題解決のためにチームを組み事業を推進するPBLをモデルとした事業企画よりは、まさにPBLの理念において指摘されるように、博士論文の執筆と問題意識の深化、さらにはキャリアパスとの関連性を促進させた、学生個人の状況に合わせた内発的な事業企画が適切であると考えられる。いずれにしても、大学院教育プログラムの一環としてフォーラム事業を位置づける場合には、博士論文の執筆と問題意識の深化とを同時に成立させる事業モデルの確立が期待される。

2) 今後の事業運営についての提言

最後に今年度の事業運営を踏まえて、今後のフォーラム事業の実施方針について若干の提言を行う。今回のフォーラムでは、チームリーダーの学生企画委員等が設計した事業企画の構想、ならびに事業運営に対する一定の方向性のもと、参画した学生の研究主題や問題意識を基盤としたワークショップや研究公演が実現した。そして多様な専門分野の学生・教員が学術的に交流できるよう、研究方法論 (methodology) に対する問題関心の共有をフォーラム開催の背景にするとともに、主催者参加者が各セッションを通じてともに学び意見交換ができるよう、テーマである「文化をカガクする？」を人文科学研究にとってのアプローチ方法を探求する主題として設定した。これによって、異なる主題を掲げるパネルディスカッションやワークショップ、研究公演といったセッションを1つのフォーラムという場で実施することが可能となった。ただし本方式の採用には、チームリーダーにある程度の決定権限が与えられたこと、チームリーダーが実施運営に際して主導的役割を發揮したことによるところが大きい。今後も同規模のフォーラムを開催するためには、学生企画委員側のフォーラム実施に対する学術的教育的理解、同規模のフォーラムを開催するための研究科内での合意形成、フォーラム事業の実施によって期待される教育的効果の具体的提示、そしてフォーラム事業の継続によって得られた教育的成果の実質化が必要である。さらにこれらの基盤が確立されたとしても、事業運営を担う学生・教職員の担当者の入れ替わりが毎年生じることから、実施にあたっての意図や目的、期待される成果といった教育プログラムとしての実施目的が定着されない限り、事後の評価指標が定められないことから事業全体に対する持続的な評価は困難となる。だがその一方で、学生企画委員を中心とした企画立案作業からフォーラム事業に注目した場合、予算執行を算段する能力や組織全体のスケジュール管理能力の養成、異なる立場の人びととの協働によるコミュニケーション能力の向上やファシリテーション技能の獲得など、本報告書の第2部以降の内容を通してさまざまな教育的効果を確認することが可能である。これまで学生主体という名目により評価されてこなかった、実践的なカリキュラムが併せもつ多様な教育的効果を今後どのように評価しうるのかが、本フォーラム事業の継続実施に向けた課題である。その一方で多専攻多分野の学生・教員による実質的な運営が定着し、一般公開による研究活動のアプローチが持続的に達成されたときには、フォーラム事業は総研大の理念である「学際的で先導的な学問分野の開拓」を実現しうる、柔軟な発想と問題解決能力とを涵養する人材の養成事業として定着しうる可能性もあることを併せて指摘しておきたい。

最後に今後の事業運営についての提言として、今回のフォーラムとは異なる学術集会を基盤とした事業運営の可能性にも触れることで、フォーラム事業の概要をまとめた本章を攔筆したい。フォーラム事業の運営は、単年ごとに担当委員・教員が入れ替わることで実施体制の更新される実行委員会形式による運営であることから、事業運営を担うその時々々の学生側と教職員側の合意形成によっては、年度によっては学会に見られる学術集会を基盤とした運営を行うことも予想される。そこでより多くの方々に興味関心を持たれる、学生・教職員間の交流、文化科学研究科内の各専攻、および他研究科との交流を図るための手法として、自

自然科学の学会運営も参照されるべきであろう。具体的には日本分子生物学会や日本畜産学会に見られるように、飲食を行いながら意見交換を行うナイトミーティングやランチョンセミナー、大学院生やポストドクが主導して行う若手研究者部会、特定のテーマ設定を行ったうえで行う学生・教職員によるラウンドテーブルディスカッションの実施等、伝統的な人文科学分野において実施されてきた口頭発表やシンポジウム、パネルディスカッションのみに依存しないプログラム作りの工夫も時には必要である。学生・教職員によって企画するたびに発見のある活力のあるフォーラム事業を継続するためにも、学生・教職員のなかで、大学院博士後期課程の大学院生に対する実践的な教育カリキュラムのあり方、異なる分野の研究者同士で問題課題を共有するワークショップを代表する教育的手法の探索、状況と場面に応じた研究成果のアウトリーチの方法について、日頃の研究活動からアンテナを張ることが求められよう。

【参考文献】

- ジーン・レイヴ, エティエンヌ・ウェンカー (佐伯胖訳) 1993『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書
- 桂勲・岩瀬峰代 2013『総合研究大学院大学学生セミナー—歴史と現在—』総合研究大学院大学学融合推進センター
- 人間文化研究機構国立民族学博物館編 2010「総研大文化科学研究科「学术交流フォーラム」をふりかえって」『月刊みんぱく』34(2):2-7
- 東城義則 2015「文化科学研究科 学术交流フォーラム2014」『総研大ニュースレター』81:6-9
- 鳥谷真佐子・稲垣美幸 2011「リサーチ・アドミニストレーターの現状と課題」『大学行政管理学会誌』15:33-40
- 渡辺公三 2005「プロジェクトを基礎とした人社系研究者養成～立命館大学大学院先端総合学術研究科の試み～」『大学と学生』22:51-57
- 渡辺公三・片岡稔 2008「平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ(大学院GP)採択教育プログラム 先端総合学術研究科「プロジェクトを基礎とした人社系研究者養成」—実施結果と課題—」『立命館高等教育研究』8:37-54

(文責：東城義則)

¹ 国立大学法人総合研究大学院大学規程集によると、文化科学研究科連携事業とは「総合研究大学院大学文化科学研究科(以下「本研究科」という。)の学問諸分野における先導的で国際的に活躍できる高度な専門的知識及び能力を本研究科の学生に修得させるとともに、人間の文化活動並びに人間と社会、技術及び自然との関係に係る関連諸分野と有機的に連動できる、創造性豊かで優れた専門応用能力を備える若手研究者の育成を目的としている」(<http://kitei.soken.ac.jp/doc/gakugai/rule/165.html>, 2015年2月20日閲覧)とされる。

本事業は、平成23年度よりこれまでの連携事業を引き継ぐ形で実施されている。

- ² 2015年1月28日基盤総括事務係より聞き取り。
- ³ <http://www.bunka.soken.ac.jp/17-18nendo/5jigyo/bunka-seminar17.html> (2015年1月28日閲覧)
- ⁴ 海当時の大学院特定教育研究経費「有機的に連動した文化科学研究教育の推進に関する実践的研究」を利用した制度である。
- ⁵ http://www.bunka.soken.ac.jp/17-18nendo/5jigyo/5jigyo_gakusei.html#18bunka (2015年1月28日閲覧)
- ⁶ http://www.bunka.soken.ac.jp/17-18nendo/5jigyo/5jigyo_gakusei.html#18gakujutsu (2015年1月28日閲覧)
- ⁷ 基盤総括事務係所有の内部資料より引用。
- ⁸ http://www.bunka.soken.ac.jp/gakujutsu_forum/index.html (2015年1月28日閲覧)
- ⁹ 2015年1月28日基盤総括事務係より聞き取り。
- ¹⁰ http://www.bunka.soken.ac.jp/forum_2008/op/index.html (2015年2月7日閲覧)
- ¹¹ http://www.bunka.soken.ac.jp/forum_2008/workshop/index.html (2015年2月7日閲覧)
- ¹² http://www.bunka.soken.ac.jp/forum_2009/index.html (2015年2月7日閲覧)
- ¹³ http://www.bunka.soken.ac.jp/forum_2010/index.html (2015年2月7日閲覧)
- ¹⁴ http://www.bunka.soken.ac.jp/forum_2011/index.html (2015年2月7日閲覧)
- ¹⁵ http://www.bunka.soken.ac.jp/forum_2012/index.html (2015年2月7日閲覧)
- ¹⁶ 総合研究大学院大学文化科学研究科による、学術資料マネジメント教育プログラム開発を目的としたグローバルな人文研究者の養成機能強化事業である。従来までの文化科学研究科連携事業を引き継ぎ、専門的な知識の取得と分野横断的な知識の応用を目指した教育プログラムの策定を目指している。
- ¹⁷ 学生企画委員の業務は、一般的な研究プロジェクトにおける研究補助業務にあたるリサーチ・アシスタント (RA) より、むしろ実態としては、学術交流フォーラムの実施を通して、参画者参加者に対して研究活動の活性化を働きかける研究支援業務 (research administration) に近い。現在、こうした研究支援業務への従事者は、主に大学や研究所などの高等教育研究機関において、研究者を対象とした研究支援業務を専門とするリサーチ・アドミニストレーター (Research Administrator) として知られる。日本におけるリサーチ・アドミニストレーターの動向については [鳥谷・稲垣2011] 等を参照のこと。

2 学術交流フォーラム2014「文化をカガクする？」経過報告

2014年度の学術交流フォーラム事業では、修了生を事務局として採用することになり、私が担当することになった。私は、地域文化学専攻に在籍していた2009年に口頭発表を、2010年にポスター発表をおこなっているものの、フォーラム事業の企画、運営に関わるのは初めてであった。期待された役割は、教員と学生、学生企画委員と開催基盤であるみんなのあいの調整、橋渡しであった。結果としてそれがどこまで実行できたかは分からないが、委員会の経過、事務局の役割、今後の課題をここに記述することで、今後フォーラム事業が継続された場合の参考になれば幸いである。

1. 委員会の経過

委員会は合計8回開催された。場所は主に国立民族学博物館のセミナー室で、当日みんなくに来られない人はテレビ会議での参加となった。委員会の開催時期は以下の通りである。

第一回	2014年6月16日(月)	15:00～17:20
第二回	2014年7月10日(木)	15:00～17:30
第三回	2014年8月28日(木)	13:30～18:00
第四回	2014年10月2日(木)	13:30～18:00
第五回	2014年11月4日(火)	13:30～18:00
第六回	2014年12月2日(火)	13:30～18:00
第七回	2015年1月6日(火)	13:30～16:30
第八回	2015年1月19日(月)	15:10～17:30

第一回目(6月16日)の委員会では、フォーラム事業の日程の決定とテーマの絞り込みが主な議題となった。これまでの学術交流フォーラム事業の過程と位置付けを佐々木先生から報告してもらい、2014年度のフォーラム事業をどのようにかたち作っていくかの確認をおこなった。まずはフォーラムを12月20日(土)、21日(日)の2日間で開催することが決定した。しかしそれ以外は何も決定していないため、何をやりたいのか、何が可能なのかを、各委員がまだあまりイメージできていなかったように思う。

そのようななか、2012年度のアンケート結果をもとに、参加者の宿泊場所を同じにする案が出される。せっかくの機会なので夜もワークショップ等をおこない、親睦をはかるのが目的である。各委員から出された意見をまとめると、①1か所に集まる、②バラバラに泊まる、③ボーダーラインを設定してその期限内ならば同一の宿泊場所とする、という案が出た。しかし、一括して宿泊施設を手配することは、事務方での取りまとめ、部屋割り、鍵の受け渡し、トラブル対応など、クリアすべき点が多くあるため、今回は宿泊場所を同じにすること、夜のワークショップ実施は、結果的に見送られた。

第1部 事業概要と経過報告

続いて、テーマ・プログラムについての議論がおこなわれた。2010年、2011年、2012年の各フォーラムがそれぞれ、交流重視、研究発表重視、そしてワークショップ開催へとより開かれた場になっていったことを踏まえ、今年度のフォーラム事業をどのようなかたちで実施すべきかの話し合いがおこなわれた。その上で、各委員がテーマ（キーワード）、フォーラム事業の方向性、プログラム案を考え、メール上で議論し、次回の委員会で報告し合うことになった。

第二回目（7月10日）の委員会では、事前にメーリングリストにて各委員が提出した企画案について、各自が簡単に説明をおこなったあと、質疑応答やコメントのやりとりをおこなった。西山さんからは飲食や料理に関するワークショップが、光平さんからは『『しりょう』を見る・聞く・読む・伝える』展示が提案された。春藤さんからは「歴史研究の技術を語ろう」というテーマで細分化されている歴史研究の手法について情報交換をおこなう案、黄さんからは「資料・史料との対話」として国文研で使う資料、歴史学で使う史料など、他分野の研究方法を知ることが目的とする案、鈴木さんからは「今、歴史をどう読むか—史料・メディア・パフォーマンス」をテーマに、「歴史」をどう伝え、どう生かすか、その事例として、神楽のパフォーマンスが提案された。東城さんからは「いくつもの文科、いくつもの総研大」をテーマに、文化科学の多様性を理解する場としてのフォーラム事業として、外部公開、公募型分科会、優秀な発表者への表彰などの案が出された。

その後、鈴木さん案の神楽公演について、予算の方面から開催の可能性はゼロではないとのことで、神楽公演の開催が決定した。予算との兼ね合いもあるが、鈴木さんが企画書を書き、他の委員も全面的にサポートすることで合意した。

そして、神楽公演を中心に全体テーマの議論がおこなわれた。岩瀬先生からテーマのフォーカスが散漫にならないようとのコメントが出、各委員が意見交換をおこなう。研究者、研究対象の扱い方、距離という点では共通しているが、より多くの人に参加しやすいように幅をもたせたテーマ設定をしたほうが良いとの意見がでるが、けっきょくこの回ではテーマは決定しなかった。

第三回目（8月28日）の委員会では、セッションの内容と各担当者の決定、テーマの決定がおこなわれた。前回までの議論を踏まえ、各委員からテーマのキャッチフレーズ案が出された。しかし、全体テーマの絞り込みが先か、プログラム（内容）の決定が先か、という問題になった。そこでプログラムの柱を、口頭発表、ポスター発表、シンポジウム（研究公演：神楽上演）、ワークショップとすることが決定された。そして口頭発表は光平さんと黄さん、ポスター発表は春藤さん、シンポジウムは鈴木さん、ワークショップは西山さんが担当することに決まった。

その上で、全体テーマについて再考し、「文化をカガクする？」に決定した。これはテーマに幅をもたせ、専攻分野の異なる研究を広く包括するためである。サブタイトルをつけるか、あるいはセッションごとにサブテーマを設けるかということが議論されたが、結果とし

てつけられなかった。

また西山さん案の食をテーマとしたワークショップは、参加者から参加費を徴収するのか（食費は予算執行不可）、調理を伴う場合の保健所への届け出、みんぱく内での調理可能な場所が限定されることなどの問題点をクリアする必要があることが明らかとなった。

プログラムがおおまかに決まったところで、時間配分について話し合いがされた。口頭発表やポスター発表の時間配分は、発表者の人数によっても左右されるため、この時点で決定することは難しい。原則として、総研大の学生派遣事業を利用した人は発表の義務があるとされる。しかし今回の開催基盤であるみんぱく所属の該当学生が、のきなみ海外調査のためフォーラム事業の時期に不在であることが明らかになった。もう少し早くから、フォーラム事業の開催を周知しておかなければならない反省点である。そこで例えば、1年生には発表を義務化するなどの案も出されるが、積極的に主体性をもって発表をしてほしいとの思いも委員に共通してあったため、難しい。

同時に、発表者がどの程度集まるのかは、募集要項にも関わってくるため、募集要項の内容やウェブ上にアップする時期などが話し合われた。

第四回目（10月2日）の委員会では、招聘する研究者や教員の決定、募集要項・登録フォームの作成、予稿集作成のスケジュールが決定された。

各セッションの担当者が、それぞれの内容について考えてきており、それをもとにみなで議論をおこなった。

口頭発表は通常の学会発表型から脱し、参加者同士がより密なコミュニケーションを取れるように、発表者が希望するコメンテーターをつける案や、円卓会議にする案などが出された。

ワークショップは、食に関するワークショップと、音・音楽をテーマとしたワークショップを2つ開催することとなり、その内容も具体的になりつつあった。

パネルディスカッションは、総研大の予算で共同研究をおこなっている2人の教員に発表をお願いすることになる。参加者との意見の相互交換をおこなうためコメントペーパーを使用する案が採用される。

神楽公演は、みんぱくとの共催となったため、講堂を無料で使用することが可能になった。広報をいかにおこなうかの意見が出され、ちらしを『月刊みんぱく』へ折り込む、みんぱく付近の駅、区役所や市役所等に置いてもらうことになった。

今回問題となったのは、各セッション開催場所と時間の兼ね合い、そして人員配置である。会場候補はみんぱくの第2、第3、第5、第6セミナー室、講堂、1階エントランス、4階の生活科学実験室である。第2セミナー室は事務局として使用する。口頭発表、パネルディスカッションは第3、第5セミナー室を使用する。第6セミナー室は音・音楽ワークショップの演者の方がたの楽屋として使用、講堂は2日目の神楽公演で使用することとなった。料理のワークショップは生活科学実験室である。ポスター発表、音ワークショップをどこでおこなうかが問題となった。ポスター発表は2日間の会期中、掲示しておくことを考えると、どこかひとつの部屋でおこなうことは難しく、セミナー室前の廊下も検討されたが、エント

第1部 事業概要と経過報告

ランスでおこなうこととなった。その際、電源の確保も問題となった。また音・音楽ワークショップも、神楽公演前の講堂ホワイエの使用や第7セミナー室の使用が検討されたが、結果的にエントランスでおこなうこととなった。

また各セッションの内容が具体的になってきたところで、やはり問題となるのが参加者数である。特に教員の参加を促すために。会議等で告知をしてもらうタイミングなどを図る必要がある。また館外の教員やワークショップの担当をお願いする教員、団体へ出張費がどのように出るのかということも問題であり、これに関しては基盤総括事務とのやり取りが必要になる。

前回から話し合いがされてきた、参加募集要項は開催の約2ヶ月前の10月8日ごろにウェブ上にアップすることとなる。それとともに口頭発表者とポスター発表者の予稿集原稿の提出締切と、提出先が事務局（宮脇）になることが決定した。また懇親会費の徴収の方法について、各専攻の事務を通じて徴収することになった。

第五回目（11月4日）の委員会では、各セッションの詳細やスケジュールの詰め、当日アルバイトの見積もり、予稿集執筆担当者の決定がおこなわれた。

ウェブ上に参加募集要項がアップされ、各基盤の登録状況が報告された。しかしメール等で連絡をしているものの、フォーラム事業開催について周知されにくく、各委員が直接声かけをしている状況であった。特に口頭発表の登録状況が芳しくない状況である。また教員の参加人数は、締切後に各専攻事務から報告されるため、この時点では不明であった。なお教員のなかには専攻事務に参加を登録するとともに、自らウェブ登録をおこなう方もいた。このような二重登録は、事務局が手作業で確認をしなければならない。

各セッションの担当者から、内容についての報告があり、進行やスケジュール、必要人員が具体的になる。

また、予稿集の執筆担当の確認をおこなった。2つのワークショップ、神楽公演の演者の方がたのプロフィール紹介は、各セッションの担当者が執筆をおこなうこととする。

またすでにフォーラムのちらしに掲載された趣旨説明に関して、テーマである「文化をカガクする？」のカガクをカタカナにした意味が伝わりにくいとの指摘があり、カガクをサイエンスに限定させず、いろいろイメージさせるためにあえてカタカナにした、みなが集まって融合するという意味を追記することとなる。

またお茶コーナーの設置について、参加教員から各地のお菓子を持参していただくよう、会議等を通じて研究科長から伝えてもらうことが決定した。

フォーラム事業開催まで20日となった第六回目（12月2日）の委員会では、各セッションの詳細の確認、当日のシフトの確認などがおこなわれた。フォーラム事業が間近に迫っているため、それぞれが、本当に準備が間に合うのか、開催にこぎつけられるのだろうかという不安を抱いていたように思う。

各セッションの内容、スケジュールに沿って、使用機材や備品が具体的になる。それを踏

また、事務局である私はリストを作成し、各備品をどこから調達するのかを確認した。また消耗品は予算で購入することができるが、各セッションに必要な消耗品がぎりぎりまで確定せず、発注までの期間の問題もあった。

また当日の人の配置や動きも具体的になる。幸いみんぱく所属の学生は数が多く、当日アルバイトを6人の学生にお願いすることになった。それを基に、当日の各自のシフトを作成した。

事務局から、口頭発表、ポスター発表、パネルディスカッションの発表者への連絡事項の確認（原則としてみんぱくが準備するウィンドウズを使用すること、配布資料の準備などに関して）をおこない、後日メール連絡することとなった。

フォーラム事業を終えての第七回目（1月6日）の委員会では、ウェブ報告書と活動報告書の作成に関する話が話し合われた。例年だとウェブ報告書のみだが、今年度は東城さんから、紙媒体での活動報告書の作成が提案され、承認された。

アンケート（フォーラム事業のアンケートと、神楽公演の一般アンケート）の分析を、それぞれ春藤さんと鈴木さんがおこなうことになった。

その後、反省会としてブレインストーミングをおこなった。各自がポストイットに、フォーラム事業の準備、開催、運営を通じて感じた問題点などを書き出した。それをホワイトボードにテーマごとに分けて貼り付ける。そうすることで、皆から出された問題点が以下の6点に集約されることが分かった。①テーマの設定、②予算のあり方、③開催時期、④準備運営、⑤役割分担、⑥研究との向き合い方。

最終回の第八回目（1月19日）の委員会では、前回の委員会が出された反省点、課題をもとに、フリップ・ディスカッションがおこなわれた。各自が卓上ホワイトボードに、①私の考え、②理由、③これからどうあるべきか、を書き出す作業である。

この作業の目的は結論をひとつに絞ることではなく、各委員の意見を羅列し、来年度のフォーラム事業担当者へのメッセージとすることである。この作業を通じて、委員それぞれのフォーラム事業に対する取り組み方、感じていたこと、反省点や問題点が明らかになった。以下に課題ごとに出された意見を掲載する。

①テーマの設定

- ・学生がおこなうべき。主体性をもっておこなったほうがやる気がでる。
- ・早い段階でテーマ設定をおこなう必要がある。
- ・委員が決めるべきだが、何かキーワードが予め設定されているほうが決めやすい。
- ・誰のために開催するのかを明確にしないと、テーマも決めにくい。
- ・何もない状態からテーマ設定をするのは難しい。前年度の人がどのようにテーマ設定をおこなったのか引き継ぎをしっかりとすべき。
- ・何のためのフォーラムなのかが明確でないため、決めにくかった。
- ・教員のスタンスも中途半端であった。

②予算について

- ・お金の管理は基盤総括事務や学融合主導がいい。継続性をもたせるため。そこに各基盤の教員、学生が関わって執行すればいい。
- ・4月に学生企画委員に就いてから、予算の申請や消化のための見取り図が学生には描けない。
- ・委員全体が管理に積極的に関わるべき。本来ならば企画立案時に、予算も考慮すべき。
- ・予算は教員や基盤総括事務に申請してもらい、委員のなかで会計担当をつくるのも手。
- ・学生の負担になるので予算の管理は学生以外がする。ただ、今回お金の動きを追えていなかったもので、今後各セッションの動きに合わせてお金の流れの報告もあれば勉強になるだろう。
- ・公費なので学生が自由に執行するのは難しい。制約のあるなかでどれだけフレキシブルに動けるかが課題。
- ・予算申請と執行は難しい問題。現在（1月）の時点で来年度の予算申請をおこなわないといけませんがそれは不可能。何らかの予算枠をつけ、その予算内でできることをする。そうしないと毎年の開催は無理。
- ・過去に総研大ワークショップという、学生が予算申請をおこなった事業もあったが、なくなった。

③開催時期について

- ・今年度と同様に冬がよい。準備期間を設け、委員同士コミュニケーションを十分に取りたい。ただ日程は6月の第一回委員会より前に決定してもいい。
- ・11～12月前半がよい。早く決めて早く基盤機関の先生方にも周知、依頼。
- ・秋以降。学会シーズンを避けて開催。
- ・今年度と同様でよい。
- ・フォーラムの目的によって、きちんと開催するなら冬、交流目的なら夏でもよい。
- ・前年度からの引き継ぎをきちんとし、交流目的なら春でもよい。夜の間を設けても。
- ・(科研費執行のできない)4,5月なら教員の多くが参加可。前年度の4月に委員を決めて、予算取りをして、翌年度の5月にやる。でも年度を超えて同じ教員が担当できるかは不明。
- ・今のままがよい。準備期間とまとめの期間が必要。
- ・事務としては夏前が時間に余裕がある。年度が終わりに近づくほど忙しくなる。

④準備運営のありかた

- ・学生主導でよい。ただし3人で1つのセッションを担当する程度で。大きなセッション、今回でいうと神楽などは、教員、学融合相談体制を作っておいて外注にしてもいい。
- ・今まで通り。学生が主体になり、事務にサポートをお願いし、内容面では教員の指導を受ける。
- ・主体は学生がすべき。ただ特定の人に負担がかかりがちだったので、もっと早めに準備し、互いの状況、情報を開示して把握しておくべきだった。

- ・今まで通り学生が主体でよい。
- ・学生がやる。でも負担が大きいのでノウハウの継承が必要。
- ・準備は委員がやる、今年はアルバイトが多かったからよかったが、運営は外注でもいい。
- ・今まで通り。でも来年度、国文研で開催するなら、人手確保の問題がある。歴博と合同でおこなう可能性もあるか？
- ・今回はセッションごとに責任者がいるのはよかった。だからこそ神楽もワークショップも面白くなったが、1人でやるのは大変なので、サポートにつく人の人員確保が問題。

⑤役割分担について

- ・今回1人1セッションに拘ったのは反省。2,3人で1つのセッションにし、話し合いながらつくっていけばよかった。
- ・自分がもしサポートにまわったらやる気、責任感がどれほど出るのか分からない。開催基盤となる機関からは2,3人の企画委員を出してほしい。
- ・小規模なプロジェクト制がよい。今回セッションを担当して勉強になったが、責任感、プレッシャーもあった。企画を減らしてチームワークでやるのも手。
- ・リーダーとサポーターがいる小規模のプロジェクト制がいい。特に少人数での国文研では小規模に。
- ・企画リーダーとサポートメンバー（開催基盤の人がいい）という仕組み。他機関の者にとって、開催機関内部のことは分からないので、パイプとなる人が必要。
- ・開催する基盤の事務とどう連携するのか、という課題がある。
- ・今回のプロジェクトはよかった。教員をどう巻き込むか、会計や記録を基盤総括事務に頼っている部分をどうするのが課題。
- ・プロジェクト制はうまくいったと思う。しかしより多くの人に経験してほしいとの思いから、2,3人で担当してもよかった。1つの専攻から委員を2人、また事務局も必要。
- ・早い段階で企画のアイデアを出し、学生や教員による投票を経て企画をひとつにしぼる。立案者がリーダーになり、それ以外の方はサポートにまわる仕組みをつくる。そうすれば早い段階で、委員ではない学生や教員へもフォーラム事業を周知できる。

⑥研究との向き合い方

- ・研究内容を活かしたうえでプロジェクトを能動的につくっていくという、自分の姿勢はぶれていなかった。
- ・自分の研究とフォーラムは別だと思う。人間性、学術的な広がりなど研さんの場になったので、直接研究に結びつかなくても、意味あることだった。
- ・研究に大きな支障をきたさない程度に関わるのがいい。今回、初めての試みをさせてもらったので、自分の研究を深められた。でもフォロー、サポートにまわった人でも、与えられた枠組みのなかで、交渉などの勉強ができる。みなが主体的に研究に結び付けなくてもよいと思う。

- ・研究に役立つように組み込める。テーマの設定のときに配慮することも可能。
- ・研究が止まるのはよくない。全員が研究と結びつけたテーマ設定は無理なので、時間的な負担をどう減らすかの工夫が必要。
- ・論文を書くために大学院に入っているが、人間の能力は限りがないので、自分で枠を作る必要はない。どこかに自分の将来に役に立つときがくる。
- ・どんな機会でも自分のチャンスとするハングリー精神が必要。この企画委員になることも恵まれている。どうやって時間を調整すれば研究時間が確保できるのかが重要。
- ・研究は大事だけど、フォーラムを通じた仕事も大事。時間配分ができるように。

2. 事務局の仕事について

ここでは、私が主におこなってきた仕事について記述する。

学生企画委員ごと：議事録を作成し、メーリングリストを通じて配布した。

10月中旬以降：ウェブ上の登録フォームから、口頭発表、ポスター発表をすると申し込みのあった者に対し、①予稿集原稿、ポスター原稿の執筆要項（PDF）、②予稿集原稿用テンプレート（Word）、③ポスターテンプレート例（PDF）を返信する作業をおこなった。これは申し込みがある毎に、随時手作業で返信していた。結果的に返信漏れはなかったが、申し込み期間のあいだはメールの受信に注意する必要がある。

10月中旬以降：参加者名簿の管理。ウェブ上の登録フォームから登録した人の情報は事務局のメールアドレスに届く設定になっていたため、それを適宜エクセルへまとめていた。しかし、教員の参加登録は各基盤事務が取りまとめていたため、最新の参加者名簿はサイボウズに挙げて更新していったが、基盤総括事務とのあいだでそれらを取りまとめるのがややこしかったことが否めない。

11月末～12月初旬：事務局用のメールアドレスに提出してもらった予稿集原稿、ポスター原稿の取りまとめ。締切直前に、未提出の方にリマインドメールを送ったが、おおむね締切までに提出してもらった。予稿集原稿はPDFファイルに変換し、まとめた。ポスターは基盤総括事務から一括して業者へ印刷を依頼するので、ポスター原稿は基盤総括事務へ送付。その後、業者からポスター印刷に関して、数名の発表者へ問い合わせがあったので、その連絡。

11月末：総研大の教員や学生に対しては、メール等でフォーラム事業開催が告知されていたが、開催基盤であるみんなく内部でどの程度周知されているか不安だった。総研大の行事である本フォーラム事業はみんなくのウェブサイトに掲載されないため、館内でもほとんど知られていなかったようだった。しかし一般公開もされている本フォーラム事業は、より多くの人に知ってもらうべきである。またフォーラム事業募集のための案内やちらしを作成した時点では、発表者やワークショップ等の内容が未確定だったため、その内容が具体的に周知されていない。そこで発表者の氏名・タイトル、ワークショップの内容を盛り込んだ館内掲示用のちらしを作成し、館内事務室などに掲示した。同時に、総研大を修了し、外来研究員等としてみんなくに在籍している方に対し、参加を呼びかけるメールを送った。

12月～：当日のシフト作成、必要機材一覧表の作成。今回のように、委員各自が担当のセ

セッションの準備で忙しい場合、事務局として全体を俯瞰して取りまとめることには一定の効果があつたと思う。セッションの内容が具体的にたつた第五回目の委員会ごろから、各委員に担当セッションの必要人員数（アルバイト）を聞き、2日間のシフト表を作成した。

必要機材の一覧表は、各セッションで必要な設備（長机、椅子）、機材（ビデオ、カメラ、プロジェクター、延長コード等）を、みんぱく内のどこから借りるのかの調整をおこないながら、作成した。

12月3日：神楽公演で使用する竹伐採。予め許可を得ていた大阪大学構内から、竹を伐採しみんぱくまで運搬する作業を、東城さん、鈴木さん、アルバイト4名とおこない、その写真記録をおこなつた。

12月12日：フォーラム事業開催の1週間前に、参加者への連絡事項を送信した。みんぱくへのアクセス方法、口頭発表者、ポスター発表者、パネルディスカッション発表者、ワークショップ参加者への注意事項などを掲載した。総研大内部の学生、教員へは基盤総括事務を通じ、各基盤事務から参加者へ送付してもらつた。学外からの招聘教員等へは、事務局から送付した。

また、みんぱくのある万博記念公園は有料であるため、その無料通行証の発行に手間取つた。みんぱく内でも事務によって無料通行証発行の手順が異なり、どこに従えばよいのか分からなかつたが、結果的に基盤総括事務が準備をしてくれていた。事務局と基盤総括事務との役割分担が不明確であつた。

12月16日：シフト表に基づき、アルバイトをしてくれる学生と打ち合わせをおこなつた。当日のスケジュール、そこでの各自の動きと役割を説明し、確認してもらつた。口頭発表ではタイムキーパーとカメラ係、ポスター発表では設営と撤去作業とカメラ係、ワークショップでは会場係とカメラ係、神楽公演では会場係とカメラ係を設けた。その他、音・音楽ワークショップに関しては収蔵庫からガムランを搬入・搬出する作業、懇親会後の帰り道誘導などにも就いてもらつた。打ち合わせをしたおかげで、当日も事務局として細かな指示を出さなくても、1人1人が責任感を持って主体的に動いてくれた。

しかし反省点としては、原稿の集まりが遅れた予稿集の製本、フォーラム事業翌日の後片付けなど、本来アルバイト業務に入っていなかつた作業を、特定のアルバイトの方に好意で手伝ってもらつたことである。

3. 今後の課題

当初、事務局として期待されていた開催基盤（みんぱく）との橋渡し役がどこまでできたか課題が残る。その理由として、まず事務が、基盤総括事務と開催基盤（みんぱく）とに分かれ、どこの誰が何を管轄しているのかを把握しきれなかつたことが挙げられる。そのため、予算執行に関することや、瑣末な事務手続きなど、けっきょくは委員長である東城さんへ意見を求めることが多く、直接事務とやり取りすることが少なかつたように思う。

またそれに関連して、基盤総括事務（青柳さん）、委員長（東城さん）、事務局（宮脇）の役割分担が明確でなかつたように思う。例えば先に述べた参加者名簿は、ウェブ上の参加フ

フォームを通じて申請された情報は宮脇の元へ、教員の参加情報は青柳さんの元へ集まっていたため、それらを取りまとめたデータを更新するのがやや煩雑であった。情報共有はしていたものの、参加者へメール連絡などをするときには漏れがないかの確認に手間取った。またフォーラム事業当日に必要な細々とした筆記用具、事務用品などをどのように手配したらいいのかを考えていたところ、青柳さんのほうでご準備くださっていてとても助かった思いであった。同時に、役割分担の不明確さも感じた。そのため今後は、事務局としての役割分担を早い段階で決定すべきだろう。

4. おわりに

事務局として当初から考えていたことは、企画・運営の中心となる学生企画委員のメンバーの意向・決定に、意見はしても反対はせずにようということであった。委員会を重ね、フォーラム事業当日が近づくにつれ、盛りだくさんなプログラムを前に、本当に準備が間に合うのかという思いを抱くこともあった。私自身、他にも自分の仕事が多くあり、フォーラム事業の準備だけにすべての時間を割けるわけでもなかった。結果だけみれば、各セッションは盛り上がり、参加者数も多く、大きなトラブルもなく、フォーラム事業は成功したといえるだろう。学生企画委員会の各メンバー、学融合や各基盤の教員方、お手伝いいただいた事務の方がたやアルバイトスタッフ、そして参加してくれた方がた、それぞれの努力とご協力があってこそである。しかし細かい部分では反省点や課題も多く残っている。これを踏まえ、今後も事務局がフォーラム事業の運営・開催に向けてより充実したサポートをおこなえるようになることを期待する。

(文責：宮脇千絵)

第2部 研究成果の公開状況

1 口頭発表

1. 企画趣旨

平成26年度の学術交流フォーラム（以下フォーラム）は2014年12月20日（土）と21日（日）の二日間に渡って行われた。フォーラムの最初のセッションである口頭発表セッションは二つの会場（国立民族学博物館第3セミナー室・第5セミナー室）に分かれて、20日（土）13時20分から15時20分の2時間で実施され、各基盤機関・専攻の先生・研究員と院生計6人が研究発表を行った。

本稿は口頭発表セッションの企画・準備・実施と今後の課題について報告するものである。まずは本セッションの企画趣旨を紹介する。

口頭発表セッションは、文化科学研究科の異なる分野の研究内容を、自分の研究の今後の糧とすることを目的とすると共に、全く違う分野の人に自分の研究分野の方法及び意義をわかりやすく伝える練習と、この場が研究を通じた交流の広がりにつながることを目的とします。

今回は、国立民族学博物館、国際日本研究、日本歴史研究、メディア社会文化、日本文学研究の各基盤機関・専攻から6名の研究員・学生が2会場に分かれて口頭発表を行いました。普段の学会や研究会より質疑応答の時間を長めに設置し、また、事前にひとつの発表につき、クジ引きでコメンテーターを2名選んで、各専攻の先生方・学生の皆様からたくさんのご質問・ご意見を頂きました。発表者にとっても、参加の皆様にとっても、専攻の壁を越えた有意義な討論になったと思います。

上記の予稿集に掲載した企画趣旨の通り、本セッションはフォーラムの主旨のひとつでもある各専攻・各分野を横断する学術的な交流を目指したものであり、そのために、発表者の分野が重ならないように、それに、質疑応答の時間にできるだけ相違する分野の先生・院生から多くの質問を頂くように工夫した。詳細は次の部分にてご報告することとする。

2. 準備の経過

何回かの学生企画委員会を経て、2014年9月頃、今年度のフォーラムのテーマと大体のプログラムが決まった。自分の研究分野で取り扱う資料・史料を使って、違う分野の先生・院生に自分の研究内容を伝えると同時に、普段の勉強・研究では耳にするチャンスが少ない、違う分野の先生・院生の質問と意見を聞くという主旨で、口頭発表セッションが発案された。

当初は、学術的な交流を促すために、発表者に希望のコメンテーター4名を挙げて頂き、その中の2名に来て頂くように依頼する予定であったが、コメンテーターの日程を調整することの難しさなどの問題を考慮して、当日の受付でクジ引きでコメンテーターを決めるという学生委員の中からの提案が採用された。ひとりの発表者の時間配分は研究発表20分+質疑応答18分+発表者移動2分というように、本セッションのプログラムは下記のようなになった。

第2部 研究成果の公開状況

	第3セミナー室	第5セミナー室
13:20~14:00	オープニングと一人目の発表	オープニングと一人目の発表
14:00~14:40	二人目の発表	二人目の発表
14:40~15:20	三人目の発表とクロージング	三人目の発表とクロージング

普通の学会や研究会での研究発表に比べて、質疑応答の時間を長めに設置した。それから、ひとつの発表に対し、当日の受付でクジ引きでふたりのコメンテーターを付くことで、異分野の先生・院生から貴重な意見を頂き、学融合的な研究視点が生み出されれば幸いであり、また、参加される側としても緊張感を持って会場に臨むことができるのではないかと考えた。

3. 当日の様子



第3セミナー室の口頭発表の様子



第5セミナー室の口頭発表の様子

口頭発表セッションはフォーラム最初のセッションであり、会場の設営の初日の朝から始まった。当初は円卓形式を考えたが、参加者の人数とセミナー室の広さの関係で、机は講義形式の配置となった。発表者はPowerPointと当日配付資料を両方使うので、開会の前に、パソコンの起動や配付資料の確認など、準備作業が順調に進んでいた。2会場に分かれているので、スタッフの人数とマイクの数が足りない問題があって、質疑応答の時間に司会とタイムキーパーがマイクを持って会場を走り回る事となり、バタバタしていたが、大きな問題はなかった。

6人の発表者はそれぞれの研究内容を報告し、事前にクジ引きで決めたコメンテーターから質問と意見を頂き、それからフロアーから質問を受け付けた。20分という研究発表として長いとは言えない時間であったが、それぞれ完成度の高い発表であったという印象を受けた。また、ひとつの会場でこのように多様なテーマの研究発表が聞けるのは貴重な体験であった。しかし、当初予想していたほど、活発な討論になっていなかったことと、クジ引きで決めたコメンテーターは発表者と同じ分野の場合もあったので、今後はさらなる工夫する必要がある。

4. 今後の課題

前述したように、本セッションは専攻・分野の壁を越えた学術的な交流を目指したものである。しかし、長めの質疑応答を設置したにもかかわらず、会場では予想していた程、活発な討論になっていなかった。異分野の人に自分の研究内容とその意義を伝えることの難しさ、異分野の人に質問する難しさを改めて認識させられた。どのようにしてこの困難を解消し、本当の「異分野コミュニケーション」を生み出すことができるのかは今後大きな課題となる。

また、クジ引きでコメンテーターを決めるという発案は一定の強制力を持って会場の交流を促す効果があったが、参加者の方はせっかく来て頂いたので、聞きたい発表があればそれを優先することを考慮し、先着順でコメントする発表を選んで頂くという形を取ったが、やはり同じ分野の発表が聞きたいので、そのコメンテーターになることを希望した場合もあるので、コメンテーターを決める形式もさらなる工夫が必要であると考えている。

最後に、本口頭発表セッションを実施するにあたり、多くの方のお力添えを頂いた。発表者・参加者の皆様、国立民族学博物館の皆様、基盤総括事務係、各基盤機関事務の皆様、また学生企画委員、フォーラム事務局、アルバイトスタッフの皆様の御協力を頂いたおかげで、本セッションは無事に実施することができた。心より御礼申し上げます。

(日本文学研究専攻 黄昱)

口頭発表セッションプログラム (2014年12月20日 (土))

時間	第3セミナー室	第5セミナー室
13:20~14:00	サウセドダニエル (国立民族学博物館外来研究員) 「ペルー北海岸における考古遺産の研究」	西田彰一 (国際日本研究専攻) 「大正期の憲法学者としての寛克彦の位置づけについて」
14:00~14:40	大石真澄 (国際日本研究専攻) 「台所と食に関するプロトタイプの中のモノに見る高度成長期日本の「生活」と「身の回り」—女性用家庭百科を例に—」	中尾教子 (メディア社会文化専攻) 「教科指導におけるICT活用に影響を与える要因に関する事例研究」
14:40~15:20	君島彩子 (日本歴史研究専攻) 「戦没者慰霊におけるマリア観音の諸相—グアム島・サイパン島の事例を中心に—」	屋代(高野)純子 (日本文学研究専攻) 「日本近現代文学における「観相」言説研究へのアプローチ—「観相」は「科学」なのか—」

2 ポスター発表

1. 企画趣旨

平成26年度学術交流フォーラム（以下フォーラム）では、文化科学研究科外からのポスター2枚を含む、合計23枚のポスター発表が行われた。ポスターは、国立民族学博物館一般来館者も見学が可能な1階エントランスホールに、フォーラム会期であった2日間掲示された。発表者による発表は、会期1日目の15時30分から16時30分の1時間で実施された。

本章は、ポスター発表がどのように企画され、どのように実施されたのか、そしてそれによって見えてきた課題について報告するものである。まずは、フォーラム参加者に配布した予稿集に掲載した企画趣旨を引用する。

本年度学術交流フォーラムでは、学生15名、教員8名の合計23名によるポスター発表が行われます。

キャンパスが各地に散らばる総研大にとって、各専攻の学生、教員間の交流は大きな意義を持ちます。ポスター発表は、それぞれがそれぞれの研究について1枚のポスターを用いて発表し、その場で意見交換を行います。この点から考えれば、ポスター発表は、学生、教員間の交流の機会が最も多く生まれるプログラムと言えるかもしれません。

今回は、発表時間を前半・後半で区切り、発表者の入れ替えを行います。前半に発表を行うグループAに割り振られた方は、前半は発表者として、後半は聴衆として参加していただきます。後半に発表を行うグループBに割り振られた方は、この逆になります。

短い時間ではありますが、学際的な研究交流の場としたいと思います。

このように、本年度ポスター発表は学術交流に主眼を置いた企画であった。より詳細な企画趣旨については、準備の経過について述べながら報告したい。

2. 準備の経過

報告者がポスター発表の企画作業に入ったのは、2014年9月に入ってからのものであった。当初より発表時間は1時間が予定され、その枠の中でポスター発表を企画運営するのが報告者の役割であった。

実施したポスター発表では、オープニングとクロージングにそれぞれ数分を使い、残りの時間は全て発表時間とした。一方で初期の企画案では、クロージングに10分程度の時間を使い、参加者あるいは教員によるベストポスター賞等の表彰、教員による講評を実施することを盛り込んでいた。これは、プログラムに競争を盛り込むことで、参加者のモチベーション向上を狙ったものであった。しかしながら、学生企画委員会等での議論を経て、これらの案は取り下げることになった。これは、多様な専攻から集まったポスターを、1時間のプログラムの中で表彰したり、講評したりすることは困難だろうという結論に達したためである。

その結果、最終的なプログラムは以下の通りとなった。

学術交流フォーラム2014ポスター発表プログラム

15：30 オープニング（2分）

15：32 グループA発表（28分）

16：00 グループB発表（28分）

16：28 クロージング（2分）

16：30 終了

このように、オープニングとクロージング以外は全て発表時間とし、その発表時間を半分で区切り発表者を入れ替えるというプログラムとなった。発表者を入れ替えるという形は、これまでのフォーラムでのポスター発表の形を踏襲したということもあるが、それ以外にもいくつかの意図があった。まず、文化科学研究科の学生・教員がこのように一堂に会するイベントは、このフォーラム以外には存在しない。そのため、発表者も聴衆として参加してもらうことで、交流の機会を少しでも増やそうという意図があった。また別の意図としては、全ての発表者が一度に発表を行うと、聴衆の数が発表者より少なくなりかねない、という現実的な問題もあった。なおグループ分けは、総研大での修学年数の多い学生をグループAに、少ない学生をグループBに優先的に配置し、ポスター発表経験の無い参加者でも、前半の発表を見てから発表ができるように配慮した。これは、前回実施フォーラムでのアンケートにあった提案を受入れたものである。

当初の案から変化が無かった点としては、学生・教員、あるいは専攻毎にひとまとまりにしてポスターを掲示するのではなく、全てをごちゃ混ぜにしてポスターを配置するという点である。我々はとにかく知っている人でまとまりがちになるため、それらを崩して、未知の研究者同士で何かが起こるのを待つ、というのが本年度ポスター発表の企画意図であった。ポスター発表の企画案が最終的にまとまったのは、10月のことであった。

また、本年度フォーラムより実施したことで、パワーポイント形式のポスター用テンプレートを導入したことがある。従来のフォーラムでは、予稿集原稿用のテンプレートのみを配布していたため、掲示するポスターも予稿集原稿用のテンプレートで作成したものを拡大印刷して掲示するケースが多かった。しかしこの予稿集原稿用テンプレートには、印刷用に余白が設定されていたため、ポスターには不適であったこと、また学会ではパワーポイント形式でのポスター作成が標準であること等を理由に、パワーポイント形式でのテンプレートを東城委員長が中心となって作成し、配布した。これにより執筆要項を急いで修正する必要があったが、フォーラムでは創意工夫を凝らしたポスターが多く掲示された。

フォーラムでのポスター発表の実現には、このような企画立案作業だけでなく、多くの事務手続きも必要であった。特に会場であったエントランスホール確保のための国立民族学博物館館内での調整や、ポスターを掲示するパネルのレンタル契約等については、東城委員長、研究協力課をはじめとする国立民族学博物館の方々、葉山の基盤総括事務係の方々を中心に

よって実施された。報告者はこれらの作業についてはほとんど関与していないため、その詳細をここで報告することはできない。

3. 当日の様子



図1 ポスター発表の様子
(報告者撮影)

ポスター発表会場の設営作業は、フォーラム前日夕方にレンタル業者がパネルを搬入することから始まった。報告者および学生アルバイト2名は、事前に発表者に割り振っておいた番号と、前後半に分けた発表時間のどちらで発表するのかを記載した紙を貼付ける作業を実施した。翌フォーラム当日の午前中の中に、使用する机や椅子等の備品を揃え、準備を整えた。

ポスターは、事務局へ発表者が入稿したデータを、基盤総括事務でまとめて印刷する形をとった。そのため、発表者はフォーラム当日の受付で自身のポスターを受け取り、ポスター発表会場の指定されたパネルに掲示するという形をとった。当日は、ポスター発表会場に、報告者および学生アルバイト1名が常駐し、ポスターを持って現れた発表者に対して掲示場所の案内およびポスター掲示の補助作業にあたった。

ポスター発表者による発表は、プログラム通りに進行した。拡声器の調整に少し手間取った程度で、大きな問題は生じなかった。

図1が、実際の発表の様子である。本章末にポスター発表題目一覧、ポスター配置図を資料として添付したが、写真は、ポスター配置図の11番から34番の範囲を写したものである。照明用配線の関係で、パネルの間隔は30cmが限度であった。そのため、隣り合うポスターで発表グループを分けることで、窮屈さを感じないように配慮した。

1グループ30分弱の発表時間は、想像していたよりも短く感じた。報告者の観察では、プログラム開始後しばらくは聴衆がほとんど移動せず、企画者として焦りを感じた。しかし開始後15分程度で聴衆が別のポスターへ動く時間があり、1グループ平均2つ程度のポスター発表に参加できたようであった。これは、1グループで11枚ないし12枚のポスターで発表が実施されたことを考えれば、1グループ2枚程度しか発表に参加することができなかつた、と言うべきであろう。実際にフォーラム参加者より、見たいポスターの全てを見ることができなかつたという意見もあり、工夫が必要である。

4. 今後の課題

今年度学術交流フォーラムでは、23枚のポスター発表が行われた。これは、平成23年度の13枚、平成24年度の11枚（平成25年度は未実施）と比較すると、非常に多くのポスター発表が行われた、と言えるだろう。しかし、その発表の多さに見合った企画を用意できたかと改めて問えば、できなかつたと言わざるをえない。

実のところ初期段階から、ポスター発表は学生15枚、教員15枚の最大30枚程度を想定していた。これは、前例の倍以上の数である。一方で、発表時間は前例通り1時間を想定していた。つまり前例通りの時間で、前例の倍以上のポスター発表を実施するプログラム作りに取り組んでいたわけである。本来であれば、早い段階でこの設定を改め、ゆとりのあるプログラム作りをするべきであった。これは企画責任者である報告者の想像力の欠如と、経験不足に起因する失敗である。

また、本年度フォーラムでは学生15枚に対して教員側からは8枚のポスター発表が行われた。これは、学生数よりも教員数が多い総合研究大学院大学としては、バランスの良い数字ではないだろう。ただしこれは、教員側の参加意識が希薄であること意味しているわけではなく、単純に、フォーラムに関する広報が遅れ、広報が行われた段階では既に予定が入っていたというケースが多かつたようである。12月20日、21日に開催予定であったフォーラムへの参加を呼びかける広報が行われたのは、10月中旬であった。

なお、ポスター発表会場には、発表時間外にもポスターにコメントを残せるように、四角形の付箋を用意しておいたが、全く利用されなかつた。これは、プログラムが過密であったために、そもそも発表時間外にポスターを見る時間が無かつたことが原因であるだろう。

本ポスター発表を実施するにあたり、多くの方のお力添えを頂いた。発表者、参加者の皆様はもちろん、国立民族学博物館の皆様、基盤総括事務係、各基盤機関事務の皆様、また学生企画委員、フォーラム事務局、アルバイトスタッフの皆様、御協力いただいた皆様へ心より感謝申し上げます。

（文責：春藤献一）

資料

学術交流フォーラム2014ポスター発表題目一覧

Group A

自然葬における追悼行為 ―死者の自己実現と生者の自己回復をめぐる葛藤―
金 セツピョル 地域文化学専攻

The Research Cooperative, a social network for better research communication
Peter J. Matthews 比較文化学専攻 准教授

パコパンパ遺跡出土土器の3Dデータベースの構築
中川 渚 比較文化学専攻

近海カツオ漁における海を歩く知識
吉村 健司 比較文化学専攻

和辻哲郎のグローバル倫理学
アントン・セビリア 国際日本研究専攻

日本における諸科学の編成と基礎概念の検討：文理融合研究の有効性を探る
稲賀 繁美 国際日本研究専攻 教授
鈴木 貞美 国際日本研究専攻 名誉教授

海賊史観による世界史の再構築にむけて
稲賀 繁美 国際日本研究専攻 教授

近世日本養生論における音楽療法思想の特徴
―竹中通庵『古今養生録』及び貝原益軒『養生訓』を中心に―
光平 有希 国際日本研究専攻

東国における中世後期集落の一類型 ―屋敷地が散在する集落について―
永越 信吾 日本歴史研究専攻

観相資料の学際的研究
相田 満 日本文学研究専攻 准教授

視覚障害者と共に古写本『源氏物語』を読むための試み

伊藤 鉄也 日本文学研究専攻 教授

和歌山県友ヶ島におけるタイワンジカの遺伝学的解析

松本 悠貴 生命科学研究科 遺伝学専攻

Group B

ルロ祭に見られる民間信仰と仏教の対立 —ウォッコル村の事例から—

チョルテンジャブ 地域文化学専攻

変革する「隔離の島」国立療養所 —「偏見・差別の歴史」から人権を学ぶ場へ—

池永 禎子 地域文化学専攻

Linguistic diversity of cultivated taro (*Colocasia esculenta*) and other aroid species among Formosan tribes in Taiwan

Tsai Kun-Chan 比較文化学専攻

自然災害後博物館の役割 —台湾の小林博物館を例として—

呂 怡屏 比較文化学専攻

A Pirot Study of the 'Third Sector' in China' s Offshore Civil Society-Hong Kong : In the case of the Mapopo' s Community Farm

RUAN LI 比較文化学専攻

東亜聯盟運動と朝鮮・朝鮮人 一日中戦争期を中心に—

松田 利彦 国際日本研究専攻 教授

考古遺跡のドキュメンテーションに関する基礎的研究

宇佐美 智之 国際日本研究専攻

1973年「動物管理法」における立法運動の役割

—日本動物愛護協会機関紙調査報告—

春藤 献一 国際日本研究専攻

浮世絵を研究するために —役者見立絵の考証を中心に—

山下 則子 日本文学研究専攻 教授

第2部 研究成果の公開状況

松代藩における家老御用部屋記録の研究 ―執務日記とその周辺―

太田 尚宏 日本文学研究専攻 准教授

ヘリカル型プラズマ実験装置LHDにおける軟X線検出器の開発

坂東 隆宏 物理科学研究科 核融合科学専攻

ポスター配置図

Group A(前半)
Group B(後半)

アントン・セベリア		坂東 隆宏	
学生	国際日本	学生	核融合
11		12	
14		13	
教員	国際日本	学生	比較文化
松田 利彦		中川 渚	

稲賀 繁美		稲賀, 鈴木	
教員	国際日本	教員	国際日本
21		22	
24		23	
学生	比較文化		
呂 怡屏			

金 セッピール		宇佐美 智之	
学生	地域文化	学生	国際日本
31		32	
34		33	
学生	比較文化	教員	日本文学
Tsai Kun-Chan		伊藤 鉄也	

机	事務局使用机
---	--------

←	2階へ			階段			

机

松本 悠貴		山下 則子	
学生	遺伝	教員	日本文学
51		52	
54		53	
学生	比較文化	教員	比較文化
RUAN LI		Peter J. Matthews	

吉村 健司		チョルテン ジャブ	
学生	比較文化	学生	地域文化
41		42	
44		43	
学生	国際日本	教員	日本文学
春藤 献一		相田 満	

永越 信吾		池永 禎子	
学生	日本歴史	学生	地域文化
61		62	
64		63	
教員	日本文学	学生	国際日本
太田 尚宏		光平 有希	

3 パネルディスカッション：共同研究から見つめる文科のいまとこれから

1. 企画趣旨

「パネルディスカッション：共同研究から見つめる文科のいまとこれから」は、実施にあたり次のような企画趣旨を掲げている。

パネルディスカッション「共同研究から見つめる文科のいまとこれから」では、総研大の学融合共同研究事業に採択されている研究代表者の方とその分担研究者の方々にご報告をお願いしました。

今回のパネルディスカッションは、次の2点を目的として構想されました。1点目は、総研大の研究者による教員・学生に対する研究成果の還元、ならびに研究成果の発信にあたります。私たちの研究活動では、基盤機関における講演会やシンポジウム、共同研究会といったアカデミックな場から、博学連携によるワークショップ、学生を引き連れた実習の場まで、多様な場を通じて現在までの研究成果や萌芽的な知識を伝えていくこととなります。今回のパネルディスカッションでは、各パネルの研究成果を知ること学ぶことのほかに、研究内容の伝達と発信について主催者参加者の間で考えてみることであれば幸いです。

2点目は総研大教員・外部研究者・学生など、多様な立場・所属の研究者が協働している研究活動の様子を知ることです。研究に関わる協働には多種多様な手法があります。まずは本セッションにみられる、特定研究者が研究代表者となり、これまでの個人研究を基盤としながら新しい知見を生み出してゆく共同研究方式が代表的な例です。続いて国や市町村の担当者が事務局を担い、分担研究者と意思疎通を行いながら進められる検討委員会や審議会方式があります（自治体史の出版事業や文化財の調査事業もこれに類します）。そして地域連携・産学連携にみられる異業種の方々と意見交換をしながら、目的に応じて知識やデータを提供することで、現代社会に即応したセミナーやワークショップを行う実行委員会方式も一般に知られる手法です。求められる力量を十全に発揮しつつ、組織的に連携してプロジェクトを進めてゆけるかどうかは、これからの研究者にとって重要な要素の1つでもあるはずです。

以上のように、私たちはパネルディスカッションへの参加を通じて、研究活動における協働の方法を具体的に知るとともに、共同研究の魅力と課題について全体で共有することを目的としています。用いる研究方法論や所属する機関が異なるなか、研究者は共同研究に際してどのような構想を打ち出し、1つの研究課題を解決するために協働するのでしょうか。

最後に、これらの主題は共同研究の内容を理解するばかりではなく、文科のリアルタイムの動きを知ることにもつながります。さらにはチームの組織や予算の執行といった、個人研究とは異なった観点から「カガク」という取り組みについて問うことになるはず

です。ぜひ総研大のプロジェクトを確認することで、私たちの「カガク」の現在とこれからを考えてみませんか？

学生企画委員 東城義則・黄昱

以上の企画趣旨は、人文科学研究の現状と未来を考えることを目指した全体テーマ「文化をカガクする？」に沿い、共同研究における研究成果の公開と共有（アウトリーチ活動）と、共同研究を事例としたさまざまな協働のあり方とを共に学び共有することを目的として設定されている。

このような企画趣旨を設定した背景としては、企画責任者を担った東城が、長期的なフィールドワークによる信頼関係を基盤とした産学・地域連携による環境教育事業を実施するなかで、研究成果を地域社会に還元する方法や、還元するにあたって必要となる協働のあり方、そして多くの人びとと研究成果を共有することで生じる、新しい価値の創出・継承方法について検討していたことに起因する [東城2015]。

さらには今後、人文科学系の研究者のキャリアパスが多様になることで、大学や研究所といった高等教育研究機関において、研究支援活動や産学・地域連携事業など、現代社会とのさまざまな組織や団体と連携した活動に従事する研究者も増加することが予想される。そうした活動・事業においては、他分野の研究者とチームを組んで特定課題について考察・問題解決を図る共同研究や、学協会や行政、特定事業の実行委員会などが中心となって進める各種企画において、オーガナイズやファシリテーションを担うことになる。そのような場においては、活動・事業の目的に合わせて異なる立場の人々と共同作業を行いつつ、これまでの研究蓄積を活用し、事業遂行のために能力を発揮することが求められよう。

このように本セッションは、共同研究の成果報告や研究者間の意見交換に加え、研究者としてのアウトリーチ活動のあり方や、大学院生にとってのキャリアデザインまでを組み込んだ包括的なセッションとすることを企図した。

2. 準備の経過

パネルディスカッションの実施については、第2回学生企画委員会のなかで学生企画委員内より発案されている。それによると文化科学研究科の現状を知る分科会を設置して、そのなかで学融合研究事業に採択されている教員の方々に、パネルディスカッションを依頼する案が掲げられている。続く第3回学生企画委員では、2名の学生企画委員が実施構想を打ち出している（詳しくは第1部第1章参照）。10月2日に実施された第4回学生企画委員会において、総研大学融合推進センターが公募する戦略的共同研究事業に採択されている共同研究「観相資料の学際的研究」「在ハワイの日本歴史・文化資料をめぐる国際共同研究—ハワイにおける日本文化の受容」の研究代表者と共同研究者とにパネリストとして報告を依頼することとした。そこで研究代表者の所属する基盤機関の学生企画委員から、学術交流フォーラム2014の実施要領とパネルディスカッションの構想について状況説明を行っている。以下、

2つのパネルディスカッションの準備経過について個別にまとめる。

「観相資料の学際的研究」については、研究代表者の日本文学専攻の相田満教授と日本女子大学の三田明弘教授とにパネリストとして報告をお願いすることとなった。10月末の段階において事前交渉を進め、11月4日に実施された第5回学生委員会において、パネルディスカッションの趣旨について検討した後、11月の段階において担当責任者より詳細な企画趣旨の説明を行っている。

「在ハワイの日本歴史・文化資料をめぐる国際共同研究—ハワイにおける日本文化の受容」については、研究代表者である大久保純一教授と日本歴史研究専攻の秋山かおり氏にパネリストを依頼した。第4回学生企画委員会後に、学生企画委員の鈴木を通して簡単な照会を行った後、12月第1週にパネリストの方々へ開催趣旨と発表内容の調整に関する連絡がとられることとなった。

このほかの準備作業として、コメントペーパーを用いた発表内容の共有作業がある、第5回学生企画委員会において、企画責任者からパネルディスカッションに参加する学生・教員に対して、発表に対する感想を主催者・発表者・参加者の間で共有するため、コメントペーパーを準備することが提案された。コメントペーパーは学生企画委員の黄によって作成され、当日、フロアにて配布される手はずが整えられた。

なお「観相資料の学際的研究」については、学外の方にパネリストを依頼する方針となったため、基盤総括事務係より学外の発表者に連絡をとり旅費手続きが行われている。

3. 当日の様子

当日は両会場ともパネリストがスクリーンを用いて報告を行っている。報告終了後、机を移動させて、パネリスト2名がフロアと質疑応答できるよう配慮した。

第5セミナー室にて開催された「観相資料の学際的研究」では、パネル報告の終了後にコメントペーパーを配布して、質疑応答中にその場で参加者にコメントペーパーを記入していただき、記入を完了した方からコメントペーパーを回収している。そしてパネリストとフロアとの質疑終了後、司会の方で回収したコメントペーパーを読み上げ、パネリストとフロアとを媒介してより議論を深化させる手法をとった。

また第3セミナー室にて開催された「在ハワイの日本歴史・文化資料をめぐる国際共同研究—ハワイにおける日本文化の受容」についても、質疑応答を始める前に司会よりフロアにコメントペーパーを配布し、参加者は質疑応答中にコメントペーパーを記入していただき、セッション終了後に出入り口にてコメントペーパーを回収した。

回収したコメントペーパーは、ホワイトボードに貼り付けて懇親会場へと持ち込んでいる。コメントペーパーの内容に関心のある参加者は、懇親会場においてホワイトボードを覗き込み、参加者側から出た意見を確認していた。

【表1】 パネルディスカッションのプログラム表（当日配布の予稿集原稿より）

時 間	第3セミナー室	第5セミナー室
16：40～17：40	「観相資料の学際的研究」 相田 満（日本文学研究専攻 教授） 三田 明弘（日本女子大学 教授）	「在ハワイの日本歴史・文化資料を めぐる国際共同研究 —ハワイにおける日本文化の受容」 大久保 純一（日本歴史研究専攻 教授） 秋山 かおり（日本歴史研究専攻）
17：40～17：55	質疑応答 コメントペーパーの記入	

4. 今後の課題

本セッションの実施にあたり、2点の課題を残している。1点目として、企画実施にいたるまでの学生企画委員間の役割分担と連携のあり方である。学生企画委員長の立場にあった企画責任者は、総研大と国立民族学博物館との間の共催手続きや各セッションの事務調整作業を優先したため、本セッションの実施に必要な調整作業を後手に回すこととなった。その結果、企画責任者からパネルディスカッションを依頼する学生・教員への趣旨説明等の連絡が遅れ、参加予定の教員・学生に対して予稿集原稿の執筆時間や報告内容の準備時間を十分に確保して対応することができなかった。このことは、企画責任者を中心とした学生企画委員同士の連携によって、セッションの実施に向けた役割を細分化することで、未然に防止可能な事態であったと考えられる。そのため当企画においては、企画実施にあたり企画責任者による役割分担の細分化作業と、学生企画委員間の適切な連携という面で課題を残した。

2点目の課題として、総研大の教員や関心を持つ一般の方々への広報と周知である。本セッションは、総研大文化科学研究科の教員・学生が現在進めている研究プロジェクトを知ることのできる格好の場である。学内学外を問わず、パネルディスカッション内容について広報を進めることで、各研究者の成果報告という側面以外に、文化科学研究科の学術研究の現在を知ってもらう、一般に対するアウトリーチの役割も果たすことが可能である。パネルディスカッションはこれまでの学術交流フォーラムでも実施されてきたが、その実施目的は個人研究や共同研究によって生じた学術成果の共有を図ることに念頭が置かれてきた。パネルディスカッションを対外的なアウトリーチの手法として有効に活用することが可能となれば、学術交流フォーラムは学外の研究者や大学院生の参加を視野に入れた、人文科学の研究に従事する多様な人びとの交流の場として機能することも期待される。

【参考文献】

東城義則 2015「産学・地域連携による交流型環境教育事業—「奈良のシカ」環境学習セミナー2014の実施—」『学融合推進センター News Letter』19:8-10

（文責：東城義則）

第3部 個別企画の成果報告

1 総研大クッキングスクール：

パレスチナシャーム地方のムジャッダラを食す

開催日時：2014年12月21日10：00～12：45

ワークショップ講師：国立民族学博物館 菅瀬晶子助教授

本ワークショップは、平成26年学術交流フォーラム会期2日目午前の部(10:00～12:45)に、国立民族学博物館4階生活科学実験室で実施された。参加人数は、ワークショップ参加者8名、スタッフ5名、ワークショップ講師1名の計14名である。

本稿では、本ワークショップの企画趣旨、企画の準備過程、当日の様子、まとめの報告をおこなう。

1. 企画趣旨（フォーラム当日に配布した予稿集に掲載した企画趣旨からの引用）

料理体験ワークショップは、「シリオウの体験」を目的とする今回のフォーラムにおいて、味覚、嗅覚、触覚、視覚、聴覚の五感を使ったシリオウ体験として実施いたします。食の再現は時間や距離を超える事が出来ると言えます。食文化研究は「食は文化である」という視点から、国立民族学博物館三代目館長を務めた石毛直道名誉教授が大きな礎を築き、本格的な研究がなされるようになったのは1970年代になってからと言われています。

今回、会場として使用する生活科学実験室は1985年以降に石毛先生がみんなくの教職員に向けてクッキングスクールを開催していた場所でもあります。当時行われていたクッキングスクールに思いを馳せ、《生きたシリオウ》体験が出来る場として本ワークショップを企画しました。

料理体験ワークショップを行う趣旨として、異国料理の作り方を学ぶ事や、異国の味を食べる。といった、一般的な料理教室とは趣が異なり、また文献に記された資料の再現を試みる機会ではありません。

本ワークショップでは、中東をフィールドに調査されている菅瀬晶子助教を講師としてお招きし、パレスチナ：シャーム地方の家庭料理ムジャッダラを体験していただきます。①レクチャー②調理③食事という段階を踏まえ、ムジャッダラに込められた文化的背景や地理的条件の背景を学び、実践的なシリオウ体験となることを目的としています。

2. 企画の準備過程

1：企画立案について

本企画は当初、企画者の食文化への関心と、参加者同士の交流をはかる潤滑剤として「食」にまつわる企画をいくつか提案した。学生企画委員が始まった当初に提案した企画案は具体性がなく、実現性を考慮していない内容であるが記録として記述する。

第3部 個別企画の成果報告

当初の案は、①上方落語の落語家を招聘し、「食」にまつわる噺を演じていただく。（「饅頭こわい」を演じてもらい最後に饅頭を食べる）、②食にまつわるポスター発表など研究発表会、③食にまつわる資料体験、④食にまつわる映像上映を案として提示した。

10月に入り、具体的に内容を詰める段階で、「シリョウ体験」がサブテーマとなっている本フォーラムと「食」をどのように結びつけるのかを模索し、料理体験型のワークショップをおこなうことにした。

企画の着想は、石毛名誉教授のアーカイブス《石毛直道食文化アーカイブス》のページ内にある (<http://ishige.syokubunka.or.jp/ishige/>)、「石毛クッキングスクール：料理好きが高じて、1985年以降国立民族学博物館の職員むけに料理講習を行った。」という内容からである。この記事を終研大入学前に読んだ企画者は、石毛先生が研究されてきた食文化の知識を、石毛先生の料理を通じて体験することが出来たのではと、当時行われていたクッキングスクールに憧憬を抱き、入学後は生活科学実験室を「聖地」のように見てきた。そのような経緯から、人類学の研究者の視点から見た「食文化」は、クッキングスクールを介することで、実践的な生きた「シリョウ体験」になるのでは、という着想のもと企画を立案した。

2：ワークショップ企画時の課題

「食」にまつわるワークショップを開催するにあたり、当初2つの問題点がでてきた。問題点と解決内容を記す。

1. 予算面：「食」に関する内容は、総研大学生フォーラム事業から予算が下りない。

→ 一人1000円程度の会費徴収制にすることで解決。

2. 衛生許可：会費制の調理体験を実施するにあたって、衛生許可が必要なのでは？

→ 国立民族学博物館の管轄である吹田市の保健所に連絡を取る。保健所からは、不特定多数に振る舞う場合は衛生許可が必要であるが（文化祭の模擬店など）、特定の人を対象とした料理教室は許可の必要は無いと回答を頂いたため、衛生許可申請はおこなっていない。

3：ワークショップまでの準備スケジュール

10月21日	本フォーラム学生企画委員長東城を通して、菅瀬晶子助教授にワークショップ講師の依頼をする。
10月24日	菅瀬先生にご挨拶、当日の打ち合わせ。 (準備するもの、当日の流れ、リハーサルの日程調整)
12月10日	材料の買い出し、発注作業。
12月16日	調理リハーサル。
12月20日	会場準備（生活科学実験室のセッティング、機材準備）
12月21日	ワークショップ当日

3. ワークショップ当日の様子

1：ワークショップ講師プロフィール

氏名（所属専攻・職名）	菅瀬 晶子（国立民族学博物館 助教）
略歴	〔学歴〕 2006年総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学修了 〔職歴〕 日本女子大学ほか非常勤講師 総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員 同大学学融合推進センター特別研究員 国立民族学博物館
専門分野	マイノリティ、宗教・儀礼、エスニシティ
現在の研究テーマ	東地中海アラブ諸国における宗教的アイデンティティの表象

2：タイムスケジュール

08：00	食材の仕込み
09：00	機材設営（スライドの準備）
10：00	参加者集合時間
10：05	趣旨説明
10：10	レクチャー（スライド）
10：40	調理
12：00	実食
12：45	解散（移動）

3：レクチャー内容

当日は30分のスライドによるレクチャーを講演していただき、パレスチナシャーム地方の風習、生活、宗教のお話を踏まえ、少数派のキリスト教徒が安息日（毎週金曜日）に食べる「ムジャッダラ」に込められた背景を学びとることができた。ムジャッダラは、タマネギ、ブルゴル（引き割り小麦）、オリーブオイル、レンズ豆、塩で、地中海性気候に育まれた土地の産物であり、地産地消で作られた料理である。また、ブルゴル（小麦）はキリストの肉体を表しているとされ、「ムジャッダラ」に込められた宗教的な側面と文化的な側面を学ぶ機会となった。レクチャー時間は約30分で、菅瀬先生が現地で撮影された写真交えてお話をしていただく。レクチャーの最中も、参加者から活発に質問が飛び交い、終始和やかに進んでいたのが印象的である。



レクチャーの様子（画面右：スライドをもとにお話をする菅瀬先生）

4：調理スタイル

当日は、鍋一つで作る料理の特性と時間の関係で、菅瀬先生の調理を見る形式で進めた。調理とともに、食材等の説明をしていただく。

5：調理内容

ムジャッダラ、サラダ、セージティー

6：調理材料（15人分）

ムジャッダラ	
玉ねぎ	8玉
オリーブオイル（パレスチナ産）	750ml×2本
塩	適量（味を見ながら調整）
ブルゴル	500g
レンズ豆	500g

サラダ

玉ねぎ	7玉
トマト	10玉
きゅうり	20本

レモン汁	レモン1つ分
オリーブオイル	野菜量に対して回しかける（目分量）
塩	適量

セージティー

紅茶	30g（お湯4リットル）
セージ	2つまみ

菅瀬先生によれば、ムジャッダラの付け合わせに茄子やオリーブのピクルスを添えたり、サラダは、ニンニクやパクチーを和えることもある。当日は、最もシンプルで基本的なレシピを再現した。



（左からレンズ豆、ブルゴル、パレスチナ産オリーブオイル）

7：調理手順

ムジャッダラ

1. みじん切りに刻んだ玉ねぎをオリーブオイル全量に浸し火にかける。
2. 玉ねぎがあめ色になるまで火にかける。（40分前後）
3. その間レンズ豆を水にいれふやかしておく。

第3部 個別企画の成果報告

4. 玉ねぎがあめ色になったらオリーブオイルをザルでこして、玉ねぎを鍋に戻す。
5. 玉ねぎとレンズ豆を鍋に入れ、ひたひたの水を入れて火にかける。(15分前後)
6. レンズ豆がふやけたら、ブルゴルをいれて蓋をして炊くように煮る。(15分前後)
7. 塩で味付けをして、最後に4で取り分けたオリーブオイルをまわしかけあえる。

サラダ

1. きゅうり、玉ねぎ、トマトをみじん切りにする。
2. みじん切りにした野菜に、レモン汁とオリーブオイルをかけて混ぜる
3. 塩をかけて混ぜる

セージティー

1. 鍋にお湯と紅茶の葉をいれて、セージを入れて煮立たせたら完成

8：調理中の様子

- ・たっぷりのオリーブオイルで揚げ炒めている玉ねぎの匂いが食欲をそそる。菅瀬先生によれば、毎週安息日になると街中でこの玉ねぎを炒めている匂いがする。
- ・菅瀬先生は調査中、現地の料理家の女性の家庭に宿泊している。料理家の女性からムジャッダラを作る過程で、玉ねぎをどこまで炒めれば美味しいかを厳しく学んだという。玉ねぎの炒め具合をサボると味がぼやけるため、いい黄金色になるまで炒めるのが重要であると説明があった。
- ・ムジャッダラは「あばた面」を意味している。(レンズ豆とブルゴルの細かさが、あばた面(にきび面)を喚起させることから)
- ・オリーブオイルは自家製であったり、親戚や友人が作っているものを使っている家庭が多い。オリーブの渋抜きは塩でおこなっている。ブルゴルも自家製を使用している家庭もある。
- ・日本で流通している一般的なエキストラバージンオリーブオイルと、パレスチナ産のエキストラバージンオリーブオイルのテイastingをおこなった。オリーブオイルは、舌に残る重みと旨味を感じる。料理に使われる食材の産地によって、料理の味が変わるのが実感出来る。という感想が出る。



(左からムジャダラ、セージティー、サラダ)



(食事の様子)

8：食事に出た感想

- ・食事は、オリーブオイルは750mlを2本使用しているため油が強い印象を抱いていた。実際口にすると、よく炒めた玉ねぎの旨味とブルゴルの食感、レンズ豆の甘みが非常に良く合い、箸が進む。
- ・サラダは、レモンの酸味とオリーブオイル、塩といったシンプルな味付けではあるが玉ねぎ、トマト、キュウリの爽やかさが、ムジャッダラとよく合う。
- ・セージを入れると清涼感を感じ、これもまた、ムジャッダラとよく合う。
（セージティーは、セージを入れる前と、入れた後の味の違いを感じてもらうため、レクチャーから調理の段階には、セージを入れていない紅茶を、実食の際には、同じ紅茶にセージを煮立たせたものを出し比較した。）
- ・ムジャッダラとサラダはいずれも、塩とオリーブオイルのみのシンプルな味付けであるが、素材の味が引き出され濃厚な味付けになっていた。

最後に、調理したものを実食することで、レクチャーや調理実践で得た情報が、より伝わる「シリョウ」体験となったと考えている。(1)レクチャー(2)調理(3)食事の体験から、レシピによって再現される「ムジャッダラ」ではなく、「ムジャッダラ」によって、菅瀬先生がご研究で見てきたパレスチナのシャーム地方について学ぶ機会となった。本ワークショップを通じて、研究成果を他者に伝える一つ的手段として、このようなワークショップ形式の有用性と意義を感じている。

4. 収支報告

実食が伴う企画案には予算が降りないため、会費徴収制でワークショップをおこなった。本ワークショップは、学生フォーラムの企画で会費を徴収した事例になると考えている。

1：支出

	個数	値段(円)
玉ねぎ	15玉	635
トマト	10	950
キュウリ	20	450
オリーブオイル	750ml×3本	5,508
セージ	1袋	515
紅茶	1箱	250
塩	1袋	258
ブルゴル	1袋	1,296
レンズ豆	1袋	1,080
レモン	1つ	120
紙皿、紙コップ、スプーン	20人分	1,500
合計		12,562

2：収入

参加費	8名分	8,000
カンパ（七田先生より）		3,000
合計		11,000

3：収支

支出	12,562
収入	11,000
差し引き金額	-1,562

会費は、学生フォーラム開催日の受付時に徴収した。徴収時に、当日のキャンセルや、申し込んでいないのに名簿に名前が記載されている。という事態が生じた。その結果、事前に知らされていた参加人数と、実際のワークショップに参加する人数に誤差が生まれた。そのため、見込んでいた参加費（収入予算）に満たず赤字支出となる。（黒字が出た際は、ワークショップ終了後に返金をおこなう予定であった。）

ワークショップ終了後に、七田先生のご厚意でカンパを頂いた。負担していただく事態を招いてしまったのが今回の、大きな反省点である。

会費徴収制の企画は、事前徴収される懇親会費用と合算して参加費を徴収することが望ましい。

また、他の企画は無料で充実した内容であるのに対し、参加費を徴収しておこなう企画が学術交流フォーラムに適しているのか、企画者自身の葛藤もあった。参加学生が比較文化学専攻と地域文化学専攻の学生のみであったのも、反省点の一つである。参加費を差し引いても参加したくなるような、広報や企画を考えることも課題である。残った課題は多いが、本ワークショップは菅瀬先生のお力添えもあり、参加者の方からは盛況の手応えを感じている。

5. まとめ

入学歓迎会の席で東城委員長から、「本年度のフォーラム委員になりませんか」と声をかけていただいた。入学後の忙しさに関して楽観的であった私は、二つ返事でフォーラム委員に参加することになった。前期のフォーラム委員会では、まだ明確に状況を把握していなかったが、回を重ねる毎に総研大の仕組みや特徴、フォーラムの企画意義を理解することができた。

本ワークショップは、「食」をテーマに企画を立案したが、企画者自身の博士論文の執筆に向けた研究内容と「食」は直接のところ関係がない。本来なら、自分の研究と寄り添った企画を提案し、実績として残すのが正しい形であると思われる。

あえて、現在の研究と直接関係のない、関心のあるテーマをどのように消化していくかを考える機会として、このフォーラムで形にすることを試みた。このワークショップを通して得た経験は、今後大きな糧になることを確信している。研究内容を伝える手段の一つとして、

第3部 個別企画の成果報告

このようなワークショップ形式は相互参加の利点を強く感じることができ、参加者の理解を深く促すことを実感している。

最後に、フォーラム委員の負担と、研究活動の兼ね合いについて、反省会でも多く意見が出た。私自身、授業の履修数と、課外活動、本フォーラムの仕事の多忙さに追われた一年であった。私は目の前のタスクを消化することに追われ、自主的な準備作業面での反省を感じている。関係者の皆さまのフォローの上で本企画が成し得たと言える。今回の反省点や課題を、今後の研究活動や成果発表の場において活かしていきたい。

一方で、フォーラム委員としての経験を振り返ると、企画者と、参加者として二つの視点から学びを得ることができた。企画者としては、他専攻の学生委員との会議で生まれる刺激や、フォーラム担当の先生方のアドバイスから研究者としての姿勢、企画事業の心構えを学ぶ機会となった。参加者としては、他専攻の先生方や学生の皆さんと交流することで様々な学びを得た。このような機会は大変貴重であり、本年度、学生委員として本フォーラムに携われた意義を感じている。

謝辞

本ワークショップを実施するにあたり、多くの方のお力添えを頂きました。講師の菅瀬先生、ワークショップ参加者の皆様、ワークショップ開催にあたってご指導いただいた、佐々木先生、藤井先生、七田先生、基盤総括事務係、各基盤機関事務の皆様、学生企画委員、フォーラム事務局、アルバイトスタッフの皆様へ心より感謝申し上げます。

【参考文献】

菅瀬晶子

2014「ムジャッダラ考とある家庭料理をめぐる、シャーム地方文化論」

『季刊民族学』143号,pp.57-74

(文責：西山文愛)

2 寄り添いの音・音楽—伝える・祝う・送る—

1. 開催目的及び趣旨

本ワークショップは2014年12月21日（日）10：00～12：00に、国立民族学博物館の1階エントランスにおいて、音・音楽に注目し「聴く」「見る」「体験する」ことを通じて、資料・史料・試料と記される「しりょう」の多面的な性質をカガクすることを目的に開催された。

音・音楽を主として感知する聴覚は、人体の五感のうち最初期から最終期まで残ることから、音・音楽は人生に最も長く介在するものであるともいわれる。また、これらは娯楽や芸術鑑賞のほか、想いを伝える場、祝いの場、人を看取る・見送る場など、各民族や地域での日常生活の中で広く用いられ、人間の生きる営みに大きく寄り添うものでもある。こうしたことから本ワークショップでは「伝える」「祝う」「送る」という場面に焦点を当て、その中で果たされる音・音楽の役割や可能性について考えた。

2. 前日までの準備過程

本ワークショップの準備過程としては、8月から9月初旬にかけて、報告者が現在行っている音楽療法思想史研究の観点から、人生に介在する音・音楽に着目することを構想の骨子として、「資料・史料・試料と記される『しりょう』の多面的な性質をカガクすること」を目的に掲げることを決定した。また、それと同時に「伝える」「祝う」「送る」という3つの視点を切り口として、「聴く」「観る」「体験する」ことを通じて、五感をできる限り用いることにより音・音楽の役割や可能性を考えていく場にすることも決定した。

そして9月中旬以降、3つの視点に関連のある楽器の検索作業に着手した。ただし探す条件として、ワークショップの性格を鑑み、その楽器についてのレクチャー及び演奏ができる人物が総合研究大学院大学関係者内にいること、また、楽器体験では開催地である国立民族学博物館の収蔵品を用いることという二点を念頭に置いた。その結果、「伝える」音楽に関しては「ひょうたん笛」、そして「祝う」「送る」音楽に関しては「ガムラン」に着目することが10月の段階で決定した。また、演奏及びレクチャーに関しては、総合研究大学院大学の修了生で現在、国立民族学博物館外来研究員の伊藤悟氏にレクチャーと演奏を、そして「ガムラン」に関しては総合研究大学院大学・文化科学研究科メディア社会文化専攻の仁科エミ教授によるレクチャー及び国立民族学博物館収蔵品を用いての楽器体験と、ガムラン演奏団体チャンドラ・バスカラによる演奏・舞踊をお願いするに至った。当初、仁科教授が演奏活動をしている関東拠点のガムラン演奏団体に演奏を依頼することも検討したが、予算の都合上断念し、大阪・西梅田を活動拠点にもつチャンドラ・バスカラを仁科教授より御紹介いただき、実演が可能となった。

次に10月下旬より当日の体験及び展示で用いる楽器について、国立民族学博物館標本係の方々との選定打ち合わせが始まった。ガムランに関しては、事前に仁科教授と当日のレクチャー内容に関しての打ち合わせを東京都中野区にある国際科学振興財団東京プロジェクト室

第3部 個別企画の成果報告

で行った折、楽器体験において使用希望ガムラン編成（ガムラン・ゴンクビヤール）の指示を受けていたため、その編成に沿ったガムランを検索したが、それに相当するガムランの収蔵品は少なく、また、展示用ではなく、楽器体験時の衝撃に耐えうるかについてが、協議の大きな焦点となった。今回、このガムラン選定に関しては、標本係の西澤昌樹氏を通じて、国立民族学博物館及び総合研究大学院大学の福岡正太准教授の御教示を仰いだ上、Ugal（2台）、Kanthil（4台）、Kenyal（2台）、Jegogan（2台）、Kendang Gupekan（2台）、Ceng-Ceng（1台）、Rebab（1台）、Kenong（1台）の貸出許可を得た。また、ひょうたん笛も4つの収蔵品を借りることができた（しかしひょうたん笛に関しては、伊藤氏に確認したところ、収蔵品のひょうたん笛には薬品などが付着しており口にくわえることができないため、体験には用いることができないこと、また、あまり状態がよくないことから、実際のレクチャー及び演奏時には用いることはなかった）。この楽器選定に関しては、10月末から12月半ばまでのおよそ1ヶ月半にも及ぶ期間での調整が必要であり、その間、4回に及ぶ国立民族学博物館での話し合いのほか、西澤氏とのメール及び電話打ち合わせの末、確定することができた。国立民族学博物館での話し合いに関しては毎回、総合研究大学院大学の佐々木史郎教授、本フォーラム事務局・宮脇氏、本フォーラム学生企画委員長・東城氏のいずれかの方々が同席してくださったことで、外部学生である報告者も収蔵品に関して標本係の方々と円滑に話し合いを進めることができた。また、楽器決定後は収蔵品の使用許可申請及び搬入・搬出方法と日時の打ち合わせも行った（搬入・搬出に関しては、12月19日に収蔵庫荷解きへ標本係の方々が楽器を設置→12月20日午後17時より1階エントランスへ搬出→本番→12月21日のワークショップ終了後に収蔵庫荷解きへ返品）。

さらに、楽器の選定と並行して行った作業としては、11月中旬より発表者の経歴と発表内容の提出依頼及び予稿集原稿の作成、謝金交渉国立民族学博物館収蔵の視聴覚資料の貸し出し手続き、当日のタイムテーブル作成、設置場所の選定及び図化作業、必要備品のチェックなどを行った。なお、本ワークショップで用いた備品は以下の通りである。

[会場]

客席用椅子30脚 奏者及びレクチャー講師の椅子10脚 長机1個
レクチャー用大型テレビ1個 延長コード1個 拡声器1個
バメモリ用色付きビニールテープ1個 はさみ1個 展示用ガムラン下敷き布1枚

[控室]

姿見鏡1個 顔鏡2個 着替え用セパレート1個 ポット1個 お茶セット1セット

3. 前日・当日の準備及びタイムテーブル

1. 前日・当日の準備

[前日]

前日には仁科教授及びお手伝いいただく各基盤の研究協力課の方々と、タイムテーブルを用いて本番とその前後の動きを確認する事前打ち合わせのほか、レクチャー用大型テレ

びの映像・音響確認を行った。さらに、アルバイトの方々と当日の裏方の流れを確認したのち、ガムランを収蔵庫荷解きから1階エントランスへ移動させた。

[当日]

当日の朝にはエントランス及び控室である第6セミナー室の開錠のほか、院生室から大型テレビの移動と接続、椅子・机・映像機器の設置を行った。

2. タイムテーブル

本番のタイムテーブルは以下の通りである。

開始時間	内容	演奏者・話者(レクチャー含)	時間	備考①	備考②
8:30	チャンドラ・バスカラ第1軍到着			藤井さん・光平出迎え⇒6セミへ案内	大谷さんは6セミ(お茶・鍵担当) ※貴重品の管理は個人でしてもらう
9:00	チャンドラ・バスカラ第2軍到着			藤井さん・光平出迎え⇒6セミへ案内	
9:15 (9:30頃)	チャンドラ・バスカラ楽器搬入後、リハーサル (リハーサル横で伊藤氏映像確認)			光平・伊藤氏出迎え⇒6セミへ案内	
10:00	趣旨説明・伊藤氏紹介	光平	5分		●大谷さんは6セミ(お茶・鍵担当) ※貴重品の管理は個人でしてもらう ●会場では、生花の片づけ及びガムランを荷解きへ搬入
10:05	ひょうたん笛演奏&レクチャー(体験含む)	伊藤	45分	伊藤氏スタンバイ	
10:50	伊藤氏への御礼・休憩アナウンス	光平	1分	アナウンス後、伊藤氏/光平はけ	
10:51	休憩			休憩中に仁科教授/チャンドラ・バスカラスタンバイ	
10:55	仁科教授/チャンドラ・バスカラ紹介	光平	3分	紹介後、光平/仁科教授はけ	
10:58	ガムラン演奏・舞踊	チャンドラ・バスカラ	15分		
11:13	ガムランレクチャー	仁科	30分	演奏終了後、仁科教授スタンバイ	
11:43	ガムラン楽器体験(アンサンブル)	聴衆+仁科+山本	15分	聴衆を楽器へ速やかに誘導	
11:58	仁科教授・チャンドラ・バスカラへの御礼・の言葉	光平	2分	全員楽器周りにいる中でアナウンス	
12:00	終了後、出演者には一旦6セミへ行っていただいたのち、適宜着替え及び楽器搬出をしていただく。			藤井さん、出演者を6セミに案内	

4. 当日の様子

1. 講師及び奏者の経歴及び研究分野

「伝える」音・音楽に関しては伊藤悟氏にレクチャーと演奏をお願いし、伊藤氏の経歴等については以下の通りである。

氏名	伊藤 悟 (国立民族学博物館・外来研究員)
略歴	学歴 雲南大学 筑波大学地域研究研究科 (修士) 総合研究大学院大学文化科学研究科 (博士)
専門分野	文化人類学、民族音楽学、映像人類学

第3部 個別企画の成果報告

現在の研究テーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・タイ系民族の生活のなかの芸術と美的感性の変容 ・東アジア・東南アジアの少数民族社会における映像メディアと伝統芸能の現代的展開 ・徳宏タイ族の織機の音と紋織物をめぐる感性
----------	---

また、「祝う」「送る」音・音楽に関しては仁科教授にレクチャーを、チャンドラ・バスカラに演奏をお願いし、仁科教授及びチャンドラ・バスカラの経歴等については以下の通りである。

氏名	仁科 エミ (総合研究大学院大学 文化科学研究科 メディア社会文化専攻・教授)
略歴	<p>学歴</p> <p>東京大学文学部西洋史学科卒、同工学部都市工学科卒、東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻修士課程修了、同博士課程修了・工学博士</p> <p>職歴</p> <p>東京大学、文部科学省メディア教育開発センターなどを経て、総合研究大学院大学文化科学研究科メディア社会文化専攻・放送大学教養学部情報コース</p>
専門分野	情報環境学
現在の研究テーマ	知覚限界を超える高密度音響・映像が人間に及ぼす生理・心理・行動的影響、視聴覚情報環境と脳との適合性の評価
団体名	チャンドラ・バスカラ Chandra-Baskara
略歴	バリ島(インドネシア共和国)のガムラン音楽と舞踊のグループとして、2009年に結成。西梅田に拠点を置き、「みんなく 音楽の祭日」「関西バリ舞踊祭」「瀬戸内芸術祭」などの催しに出演する傍ら、「リンティック(竹ガムラン)シリーズなど、ガムランを身近に楽しむことのできる自主企画、ワークショップ、定期講座でガムラン音楽の普及に努める。

2. レクチャー及び演奏・体験内容

まず、「伝える」音・音楽では「ひょうたん笛」に焦点を当て、「にじむ音、あざう音——ひょうたん笛と音文化」という題目のもとでレクチャー及び演奏が行われた。「ひょうたん笛」(葫蘆絲〈フルス〉)とは、素朴な音色と愛らしい形が話題となり、少数民族の伝統文化の発展を象徴した楽器として2000年頃から流行しているという。そのルーツは、雲南省やビルマ、タイ北部に暮らす少数民族の未婚男性たちがかつて音で女性に恋心を伝えた楽器であった。本レクチャーで伊藤氏は、ひょうたん笛の実演を交えながら、タイ族社会における音によるコミュニケーションの技法や楽器の変化について、演奏方法や音色、そして演奏の文脈から解説をした。それにより、会場は変わりゆく楽器や音楽と共にある音の感性について考える場となった。



(写真①「ひょうたん笛」のレクチャーをする伊藤悟氏)

続いて、「祝う」「送る」音・音楽では「ガムラン」に焦点を当て、まずチャンドラ・バスカラによる「ガムラン」演奏を行った。ここではPemade、Kantilan、Jublag、Gong、kendang kajarを用いた8名による合奏と、2名による舞踊で〈パニユンブラマ〉〈マルガパティ〉など3曲の演奏が行われた。





(写真②③) 「ガムラン」演奏及び舞踊を披露するチャンドラ・バスカラ

その後、「ガムランへの情報脳科学的アプローチ——音楽・情報・脳・社会から音“しりょう”を考える」という題名のもと仁科教授がレクチャーを行った。バリ島の祝祭・葬祭儀礼のなかで重要な役割を果たしている「ガムラン」の演奏及び舞踊は神々への捧げものであると共に、共同体の自己組織化を導く社会の葛藤制御としての機能があるという。本レクチャーでは、その響きに含まれる豊富な超高周波成分が可聴音と共存すると、間脳・中脳などの活性を高め、多様でポジティブな生理・心理・行動的効果がもたらされるという情報脳科学的アプローチからの提言がなされた。



(写真④) 「ガムラン」のレクチャーをする仁科教授

そして最後に、国立民族学博物館収蔵品であるUgal（2台）、Kanthil（4台）、Kenyul（2台）、Jegogan（2台）、Kendang Gupekan（2台）、Ceng-Ceng（1台）、Rebab（1台）、Kenong（1台）を用いた楽器体験では、仁科教授及び総合研究大学院大学文化科学研究科メディア社会文化専攻の山本由紀子氏によるデモンストレーションの後、希望者を募り、高音楽器を用いた2パートによる合奏が行われた。



（写真⑤ 「ガムラン」の楽器体験時の様子）

当日、会場の1階エントランスは、国立民族学博物館への一般来場者の受付場所からも近く、本学術交流フォーラム参加者に加え一般来場者も多数参加したことにより、活気のある空間となった。

5. 後片付けと事後処理

ワークショップ終了後は即時、椅子や大型テレビなどの撤収を行った。その上で収蔵品を収蔵庫荷解きに返却したほか、舞踊で用いた花びらの回収及びエントランスの掃除を行った。また、出演者の見送り後、第6セミナー室の片付け及び備品を返却し、施錠を行って当日の作業は完了とした。後日、収蔵品の返却書類を東城氏より標本係へ、そして視聴覚資料を宮脇氏にそれぞれ提出・返却していただいた。

6. まとめ及び今後の課題

本ワークショップは、報告者の研究テーマである音楽療法思想という研究的関心の土壌を基盤として企画したものである。報告者が通常行っている研究は日本を含む東アジア及び西洋を中心とするものであり、立案当初は今回取り上げた国々の楽器や音・音楽と人々の営みに関しての知識は皆無に等しかった。しかし、本ワークショップ開催にあたり行った自主的

第3部 個別企画の成果報告

予習及びレクチャー講師からの御指導、また当日のワークショップ内容・演奏・楽器体験を通じて、「しりょう」としての「ひょうたん笛」や「ガムラン」への知識や研究の可能性への視座が深まった。これは、報告者自身にとっても今後の研究への発展に大きな示唆を含むものであり、大変貴重な学びの場となった。また、本ワークショップを通じた研究活動に用いる「しりょう」の性質及び研究内容・方法の多面性への再理解を今後、自身の研究活動にも活かしていきたいと考えている。さらに、ワークショップを立案・運営するという日頃の研究生生活のみでは行うことのできない体験を通して、多くの糧を得た。

反省点としては、まず国立民族学博物館と対峙する全ての準備段階において、基盤所属の先生方や学生企画委員及び事務局の方々の助力を得て行ったことが挙げられる。このことが、役割の偏り、仕事負担の増加を生み出したことは紛れもない事実であり、積極的・自主的な準備作業において課題を残した。また、収蔵品を用いた楽器体験を企画したが、搬入・搬出作業において想像以上の労力及び時間がかかってしまったことに対し、人員の確保の面でも配慮に欠けていたということを反省している。

さらに、ワークショップの形態については、今回、最後に楽器体験の時間を設けたとはいえ、参加者が受動的な活動に専念する時間が長い傾向にあった。意見交換及びアンケート記入の時間を設ける等、もう少し能動的な活動の場を含めることにより、理解や知識の深化がさらに促されたのではないかと考える。したがって、今後企画をする場合には、受動・能動的な活動のバランスも含めて検討することにより全体の企画をさらに綿密に練っていきたいと考える。今回の反省及び今後の課題を、これからの研究活動や成果発表の場においても充分活かしていきたい。

【謝辞】

最後になりましたが、本フォーラムを実施するにあたり、多くのお力添えをいただきました。出演していただいた伊藤悟様、仁科エミ先生、チャンドラ・バスカラの皆様のほか、佐々木史郎先生、藤井龍彦先生、七田麻美子先生、西澤昌樹様、福岡正太先生、国立民族学博物館の皆様、基盤統括事務係及び各基盤機関事務の皆様、本フォーラム学生企画委員及び事務局の皆様、アルバイトスタッフの皆様など、ご助力及びご支援いただきました全ての方々に、この場を借りて心より感謝申し上げます。

(文責：光平有希)

3 研究公演「石見大元神楽」

1. 企画趣旨

二日目の午後に行われた研究公演「石見大元神楽」では、島根県江津市桜江町から大元神楽伝承団体「市山神友会」をお招きし、当地に伝承される大元神楽「太鼓口」「御座」「鐘馗」「五龍王」の四演目を披露していただいた。続くパネルディスカッションでは、伝承者と研究者と一緒に舞台上がり、これまでの市山神友会の伝承活動を振り返るとともに、先人から伝えられてきた伝承を次世代にどう伝えていくかという今後の伝承のあり方を考えた。一般公開で行われたこのセッションには、280人を超える方々の参加があり、盛況を博すことができた。

また、会場となった国立民族学博物館は、大元神楽に用いられる祭具である天蓋や仮面を1978年より収蔵し、現在も日本文化展示室「祭りと芸能」のコーナーに展示している。こうした古くからの縁もあり、公演の開催に、民博の「館長リーダーシップ支援経費」から支援をいただいた。ここに記して深く感謝申し上げます。

この企画を行うにあたり、位相の違う三つの趣旨を設定した。

一つ目は、全国各地に散らばる総研大文化科学専攻の基盤機関から、研究者が集まって開催される学術交流フォーラム2014のなかで研究公演を行う意義である。

まず、この企画の意図には、このセッションを、研究成果をどのように社会へ発信・還元していくのかというすべての研究者に共通する課題、つまり研究者と社会との関係性を考える機会にしたいとの思いがある。

こうした自身の研究成果が社会や人々にどのような意味を持つのかという問題は、調査地に赴いて聞き取り調査や参与観察を行う、フィールドワークを主な研究方法とする文化人類学や民俗学の分野で、研究者は調査対象・調査地と如何に付き合っていくのかという形でさまざまな議論が行われてきた¹。我々は、こうした蓄積を現在という時代状況のなかに投げ出して、もう一度考えていかないといけないのではないだろうか。

時代は二十一世紀を迎え、情報化社会の実現やグローバル化の進展で、調査者と被調査者の関係性は非常に近くなってきた。もはや、外の世界と接触しない、未開で純粋な調査地は存在しないのである。

そこで、今回の大元神楽公演では、我々外部の研究者が、現地の方々とともに相互理解を深め、“一緒になって”考え行動していく場を作ることを企画した。世界の民族、社会や文化を研究した成果を、現地の人びとや社会と共有し、ともに議論し、考える「フォーラム型」研究を行ってきた民博を舞台にして、総研大の学生、さまざまな機関に所属する研究者、公演を行う現地の方々、そして、関西に在住の一般の方々、それぞれの立場から、地域に伝承される民俗文化のこれからについて考えていく。このことにより、多くの方に地域の現状を発信するとともに、調査地との対話を通じた積極的な関わりを重要視する文化研究のあり方

を示すことができればと思っている。

二つ目には、出演していただく地元の方々にとって、この公演がどのような意味を持つかということである。

今回の公演では、七年に一度の式年祭でしか舞う機会のない演目（「御座」「五龍王」）を、特別に演じていただくことをお願いした。特に、「五龍王」は、暗記しなければいけない台詞が長く、伝承が難しい演目で、全国的にも演じられることが少なくなってきた。この公演は、普段これらの演目を担当する機会がなかなか廻ってこなかった若い伝承者たちにとって、新たな演目に挑戦する機会ともなり、希少演目の伝承にも結び付くだろう。

また、後半のディスカッションは、地元で長年神楽を演じてきた伝承者と一緒にステージに上がり、市山における神楽の伝承活動を振り返ることを行う。ディスカッションがきっかけとなり、普段地元ではなかなか語られることがない、年配の伝承者の胸の内に秘められた神楽に対する熱い思いが、次世代を担う若い伝承者たちへ語りかけられる場ともなるはずである。

このように、この公演が、出演していただく市山神友会の伝承活動にとっても、前向きな機会となることを目指している。

三つ目は、大元神楽をめぐる民俗芸能研究の研究史における位置づけである。

大元神楽の先行研究は、牛尾三千夫ⁱⁱや山路興造ⁱⁱⁱに代表される、神楽の宗教的な意味を考究するものや、本質と考えられる古い姿（歴史）を求めていく芸能史・芸態論の立場にたった論考がほとんどだった。牛尾の「大元神楽式の骨髄ともなっている神遊びの作法、託宣の儀式^{iv}」という言葉にみられる、神楽のなかの信仰面を本質と考える姿勢は、文化財行政にも引き継がれていく。こうした価値付けを背景に、神懸かり託宣は、非常に「古風」なものを伝えていると評価されて、大元神楽は、昭和五十四年に国の重要無形文化財に指定されることとなった。

こうした研究の流れに対し、今回のパネルディスカッション「大元神楽のイマ 一無形文化財制度と民俗芸能の伝承活動」では、神楽がどのような社会組織・経済・生業・制度などの芸能をめぐる諸条件のなかで存在しているのかという環境論の視座に立ち、神楽を披露していただいた市山神友会が、どのような背景のもと、どういった形で大元神楽を伝承してきたのかという「現代」の伝承活動に焦点を当てる。つまり、「イマ」の神楽の姿から何が見えてくるのかを問うのである^v。

それでは、なぜ大元神楽に対しこうしたアプローチの研究が必要だと考えるのだろうか。これまでの研究では、調査に訪れた自分の目の前で展開されている「イマ」の神楽を、十全に説明することができない、つまり、なぜ「イマ」の姿になったのかに答えられないからだ。従来の研究に欠けていたのは、人々が神楽とどう付き合い、どのような意義を付与してきたかを問う姿勢である。今後は、神楽に関わるさまざまな立場の「人々」の側から、神楽を捉えることが必要なのではないだろうか。そうした姿勢は、民俗芸能の「民俗」を考えることにもつながるだろう。

以上のような視座で民俗芸能の「イマ」を組上に載せることは、共同体の外から新たな価値付けを与えることになった、民俗芸能研究という学問の自己批判にもつながってくる。全国の民俗芸能と分類される伝承のなかには、研究者の関与によって変化が生じた例が数多くある。例えば、筆者の研究テーマである広島県庄原市東城町・西城町の神職と神楽団が伝承する比婆荒神神楽は、先行研究者である牛尾三千夫が付与した解釈によって、新たな意義が創り出され地元浸透し、従来存在しなかった伝承が生まれている。そうした事態に対し、筆者^{vi}や鈴木正崇^{vii}が、再考の必要があると指摘するように、近年、研究者の関与によって民俗芸能が如何に変化したかを検証する必要性が多く叫ばれている。

そこで今回のパネルディスカッションでは、研究者が付与した「古風」「伝統的」「真正」「文化財」という価値が、地元はどう受け入れられ、現在の形に結びついていったのか。こうした問いを立て、市山神友会の現代の伝承活動を再評価することで、大元神楽の現在の姿を知り、これからの伝承活動の在り方を考えていく土台を提示することを目的としたい。

2. 企画の準備過程

【企画の提案・具体化】

まず、6月に行われた第一回の企画会議にて、今年度学術交流フォーラムのテーマ・開催趣旨・プログラム案を各委員が考案することとなった。続く7月の第二回企画会議にて、各委員がテーマとそれに合致するセッションの具体案を出す中、学生企画委員の鈴木昂太は、「今、歴史をどう読むか—資料・メディア・パフォーマンス—」という全体テーマを設け、そのなかのパフォーマンスにあたるものとして、自身の研究テーマである中国地方の神楽を呼び、公演を行ってディスカッションを行いたいとの企画案を出した。この後鈴木が神楽団体と接触し、公演出演の可能性を探り、第三回企画会議では具体的な企画案を提出した。そこでこの提案が承認され、鈴木が責任者として企画・交渉役を務めることとなった。こうした大胆な企画が通った背景には、例年通りの形でなく、委員それぞれの積極性・企画を生かして、学生主導のフォーラムにするという今年度の方針がある。そのためフォーラムの二日目に、各委員が創造した3つのセッション（ワークショップ）が設けられた。

この過程を振り返ると、今年度の活動方針を決める際に、個別のセッション（企画案）が先か（優先させるか）、全体の統一テーマが先か（優先させるか）という問題が生じたと考えている。今年度の活動方針を考える過程を振り返ると、顧問を務める佐々木史郎先生が資金獲得の際に設定した「学術資料から歴史を読み解く」というテーマから議論が出発し、歴史・資料（史料・試料）・研究技術など全体テーマにつながるキーワードが出ながらも、委員それぞれの立場をまとめられるテーマが出せず煮詰まっていたことがあった。そこで、具体的なプログラム内容を先に考え、後で全体テーマを考えることとした。つまり、今回行った神楽・食・音文化の各セッションの企画案が先にあり、それを上手く包含するものとして全体テーマ「文化をカガクする？」が生まれてくるという過程があったのだ。そのため、後で反省してみると、全体テーマとして「文化」という大きな枠組みで各セッションをまとめたが、学術フォーラム全体がどういう趣旨を持ち、何を目的とするのかが不明確になってし

まったと思う。そのため今年度のフォーラムは、バラエティに富んだ刺激的なプログラムとなったが、統一性に欠けてしまったことが反省点である。

【出演団体の選出・交渉】

さて、上記の過程を経て神楽公演を行うことが決定し、まず出演団体の選定に入った。出演候補として鳥根県の大元神楽、広島県の比婆荒神神楽、比婆斎庭神楽など、鈴木が関係している神楽の伝承団体のうち、スケジュールや外部公演の出演実績などを考慮して、大元神楽伝承団体である市山神友会に出演依頼をすることとした。

出演交渉は、まず第二回企画会議後の6月の後半に、個人の調査で現地に赴いた際、市山神友会のなかで懇意にしている方に内々に感触を伺い、前向きな回答をいただいた。それを受け、8月終わりの第三回企画会議にて鈴木が神楽公演の具体的な予算案と企画案を提示し、開催の承認を得ることができたので、9月の初めには、市山会友会へ書面で正式に出演依頼を出して、出演を快諾していただいた。

その後、10月と11月の二度現地へ赴き、挨拶、趣旨説明を行った後、スケジュール、演目、会場設営、出演人数、移動方法など、公演開催に必要な諸々の点を打ち合わせた。その後も市山神友会とはメールと電話を用いてコミュニケーションをとっていった。

ほかに、民博講堂での公演の音響・照明を請け負っているアーチェリープロダクションの担当者とは相談し、公演の流れ、舞台の配置、音響・照明の計画などを打ち合わせた。そして、事業全体の予算を勘案し、基盤総括事務係と相談しながら、何人のスタッフを頼むかなど詳細を詰めていった。

また、パネルディスカッションに関しては、企画趣旨・内容の考案、パネラーの選定など、すべてを鈴木が担当した。まず、企画書を作成し、企画会議にて承認を得るとパネラーの出演交渉に入った。パネラーは、大元神楽をはじめ中国地方の神楽を長年研究されてこられ、また鈴木の前指導教授でもある慶應義塾大学の鈴木正崇先生、公演を開催する国立民族学博物館所属で、「新芸能論」の立場から民俗芸能の研究を行う笹原亮二先生、大元神楽の伝承者である市山神友会本山徳幸会長と、学生企画委員で企画担当者の鈴木昂太の四人とした。続いて責任者の鈴木が、出演者の方々と面会し、企画趣旨、ディスカッションにおける担当などを説明して出演交渉を行った。そして、出演を了承していただくとともに、ディスカッションの進め方について意見を交わしながら内容を詰めていき、セッションを作り上げていった。しかし、12月に入ってから、笹原先生より体調不良のため出演がかなわないとの連絡をいただき、急遽構成を変更して三人でディスカッションを行う形とした。

こうした準備と並行して、佐々木先生より、民博の「館長リーダーシップ支援経費」を申請し、民博から資金面での援助を受けて、総研大と民博の共催で神楽公演を開催することを提案していただいた。そのため、9月末から10月はじめにかけて、責任者の鈴木と民博所属の学生企画委員東城、民博の事務係が連携して、神楽団体の選考理由、神楽公演を実施する意義、必要経費の見積書（石見交通から貸し切りバスの見積書）などの書類を作成し、それをもとに佐々木先生が「館長リーダーシップ支援経費」の申請書を提出した。

【広報】

今回一般公開で公演を行うため、神楽公演のチラシ・ポスターを作成し、一般向けに広報活動を行った。まず、9月半ばにデザインとチラシ3000部（A4）・ポスター100部（A2）の条件で、印刷会社の弘文社へ見積もり依頼を出した。交渉の結果、実現可能な価格での見積もりを得たため、チラシの文面・民博へのアクセス図などフォーマット一式・神楽の写真を弘文社に入稿し、11月の始めにはチラシ・ポスターが納品された。その後、関係各所（各基盤機関、民博近隣のモノレール駅、地域の図書館、学会、民俗芸能大会など）で掲示、配布を行った。

また、『月刊みんぱく』12月号に告知を載せるとともに、関西圏に配布される1100部にチラシを折り込んだ。その他、民博のHP、facebookページ、総研大のHPに神楽公演の情報を掲載することも行った。

【当日までの準備作業】

上述のように、今回の神楽公演は、学术交流フォーラム（総研大）の資金と民博の「館長リーダーシップ支援経費」によって開催されるため、総研大と民博それぞれが市山神友会と出演契約を締結するという形となった。そのため、基盤総括事務係が作成した、出演に際する仕様書・契約書などを、総研大分・民博分の二通り作成し、市山神友会に確認、契約していただき、それぞれの事務に送付していただく形をとった。こうした市山神友会との事務手続きは、基盤総括・民博企画連携の事務の方々を中心に進めていただいていた。

また、鳥根県江津市から民博への移動に際し、公共交通と運送会社を利用する場合と貸し切りバスを利用する場合とで費用を比較したところ、出演者が乗る大型バスに必要な荷物（衣装や太鼓など）を載せて移動するほうが良いとの結果が出た。そこで、地元の石見交通と交渉し、50人乗りの大型バスを手配することになった。まず、見積もりを鈴木が請求し、その後の契約、支払の作業を基盤総括・民博企画連携の事務へ引き継いだ。

出演者の宿泊は、民博近隣のホテルクレストいばらきのシングルルームを、出演者、バス運転手のふんと、バス駐車場を鈴木が予約した。ここでの支払いは、各自で行っていただき、後日宿泊費が振り込まれる形とした。

二週間ほど前には、舞台装飾に必要な竹の伐り出し作業を行った。竹の伐り出しに際し、民博事務を通じて大阪大学医学部から許可をいただき、企画委員と学生アルバイト6名で、道路を挟んで向かいにある阪大医学部のキャンパスから、3mほどの竹を十数本伐り出し講堂へ搬入した。公演の前々日に、この竹を針金と麻紐で結わえて、格子状の枠を作成した。前日リハーサルにおける会場設営の際、竹枠に市山神友会の方が作成した切紙を付けると、天蓋という舞台装飾となる。これをアーチェリープロダクションのスタッフが吊り下げた。

公演前日には、事前に発注しておいた色付のコピー用紙に当日配布のプログラムを印刷したり、チラシやアンケートの折込作業、アンケート用紙の作成などを行いつつ、神楽公演の

第3部 個別企画の成果報告

スタッフと舞台の配置図、舞台進行表、カナアゲ台本を見ながら打ち合わせを行った。出演者が到着してからは、その対応と会場準備とでかかりっきりになった。

当日は、市山神友会のリハーサルに立ち会いつつ、登壇者の動線や、スタッフの役割分担（受付、撮影係、登壇者の案内役、舞台転換など）の確認のミーティングを行った。そして、出入口脇に机を設置し、プログラムの配布とアンケートの回収を行った。また、市山神友会会長本山氏が作成した切紙細工を、簡単な説明と拡大コピーした写真とともに簡単な展示コーナーを設けた。

公演中は、ステージ脇に企画責任者の鈴木、総合司会の春藤、事務二名が詰めており、登壇者の誘導係にアルバイト学生一人、撮影係にアルバイト学生二名ほかを配置した。それぞれが持ち場を守って仕事を行ったおかげで、無事に公演を終えることができ片づけ作業に入った。学生アルバイト4、5名とともに、市山神友会のバス送り出し、舞台や受付の撤去、講堂・楽屋の清掃を行い、18時にはすべての片づけを終えることができた。

【神楽公演の運営面における反省】

神楽公演の責任者として、準備期間を振り返ってみて感じるのは、多くの方の力を借りて行う事業では、何事もコミュニケーションが大事だということである。企画者の自分一人の頭の中で大丈夫だろうと思っても、その見通しと一緒に働くスタッフすべてと共有していなければ意味がないのであって、総合司会の学生企画委員春藤くん、各基盤機関の研究協力課の事務、アルバイトの民博の学生、演出のアーチェリープロダクション、出演の市山神友会の方々と、もっと打ち合わせをする必要があったと深く反省している。具体的に問題だったのは、自分の仕事（当日配布のパンフレット・アンケート用紙・パネルディスカッションでの提題など）をギリギリまでやっており、他の人と共有しなければいけない舞台進行表や役割分担表の製作が遅れたことである。多くの方々と協同する責任者として、やらなければいけない仕事の優先度の間違いは、致命的なミスであった。本来責任者は、前線で働き詰めになるのではなく、一歩引いて全体を見て上手くいくように調整するように振る舞わなければならない。今回そのようにすることは現実的に無理だったが、それならば、公演の進行・内容をすべて共有した代役（指示役）を立てなければいけなかった。ここでも必要だったのは、情報を伝え、共有するコミュニケーションである。

また、コミュニケーションといっても、ただ伝えるだけではなく、まわりにこれで大丈夫だと納得（安心）させなければいけない。具体的に言うと、神楽公演の演目の合間につなぎとして鈴木が次の演目紹介を行ったが、喋る時間の長さがわからないためアドリブでやれば良いと考えていたのを、前日にしっかり台本を作れと叱責された。当日実際は、状況に合わせて台本を見ずに喋ったところが多かったのだが、ここで問題なのは、台本を作るべきかどうかではなく、一緒に働く方々を納得させる計画（段取り）を提出し、これだったら大丈夫だと安心させることであった。こうした共同する方々との信頼関係を如何に築いていくかが、事業を成功させるために必要なことである。

加えて、企画の責任者が千葉県国立歴史民俗博物館に設置された日本歴史研究専攻の学

生であり、会場が大阪の国立民族学博物館であったことから、ちょっと会場の確認（講堂の舞台の寸法を計ったり）をしようと思っても手間がかかったり、いろいろな手配や手続きを行おうと思っても民博の内部事情や連携に不慣れで、書類の提出先がわからなかったりと、遠隔地で普段活動しているが故の不都合な点が多く出てきた。その点、学生企画委員長の東城さんをはじめとする民博の学生、事務の方々には多くの助言をいただくとともに、鈴木に代わってさまざまな仕事をしていただいた。心より感謝申し上げます。今後のフォーラムに於いても、開催会場となる基盤機関の学生が担当する仕事が多くなることは必至だと思うので、企画委員の人数など配慮すべきだろう。

以上述べてきた以外にも、さまざまな点で責任者の鈴木に甘さがあったにもかかわらず、なんとか無事成功することができたのは、スタッフ一人一人の能力が高かったからである。こうした優秀なスタッフと仕事が出来たことに感謝したい。ここでの経験は、研究活動においては得られない人間としての成長につながるものとなった。こうした経験ができたことこそが、学術交流フォーラムの学生企画委員を務めたメリットだったと思う。

3. フォーラム当日の報告

プログラム

開会式（13：00～13：10）

【開会のあいさつ】 須藤 健一（国立民族学博物館長）

【趣旨説明】 鈴木 昂太（日本歴史研究専攻 学生企画副委員長）

第一部 大元神楽を舞う（13：10～15：20）

【市山神友会による神楽公演】

「太鼓口」「御座」「鐘馗」「五龍王」の四演目を披露。

第二部 大元神楽を語る（15：30～16：30）

【パネルディスカッション】「大元神楽のイマ ―無形文化財制度と民俗芸能の伝承活動―」

パネラー

鈴木 正崇（慶應義塾大学教授）

本山 徳幸（市山神友会会長）

鈴木 昂太（日本歴史研究専攻 学生企画副委員長）

閉会式（16：30～16：40）

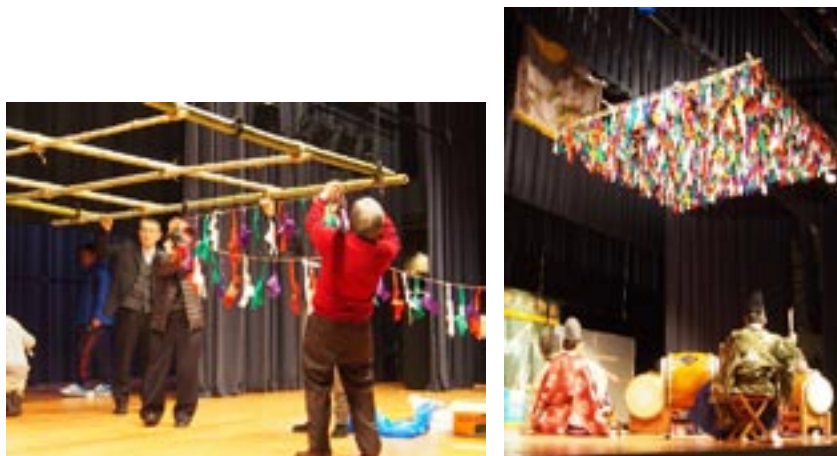
【講評】 田村 克己（総合研究大学院大学 理事）

【閉会の挨拶】 佐々木 史郎（地域文化学専攻長）

第一部 大元神楽を舞う (13:10~15:20)

【市山神友会による神楽公演】

ステージには、学生企画委員が作成した竹の枠に、市山神友会が用意してくださった五色の切紙を付けて製作した天蓋が吊るされている。大元神楽は、必ず天蓋の下で舞わないといけないと伝えられており、また、天蓋は舞う際の目付の役割も果たす。市山神友会に協力いただき、舞台は最高のものが整った。



まずは、「太鼓 (どうの) 口 (くち)」。普段は四つの大胴で編成されるが、今回は特別に三つの胴での披露となった。静まり返った会場に笛の音が響き、大小の太鼓、鉦がリズムを刻んでいく。神々を呼び降ろす神歌の唱和も合わさって、まるでオーケストラの交響曲を聞いているような感覚である。中盤には、それまで太鼓を叩いていた演者が立ち上がり舞い踊る場面もあり、単なる演奏ではない、神楽独特の演出には耳目を驚かされた。神々を歌い降ろす芸能の極致を見た気がする。

続く「御座」では、若い舞手が登場し、半畳よりやや長い「ゴザ」と和鈴を持って、五方を厳かに拝む。後半の飛びの段では、「ゴザ」を前後に動かしながらその上を何十回も飛び続ける曲芸的な技が披露された。観客は、力一杯飛ぶ演者を拍手や大きな声援で囃し、会場は一番の熱気につつまれた。そうした熱演のおかげか、舞台での公演であるにもかかわらず観客から御花(舞人への祝儀)が出たのは、異例なことで、現地での奉納に近い雰囲気を作れたのは良かったと思う。

休憩を挟んだ「鐘馗」は、「素戔鳴尊(鐘馗大神)」が、茅の輪と宝剣をもって日本へと攻め込んできた「悪鬼」を退治するという能舞である。「悪鬼」と「素戔鳴尊」が、幕を挟んで対峙し隠れ合う。単純だけれどもスリリングな駆け引きは、如何に上手く見せるか難しいところである。なかでも、「鐘馗」が「悪鬼」にとどめ



をさすシーンは、見ているこちらにも手に汗握る見せ場を作ってくれた。鬼の舞は、腰を常に低く微動だにせず、しばらくの間静止することが求められるため、これも若い二人が熱演し、会場は喝采につつまれた。



最後の「五龍王」は、舞を主体とする多くの演目とは違う台詞を主体とした演目で、長い口上をよどみなく言うところが見ものである。ここでは、長台詞を流暢に言い立てる、何十年も研鑽を重ねてきたベテランたちの迫力に圧倒された。五人の兄弟の合戦の場面では、実際に喧嘩をしているかのようなバチバチしたしばきあい展開され、争いを調停しにきた文撰博士は、難解な暦やト占の知識を織り交ぜた台詞を一字一句間違えず言い立てる。神楽は、奏楽と舞だけではなく、豊穡な語りの世界も持っているということを存分に示してくれた。



今回の研究公演は、市山神友会の皆さんも非常に気合いが入っており、ある意味、現地で拝見させていただいた時以上のものを披露していただいたと思う。四演目を通して、大元神楽が伝える「奏楽」「神事舞」「能舞」「口上」それぞれの粋を感じられた公演だったのではないだろうか。

また、この公演が、普段その演目を担当する機会がなかなか廻ってこなかった若い傳承者

たちにとって、新たな演目を披露する機会となったことを嬉しく思う。微力ながら、次の世代へと伝承を伝えていく一助となったのであるならば幸いである。

第二部 大元神楽を語る（15：30～16：30）

【パネルディスカッション】

「大元神楽のイマ 一無形文化財制度と民俗芸能の伝承活動」

【パネリスト】

鈴木正崇

慶應義塾大学文学部教授。専門は、文化人類学、民俗学。アジア各地での異文化研究と日本研究の二つを併存させて研究を行う。1977年から中国地方の神楽を訪ね歩き、大元神楽には1981年の小田地区以来、式年祭の度に足を運んでいる。その付き合いは30年を越えた。主な業績に『神と仏の民俗』（吉川弘文館、2001年）、『祭祀と空間のコスモロジー―対馬と沖縄』（春秋社、2004年）など

本山徳幸

邑智郡大元神楽伝承保存会副会長。市山神友会会長。市山地区に生まれ、若い頃より神楽に親しむ。平成四年より神友会会長を務め、神楽の原点に立ち帰るとの思いを胸に、大元神楽の伝承活動に励んでいる。また、託太夫を務めた二度とも神懸りを成功させるなど、市山の大神信仰・大元神楽を支える屋台骨となっている。得意演目は、鬼（鐘馗）、鞆鼓。

鈴木昂太

総合研究大学院大学日本歴史研究専攻後期博士課程。専門は民俗学、民俗芸能研究。中国地方に伝承された神楽、特に、島根県の大元神楽、広島県の比婆荒神神楽、比婆斎庭神楽、を研究している。民俗学の方法で、神楽を伝承する地域とそこに生きる人々がどう変化し、神仏や精霊の世界と関わってきたのかを明らかにしようと考えている。

【パネルディスカッションの概要】

< 提題：「市山神友会の伝承活動」 >

まずは、司会を務める鈴木昂太より、提題として「市山神友会の伝承活動」の報告が行われた。この報告は、市山神友会の伝承活動を再評価し、これからの伝承活動の在り方を考える議論の土台を提示することを目的とするものである。

報告のなかで鈴木は、神楽はどのようにして伝承されていくのだろうかという問いを、島根県江津市市山地区（市山神友会）を事例にして、さまざまな事情により廃れかかっていた「市山舞」が、復活していった過程を追うことで考える試みを行った。

報告では、市山地区の神楽の歴史を振り返ると、現在の「市山舞」の姿になるには、三つの画期となる要素があったと指摘された。それは、①市山出身の二人の研究者（牛尾三千夫・竹内幸夫）の活動②国指定重要無形民俗文化財という制度③伝承組織の変化とそれに呼応した伝承の復興活動である。こうした背景があったために、託太夫を選定し、実際に神を降ろ

す「本託」を行うとともに、十九もの多様な演目を伝承する市山神友会の今の姿へと結びついたと説明した。

最後に報告のまとめとして、神楽などの民俗伝承は、古いものがそっくりそのまま伝わるのではなく、時代や制度、人間関係などさまざまな影響を受け、伝えるためにいろいろと変化することで伝わっていくのだと訴える。その際伝承者は、過去・価値・情報などを参照しながら、何を選択し守っていこうとするかを決めていくのであって、市山の場合、大きな影響を与えたのが、牛尾三千夫と竹内幸夫という主導的な研究者・伝承者の存在であり、彼らが作り上げた重要無形文化財という価値だった。彼らが構築した大元神楽理解は、市山の地を伝承の中心地に押し上げ、神事色が強い演目まで村民が担当するようにさせたことで、多くの伝承を守ることに繋がっていったのであると結んだ。

<大元神楽の変遷と伝承活動への提言>

続いて討論に移り、慶應義塾大学の鈴木正崇氏は、中国地方の神楽の特色が「式年祭」という形式にあることを示し、自身が見学された昭和五十六年に桜江町小田地区で行われた現地公開での神懸かりの話を出された。神楽の季節ではない三月に、本来神懸かりが起きないとされた地区での開催だったため、神懸かりはあまり期待しないでくれと言われていたにも関わらず、「天蓋」という演目の時に自身の後ろから神懸かり状態になった方が飛び出て来た経験を語られ、それまで山間の小さい集落に伝承されてきた神懸かりの神楽が、文化財指定による現地公開という場を経て、新たな展開を迎えたことを示された。

続いて、伝承を上手く伝えていく条件として、①伝承者の技能②伝承組織③出版物など情報集成④研究者との関わり方という、四点が必要なのだと指摘された。鈴木氏は、これが非常に上手くいったケースが大元神楽（市山神友会）だと考えている。

さらに、竹内幸夫氏の著作を紹介しながら、彼を伝承者でありつつ研究者でもあった稀有な人と評価した。特に、竹内氏が作られた『だれにもわかる大元神楽：伝承読本』（市山公民館、1989年）を例に出し、地元の若い世代に難しい神楽の世界をわかりやすく伝える実践的な本を、地元で作っていくこと、そうした地元からの発信が大切だとまとめた。

<市山の神楽と竹内幸夫氏>

次に司会は、一緒に活動してこられた地元の立場から、竹内氏の存在はどのように映るかという質問を市山神友会の本山徳幸会長に投げかけた。

それに対して本山会長は、一緒に山を歩いて探した大元神の鎮座地調査の話をはじめ、竹内先生との思い出は、胸の中に短い時間では話しきれないほどたくさん刻み込まれていると語りだされた。大元舞として相応しいものにしていかなければという思いを胸に、神楽の練習をしたり、話し合いをしたり。一番の思い出は、一つずつみんなと力を合わせて、平成六年に本託の復活をなんとか果たしたことで、竹内先生がいなかったら、市山の神楽は、このようになってないだろうとおっしゃられた。

最後には、私のここ（胸を指しながら）におられる竹内先生を常に思いながら、今後も神

楽を伝承していきたいと涙ながらに語られ、本山会長の人柄と神楽に対する真摯な思いが伝わってきた。

<今後の伝承に向けて>

続いて司会者から、今後若い世代にどのように伝えていくか、その方策としてどのようなことがあるかとの話題が出された。

それに対して鈴木正崇氏は、特効薬はないので、地域の特性、その地域がどういう歴史を持っているのかを理解したうえで、今後を考えていかないといけないと提言する。

例えば、他地域では、神楽を文化資源として利用して活性化を図っている事例があるとして、安芸太田市の神楽門前湯治村を紹介する。この事例では、神楽が盛んな地域という土壤に、温泉とレトロな街並みが作られたことで、成功したのだと分析した。

また現代は、動画共有サイトで神楽の映像を簡単に見て、いろいろな情報を簡単に得ることができる時代である。そうした影響が、市山大元神楽でも見られ、前回の大神楽の際も、神懸かりの演目では四方八方からカメラが向けられ、こんな状況で本当に神懸かりが起こるのか危惧を抱いたと語られた。

今日見た「五龍王」のように、長い台詞を暗記することが普通に出来た時代から、印刷された文字を読んで、先輩が舞ったビデオを見ながら覚えていく時代へと変わってきているが、書物の知識ではなく、生活や体験から得た、個人の身体感覚を含めたいわゆる民俗知を、次の世代に伝えていけるかも、非常に難しいが重要なことだろうと指摘する。

最後に鈴木氏は、市山の場合、伝承に関しては素晴らしいものだと評価を述べる。神懸かりに関しては、研究者は重視するけれど、それだけにこだわっていると伝承は難しくなってくるので、舞と口上を今のレベルでどう維持発展させるのか、これをいかに他の地域と連携しながら守っていくのが最大の課題だと思うと指摘した。

<次の世代へ伝えていくために>

司会の鈴木昂太は、最後に、今回大阪には神友会の若い方々も来ているが、彼らと一緒に今後どのように伝承を守っていくのか、その意気込みを伝えてほしいと市山神友会の本山会長へ伝えた。

本山会長は、今回の公演には、若い者が五名来ており、彼らには今後の活動に対する自覚として良い機会となったと思うと話された。その上で会長自身の神楽に対する考えとして、新しい創作、共演大会、派手な演出などを行う新しい神楽と、自分たちが伝えている古い神楽、それぞれ二つあって良いと思うとされたが、あくまでも自分たちの考えは、古いもの、地元にあるものを守っていくことで、争うような共演大会には出るつもりはないし、地元中心にやっていると強い口調で語られた。

また、本託の復活について、昔は牛尾三千夫宮司が偉大であって、なかなか本託が出来なかったことを先輩から聞いているが、衣装が古くても内容を良くしようということで、廃れた演目を七、八人で習いに行ったりして、なんとかしっかりした「大元舞」が出来るように



なってきたという苦勞の過程を語られ、こういう難しいことができたのは、メンバーのやる気しかありませんと結ばれた。

最後に本山会長は、大元舞は、七年に一度の開催だが、その中の六年は一つ一つ準備して組み立てていく期間であると言う。今後も若い人たちと一緒に行動し、市山の大神楽はこういうものだ伝えていきたいと力強く宣言された。

こうした未来への決意を胸に刻み、このディスカッションを締めくくった。

今回のパネルディスカッションは、時間が足りずに、議論を十分に深められなかった面があったが、市山の大神楽の歴史を確認し、実感のこもった本山会長の言葉を通して、市山の大神楽のイマを感じられことができたのは良かったと思う。また、こうした舞台がきっかけで、普段地元ではなかなか語ることができない大神楽に対する熱い思いが、会場に来ていた若い伝承者たちへ伝わったのなら幸いです。

4. まとめ

アンケート分析の結果を見ると、多くの方が好評してくださり、関西圏の方々に、大神楽の魅力を発信することができたのは良かったが、課題も残った。

運営面に関するコミュニケーション、スケジュール管理の課題は先に述べたが、広報の遅れも問題であったろう。チラシが完成したのは、約一か月前で、そこから本格的な広報を開始し、インターネット上で情報を出したのも、それ以降であった。そのため、個人的に声をかけた方の中でも、すでに予定が埋まっている、もう少し早めに言ってくれたら良かったのという声を多く聞いた。約280名もの来場をいただいたことは、幸いなことであったが、もう少し早く、効果的に広報活動を行ったのなら、より多くの方に来ていただけたのではないかと思う。

また、今回チラシを作成するにあたり、従来通り「大神楽」と表記するか、地名を冠してわかりやすく「石見大神楽」と表記するか非常に迷い、市山神友会とも相談した。その際、同じ石見地域に伝承されながらも、明治以降に新たに変革された「石見神楽」と「大神楽」を間違われたくないとの懸念を双方とも共有していたが、より多くの方の関心を集めるため

には、「石見」と地域名を入れてわかりやすくしたほうが良いのではないかといいことで、「石見大元神楽」という表記を使用した。

その結果、アンケートを分析してみると、やはり「大元神楽」を「石見神楽」と間違えて来場された方がいらっしまった。確かに、「石見」と入れたことで、観光イベントとしての資源化が盛んな「石見神楽」の知名度にあやかり、多くの参加者を集めることができたという事実はある。しかし、用語の厳密さに欠けており、新たな概念を創り出してしまったことを猛省したい。

そして、学術交流フォーラムの一部として開催したからには、当然さまざな分野の研究者が集まることを想定しなければいけない。しかし、今回の公演では、民俗芸能の研究者以外にはわかりづらい部分が多々あったことも反省すべき点である。

さて、今回研究公演「石見大元神楽」を通じて実現したかったことは、①神楽公演を通じて、研究者が被調査者・調査地とどのように付き合うかを提示すること②この公演が、出演していただいた市山神友会の伝承活動において良い機会となること③パネルディスカッションにおいて、市山神友会の現代の伝承活動を再評価することで、大元神楽の現在を知り、これからの伝承活動の在り方を考えていく土台を提示すること、の三点であった。

まず二点目の地元にとっての公演の意義である。鈴木は、神楽公演が終了してから、お礼を兼ねて何度かやりとりを交わした。良い公演だったと話してくださるのはもちろん、何よりも嬉しいのは、若い伝承者たちの意識が変わってきたということを知ったことである。例えば、神歌を歌いながら叩かないといけないうえ、覚えることが多く、非常に難しい大胴にも若い伝承者が挑戦したり、次の大きな舞台へ向けて今まで以上に張り切って練習を重ねているということを知った。そうした話を聞くと、大変だったけれどもやってみると、フッと肩の荷が少し降りたような気がする。

次に三点目、パネルディスカッションに於いてどのような成果をあげることができたのかという点である。ディスカッションの提題で提示した市山神友会の伝承活動の歴史と、議論したことをまとめながら、確認していきたい。

大元神楽の伝承の中心地として、盛んに活動している現在の市山神友会を理解するには、平成に入ってからの見事な復活を考えなければならなかった。その前提にあったのは、昭和三十・四十年代の市山舞の危機である。十分に神楽を舞えない状態に芽生えた、本託（神懸かり託宣）を行うのに相応しい「ちゃんとした」大元神楽にならないといけないうえ強い思いが、市山神友会を突き動かす原動力である。

その背景にあったのは、牛尾三千夫と竹内幸夫という市山出身の主導的な研究者・伝承者の存在であり、彼らが作り上げた、神懸かり託宣こそ大元神楽の神髄だとする重要無形文化財という価値だった。その上に、保存会組織の変革によって、伝承の担い手が神職から村人たちへと拡大したことが重なり、神懸かり託宣を含む多くの伝承を持つ市山神友会の現在につながった。

繰り返すが、こうした過程の根底にあるのは、パネルディスカッションの中で本山会長が

自身の胸を指し、常に胸の内にあると訴えた竹内先生の教え＝「古いもの、地元にあるものを守っていく」という強い思いである。この決意こそが、今後の伝承活動のなかでも大事になっていくものであろう。

パネルディスカッションでは、以上のことを、一緒に共有し、伝承者の言葉をもって確認でできたことが成果である。

一点目の、神楽公演を通じて、研究者が被調査者・調査地とどのように付き合うかを提示するということは、以上のような公演全体を通して、理解してもらえたのではないだろうか。何度も繰り返すように、「一緒に」考え、「一緒に」行動することで、相互理解を深め、地域に寄り添いながら深く分け入っていく。そして、研究が自分の知的満足だけでなく、地元の方々にとって何らかの役に立つことを目指すのが、あるべき関係性であると思う。

今後自分自身も、研究者という「外」の立場であるけれど、地元に寄り添う「ミューズ・イーター（仲介者）」として、地元との良い関係を築きながら研究活動を続けていきたい。

最後に、この公演を企画した鈴木自身の研究と今回の企画との関わりを述べる。鈴木は、中国地方の神楽を研究しているが、今回のパネルディスカッションでは、これまで自身が関心を持っていた、「芸能史」「民俗宗教」の立場以外から神楽にアプローチする新たな視点に立った。こうした視点に立てたのは、パネルディスカッションの構成を考える過程で、民博の笹原亮二先生に相談する機会を得たからだ。笹原先生の著作や助言に触発され、自身の研究面でも新たな展開を見通すことができた。

こうした、総研大というつながりの上に、各基盤機関に所属しているさまざまな立場の先生に指導を仰ぐことができる場所は、総研大の良点だと思う。専攻の枠を超えて学生が集まる学術交流フォーラムの意義は、こういうところにも見いだせるのではないだろうか。

最後になりましたが、研究公演「石見大元神楽」を実施するにあたり、多くの方のお力添えを頂いた。出演していただいた市山神友会の皆様、鈴木正崇先生はもちろん、笹原亮二先生、佐々木史郎先生、藤井龍彦先生、七田麻美子先生、国立民族学博物館の皆様、基盤総括事務係、各基盤機関事務の皆様、また学生企画委員、フォーラム事務局、アルバイトスタッフの皆様など、御協力いただいた皆様へ心より深謝いたします。

（文責：鈴木昂太）

ⁱ エドワード・W. サイド著、今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社、1986年。山口昌男「調査する者の眼—人類学批判の批判—」『新編人類学的思考』筑摩書房、1979年。宮本常一「調査地被害」『宮本常一著作集』第31巻、未来社、1983年。安溪遊地「される側の声—聞き書き・調査地被害」『民族学研究』56（3）日本文化人類学会、1991年。太田好信『民族誌的近代への介入—文化を語る権利は誰にあるのか』人文書院、2001年など

ⁱⁱ 牛尾三千夫『神楽と神がかり』名著出版、1985年など

第3部 個別企画の成果報告

- iii 山路興造「大元神楽の性格とその変遷」邑智郡大元神楽保存会編『邑智郡大元神楽 重要無形民俗文化財』邑智郡桜江町教育委員会、1982年。山路興造「石見神楽の誕生」『民俗芸能研究』(56) 民俗芸能学会、2014年など
- iv 牛尾三千夫『神楽と神がかり』名著出版、1985年 p.43
- v こうした視点は、従来の民俗芸能研究を相対化し、批判する橋本裕之、笹原亮二、大石泰夫、俵木悟などの見解を前提にしている。彼らの代表的な著作をいくつか挙げておく。民俗芸能研究会／第一民俗芸能学会編『課題としての民俗芸能研究』ひつじ書房、1993年。橋本裕之『民俗芸能研究という神話』森話社、2006年。笹原亮二「獅子舞を見に行くこと--現在と民俗芸能研究を巡って」『民俗芸能研究』(16) 民俗芸能学会、1992年。大石泰夫「民俗芸能と民俗芸能研究 (<特集>日本民俗学研究動向I (1992-1996))」日本民俗学(213)、1998年。俵木悟「民俗芸能の「現在」から何を学ぶか」『現代民俗学研究』(1) 現代民俗学会、2009年。
- vi 鈴木昂太「朽木家文書「六道十三佛之カン文」(1)」『儀礼文化学会紀要：儀礼文化』(2)、2014年
- vii 鈴木正崇「伝承を持続させるものとは何か—比婆荒神神楽の場合—」『国立歴史民俗学博物館研究報告』(186)、国立歴史民俗博物館、2014年

第4部 分析と講評

1 アンケート分析

1. フォーラム事業に関するアンケート集計結果

はじめに——アンケートの概要

本節は、平成26年12月20日、21日に国立民族学博物館で開催された学术交流フォーラム2014（以下フォーラム）参加者に配布したアンケートの集計結果を報告、分析するものである。本年度フォーラムでは研究公演等一部のプログラムが一般来館者に公開されたが、本アンケートは総合研究大学院大学関係者および事前に登録のあった外部研究者である学术交流フォーラム参加者にのみ配布したものである。

アンケートは12月20日のフォーラム開会式において50名に配布され、回収されたのは15件であった。回収率は30%である。参加者を全て把握できているこのようなイベントにおいて、回収率30%は非常に少ない値であると言えるだろう。回収率を向上させるための工夫が必要である。なおこれらの数値には、学生企画委員やアルバイトスタッフ等のフォーラム運営関係者は含まれていない。

本節では回答者が特定できるような回答には、回答の趣旨を崩さない範囲で修正を加えている。また、特に説明が無い円グラフは、選択肢から回答1つを選択する設問についてグラフ化したものである。無回答、無効回答数もグラフに含めているため、全体数は15である。

アンケート集計結果

Q1.フォーラム開催について

Q1-1.フォーラム開催趣旨について

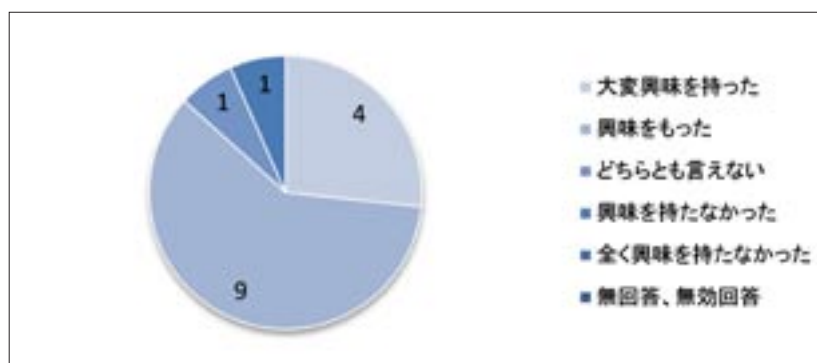


図1 Q1-1.フォーラム開催趣旨について

Q1-2.開催時期について

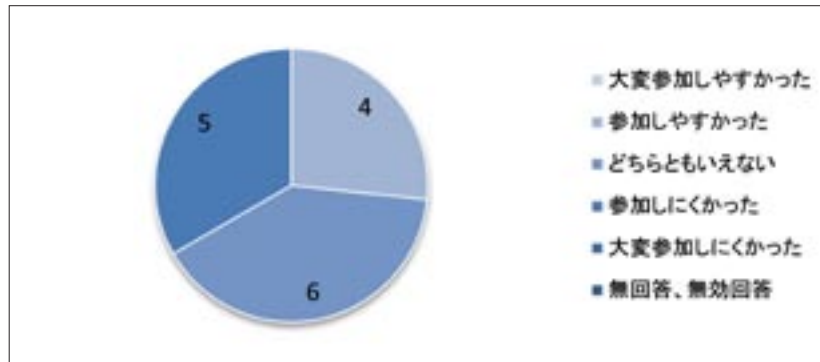


図2 Q1-2.開催時期について

Q1-3.会場について

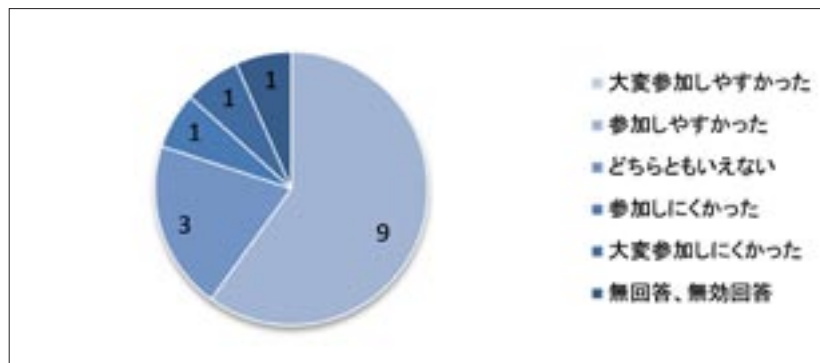


図3 Q1-3.会場について

開催趣旨 (Q1-1)、会場の設定 (Q1-3) に関する設問には、肯定的な回答が多かった。一方で開催時期 (Q2-2) については、「参加しやすかった」より「参加しにくかった」が上回った。

Q2.学生の口頭発表について

Q2-1.発表時間について

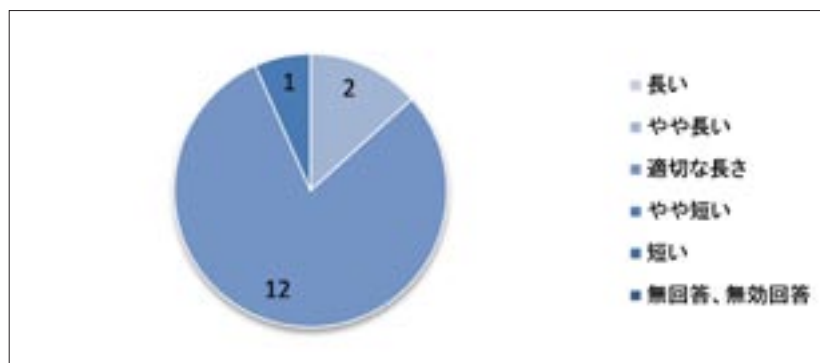


図4 Q2-1.発表時間について

Q2-2.発表本数について

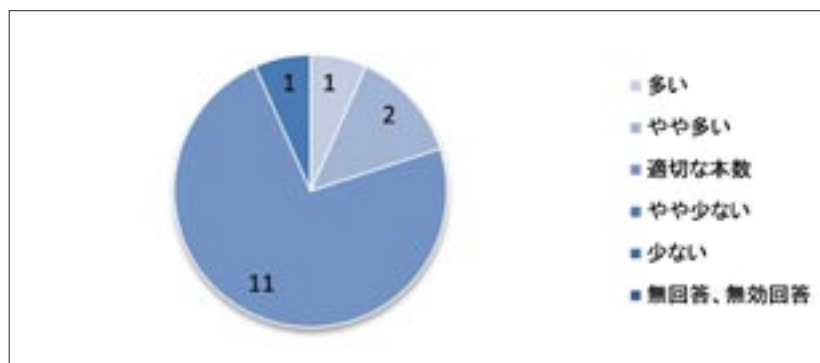


図5 Q2-2.発表本数について

Q2-3.発表形式でわかりやすかったものは

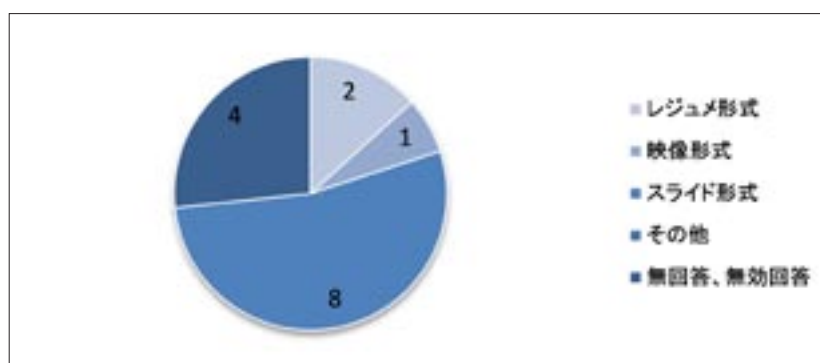


図6 Q2-3.発表形式でわかりやすかったものは

口頭発表に関する設問では、発表時間（Q2-1）、発表本数（Q2-2）共に適切であるとの回答が最大であった。

Q3.ポスター発表について

Q3-1.発表時間について

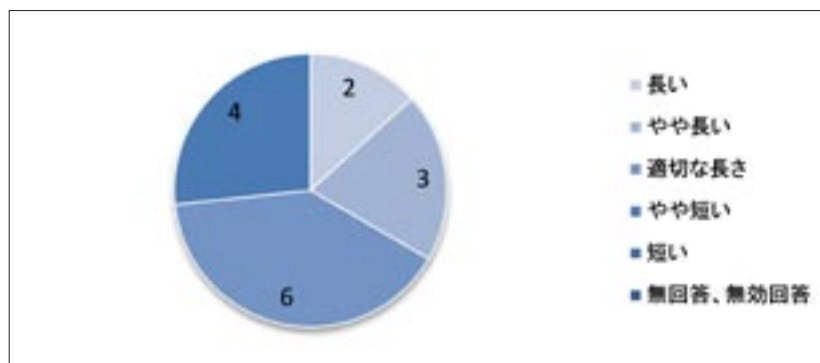


図7 Q3-1.発表時間について

Q3-2.ポスターの配置について

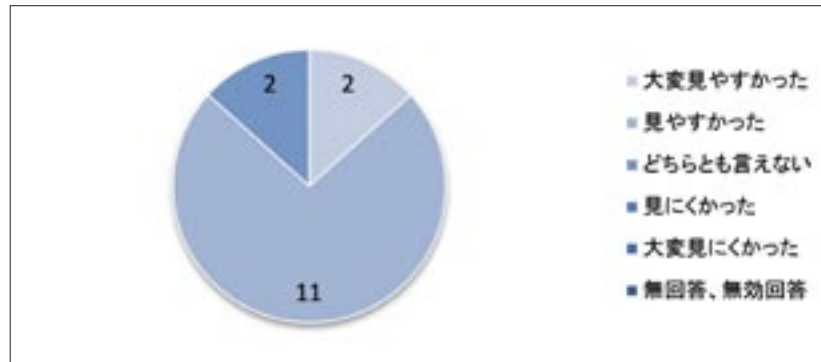


図8 Q3-2.ポスターの配置について

ポスター発表に関しては、ポスターの配置（Q3-2）に関する設問で肯定的な意見が多かった。一方で発表時間（Q3-1）については回答が割れた。最大は「適切な長さ」の6であるが、「長い」「やや長い」が合計5、「やや短い」が4と、ほとんど差は無かった。

Q3-3.興味を持たれた発表があったら、ポスターのタイトルまたは発表者名をご記入ください。

表1 Q3-3.興味を持った発表

ポスター発表題目および発表者	件数
海賊史観による世界史の再構築にむけて 稲賀 繁美 国際日本研究専攻 教授	2
変革する「隔離の島」国立療養所 —「偏見・差別の歴史」から人権を学ぶ場へ— 池永 禎子 地域文化学専攻	2
自然葬における追悼行為 —死者の自己実現と生者の自己回復をめぐる葛藤— 金 セツピョル 地域文化学専攻	1
パコパンパ遺跡出土土器の3Dデータベースの構築 中川 渚 比較文化学専攻	1
日本における諸科学の編成と基礎概念の検討：文理融合研究の有効性を探る 稲賀 繁美 国際日本研究専攻 教授 鈴木 貞美 国際日本研究専攻 名誉教授	1
近世日本養生論における音楽療法思想の特徴 —竹中通庵『古今養性録』及び貝原益軒『養生訓』を中心に— 光平 有希 国際日本研究専攻	1
観相資料の学際的研究 相田 満 日本文学研究専攻 准教授	1
浮世絵を研究するために —役者見立絵の考証を中心に— 山下 則子 日本文学研究専攻 教授	1
松代藩における家老御用部屋記録の研究 —執務日記とその周辺— 太田 尚宏 日本文学研究専攻 准教授	1

興味を持ったポスター発表を最大2点記述してもらう設問の回答をまとめた。回答はほとんど集中せず、ポスター発表全23題の内9題があげられた。

Q4.パネルディスカッションについて

Q4-1.趣旨設定について

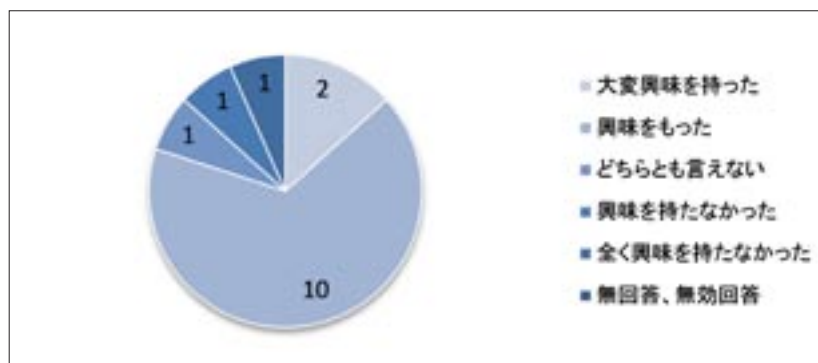


図9 Q4-1.趣旨設定について

Q4-2.各パネル内容について

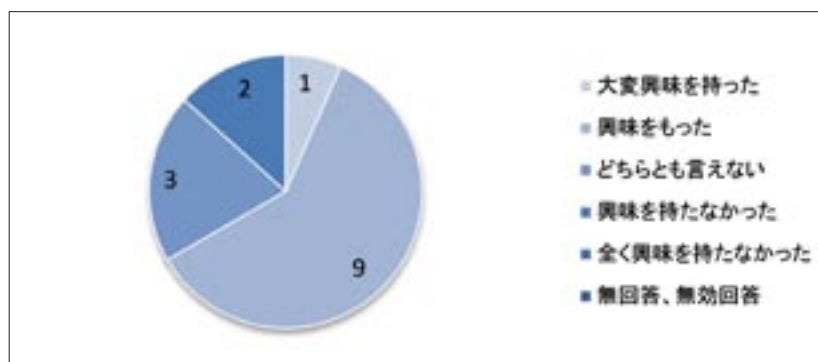


図10 Q4-2.各パネル内容について

Q4-3.今後企画してほしいテーマなどありましたら、お書きください

表2 Q4-3.今後企画してほしいテーマなど（自由記述）

No.	回答
1	共同研究をベースにすることで異分野の協力につながるテーマは良いと思う。
2	今回のように共同研究がどのように進められているかを知るパネルディスカッションを今後も企画して欲しい。学内は勿論、学外の共同研究者の意見を知ることも大切だと思う。
3	学際的なテーマ

パネルディスカッションについては、趣旨設定（Q4-1）、内容（Q4-2）共に肯定的な意見が多数であった。今後企画してほしいテーマを訪ねる設問（Q4-3）でも、回答数は少ないも

の共同研究をベースにしたパネルディスカッションの継続を望む意見が出された。

Q5.ワークショップについて

Q5-1.御参加いただきましたワークショップをお選びください。

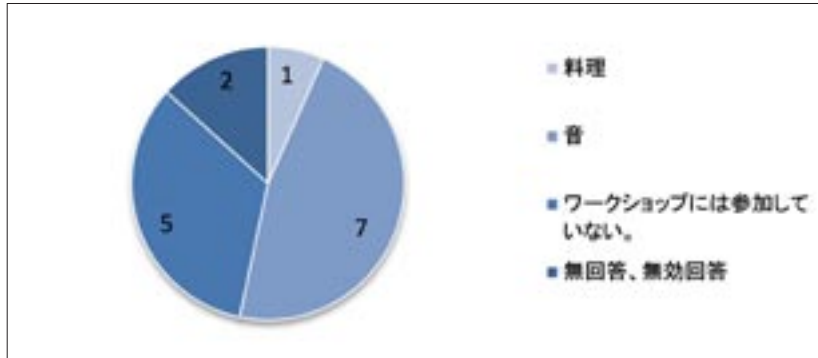


図11 Q5-1.参加したワークショップ

Q5-2.ワークショップの内容について

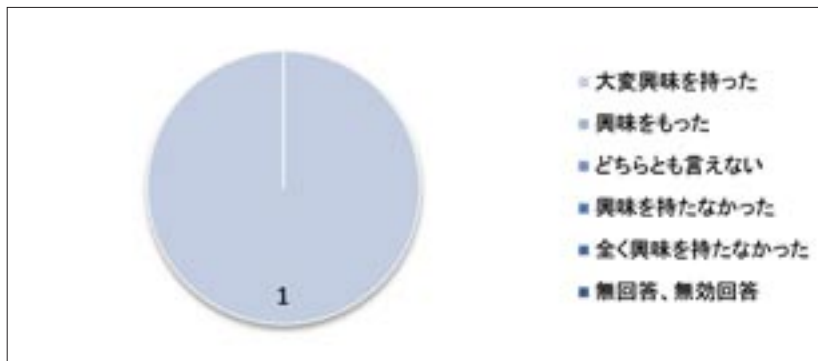


図12 Q5-2.ワークショップの内容について（料理参加者 全体=1）

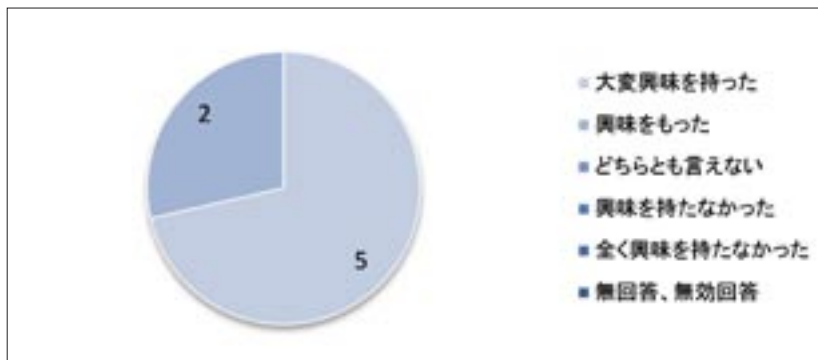


図13 Q5-2.ワークショップの内容について（音参加者 全体=7）

Q5-3.今後企画してほしいテーマなどありましたら、お書き下さい。

表3 Q5-3.今後企画してほしいテーマ（自由記述）

No.	回答
1	実際に合奏するのはとても良いのでガムランを含め今後も試みてほしい
2	物作りとか……
3	においのワークショップはいかがでしょうか？

ワークショップに関する設問では、15名の回答者の内、ワークショップへ参加したと回答したのは8名であった（Q5-1）。これは2日間開催されたフォーラムの内、1日目のみに参加する参加者が相当数いたためである。そのためワークショップの内容についての設問（Q5-2）では、料理で全体数が1、音で7であった。サンプル数は少ないものの、回答は全て肯定的であった。また今後企画してほしいテーマを記述してもらう設問（Q5-3）では、興味深い意見が寄せられた。

Q6.研究公演について

Q6-1.研究公演の趣旨について

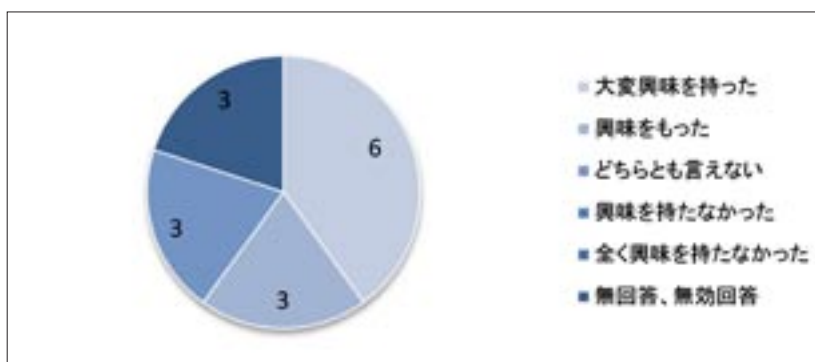


図14 Q6-1.研究公演の趣旨について

Q6-2.大元神楽の公演について

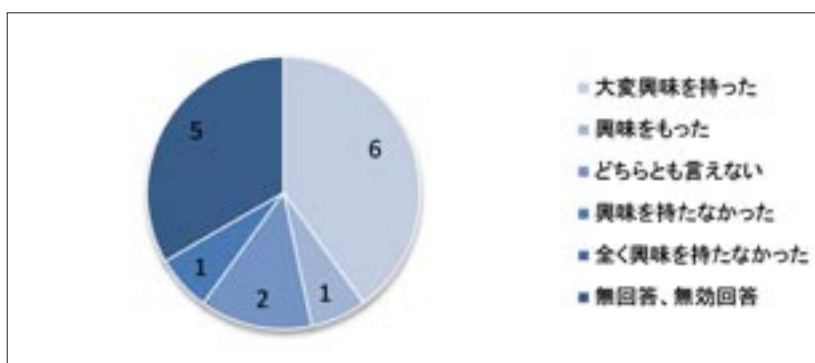


図15 Q6-2.大元神楽の公演について

Q6-3.研究公演のパネルディスカッションについて

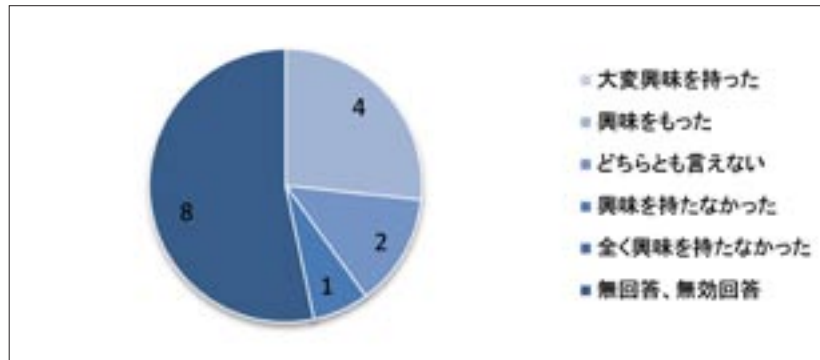


図16 Q6-3.研究公演のパネルディスカッションについて

研究公演に関する設問でも、ワークショップに関する設問と同じ理由で無効回答が多く見られた。いずれの設問でも、無効回答を除けば肯定的な回答が多数であった。

Q7.フォーラム全体について

Q7-1.フォーラムへの参加は、今回で何回目ですか？

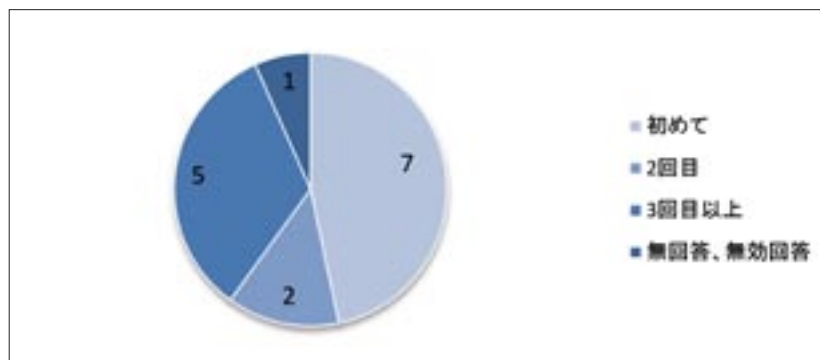


図17 Q7-1.フォーラムへの参加は、今回で何回目ですか？

Q7-2.今回のフォーラム開催を、何で知りましたか？

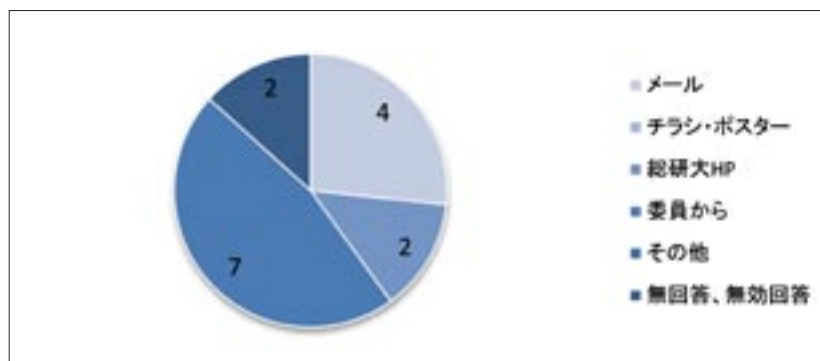


図18 Q7-2.今回のフォーラム開催を、何で知りましたか？

フォーラム開催を知ったメディアに関する設問（Q7-2）では、「メール」「総研大HP」「チラシ・ポスター」等のツールではなく、「委員から」の7が最大であった。

Q7-3.フォーラムに参加されたきっかけはなんですか？

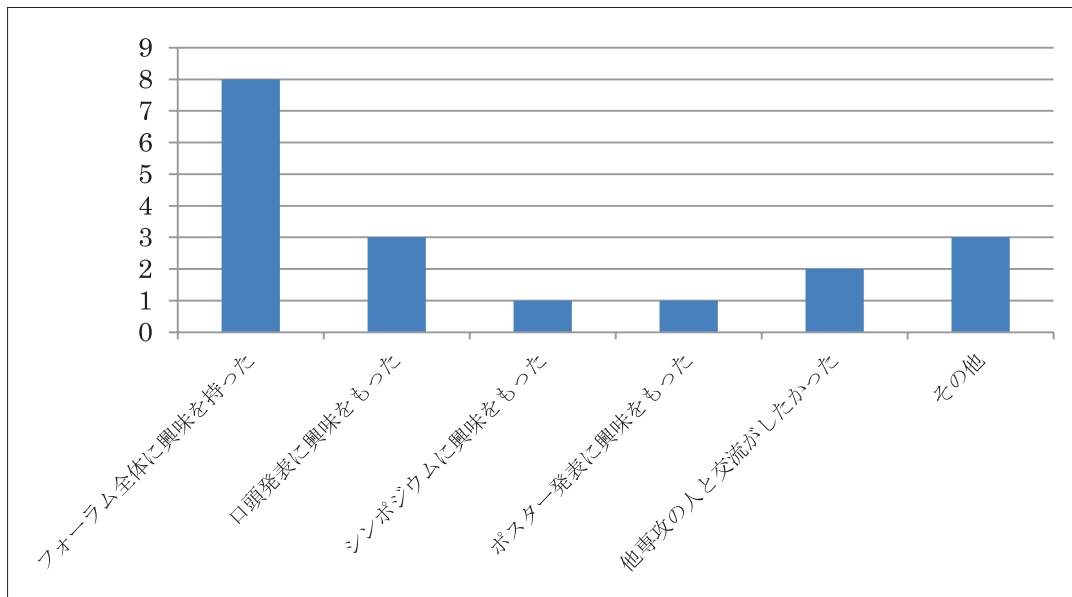


図19 Q7-3.フォーラムに参加されたきっかけはなんですか？（複数回答可）

表4 Q7-3.フォーラムに参加されたきっかけはなんですか？（その他）

No.	回答
1	参加義務があったため
2	口頭発表を行った。
3	参加してほしいとたのまれました

Q7-4.フォーラムで、他専攻の人との理解や交流は深まりましたか？

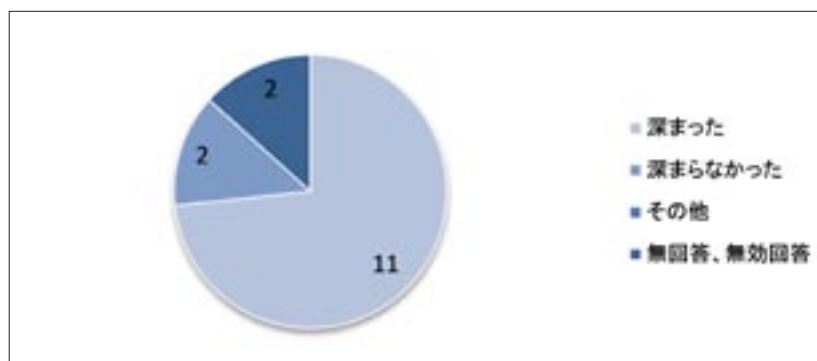


図20 Q7-4.フォーラムで、他専攻の人との理解や交流は深まりましたか？

Q7-4ではフォーラムの主要な目的である、学术交流が深まったかどうかをたずねた。その

結果73%が「深まった」と答え、本年度フォーラムが学术交流に寄与する事業であったことが確認された。

Q7-5.今後、フォーラムで設けてほしい催しがありましたら、お書きください。

表5 Q7-5.今後、フォーラムで設けてほしい催し（自由記述）

No. 回答

- | | |
|---|--|
| 1 | ワークショップの様に一般の人でも参加できるのはとても良かったので続けてほしい。講演会でもよいかもしれません。 |
|---|--|

Q7-6.その他、良かった点・改善してほしい点など、感想もまじえてご自由にお書き下さい。

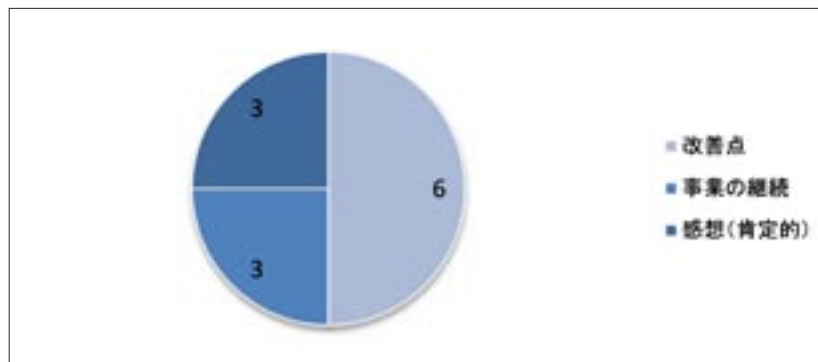


図21 Q7-6.その他、良かった点・改善してほしい点、感想（自由記述 全体=12）

Q7-6は、良かった点・改善してほしい点、感想等を自由記述してもらう設問であった。アンケート回収数15件の内、7件で回答があり、意見数は12件であった。意見は「改善点」「事業の継続」「感想（肯定的）」の3つに分類でき、内訳は図21の通りである。全ての意見を表6,7,8にまとめた。

表6 Q7-6回答の内、改善点に関する回答（自由記述）

No. 回答

- | | |
|---|---|
| 1 | 会場も多数ありすばらしかったのですが、2会場になり、聞きたかったのに聞くことができなかった発表もあったので残念でした。 |
| 2 | コメンテーターをくじ引きにするのは、全くの専門外の人にあたってしまう場合があります。学問の専門性をそこなう場合があります。 |
| 3 | ポスター発表は2グループに分ける必要はなかったのでは…？と思いました。 |
| 4 | コートや持物のおき場があって、そこでお茶など飲めるとよい。 |

- 5 沢山の課題や困難な事態を、熱意を以って乗り越えて企画、運営に当たってこられたことが実を結んだフォーラムであったと思います。けれども、今回と同じ内容・規模の企画を来年も、さ来年もという形で継続していくことを望むことを、ここに記すことができないのが、偽らざる気持ちです。例えば、パネルディスカッションの運営のみ（またはパネルディスカッション+1企画）という形で委員の任期を一年よりももっと短くするという変更を加え、それとは別に学生の口頭発表、ポスター発表の機会を葉山を会場にして設けるということも検討して頂きたいと思います。
- 6 レジュメ(ハンドアウト) はあった方がよいかと思いました。委員の方おつかれさまでした。

表7 Q7-6回答の内、事業継続に関する回答（自由記述）

No. 回答

- 1 一般の人にも参加できる学術イベントを学生が企画して、そこに他専攻の学生・教員が参加するのは、とても新鮮だったので、続けると良いと思います。
- 2 企画が盛りだくさんでとても良かったと思います。今後もこうした交流フォーラムが継続できれば幸いです。企画委員のみなさんおつかれ様でした。
- 3 とても興味深いフォーラムでした。継続することを期待します。総研大以外（一般）の方々も神楽ワークショップを見ることができたことも刺激になりました。とてもよい企画だと思います。

表8 Q7-6回答の内、感想に分類できる回答（自由記述）

No. 回答

- 1 大変行届いた、学生にとっても学ぶことの多かったフォーラムになったのではないかと関心いたしました。
- 2 本当にご苦労様でした。学生にとっても良い思い出になるとと思います。
- 3 委員のみなさまおつかれ様でした。

（文責：春藤献一）

2. 研究公演「石見大元神楽」に関するアンケート集計結果

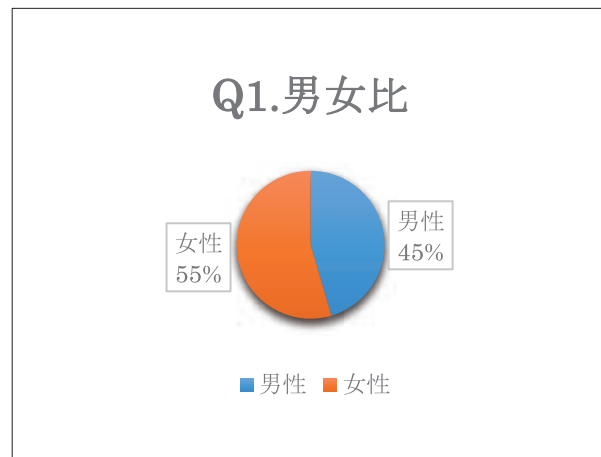
平成26年12月21日に国立民族学博物館で開催された研究公演石見大元神楽では、来場者全員に配布したプログラムにアンケートを折り込み、記入をお願いした。およそ280名の来場があり、そのうち154枚の回答を得ることができた。約55%の回収率である。多くの方々のご回答に深謝いたします。

本節では、今後の総研大学術交流フォーラムや民博での研究公演に生かすため、アンケートの結果を分析し、報告する。以下、各設問に対する回答を集計し図示するとともに、分析を加えていく。

無回答は省いて集計した。そのため、設問毎に総回答数が異なっている。記述式の回答は、内容毎に分類して集計した。分類できない回答は、その他とし、回答を抜き出してそのまま掲載した。

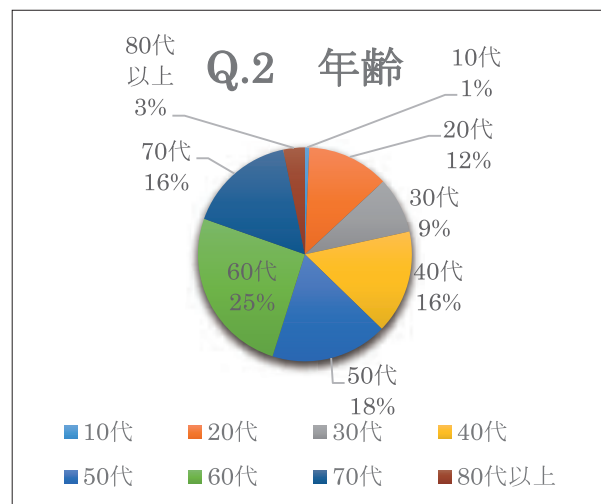
Q.1 性別を教えてください。

Q 1. 性別	集計
女性	80
男性	74
総計	154



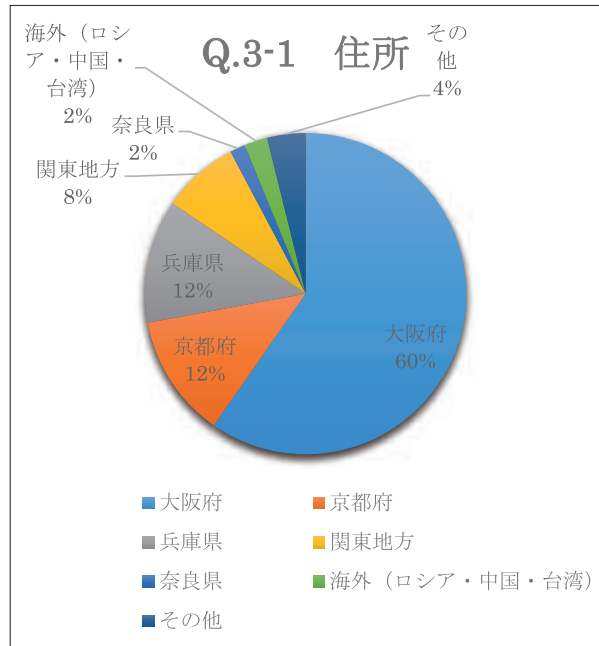
Q.2 年齢を教えてください。

Q 2. 年齢	集計
10代	1
20代	19
30代	13
40代	24
50代	27
60代	39
70代	25
80代以上	5
総計	154

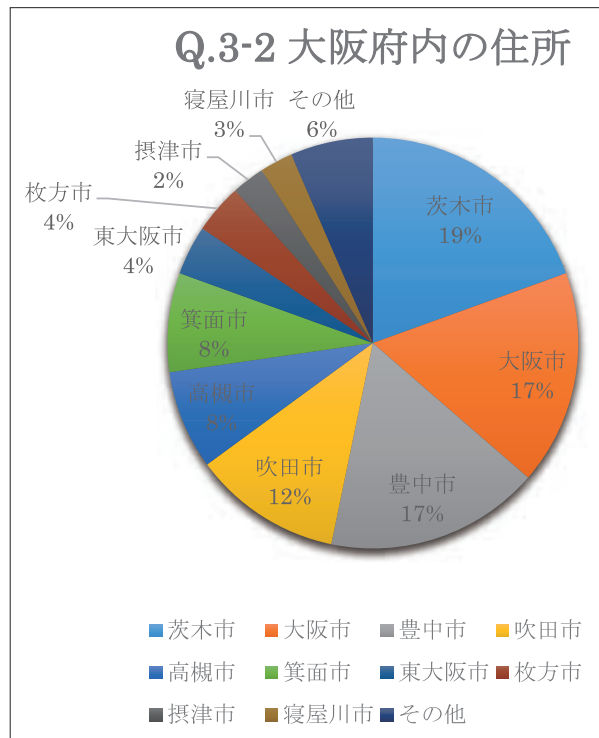


Q.3 どちらにお住まいですか。

Q.3-1 住所	集計
大阪府	77
京都府	16
兵庫県	16
関東地方（東京・神奈川・千葉）	10
奈良県	2
海外（ロシア・中国・台湾）	3
その他（愛知・島根・岐阜・広島・滋賀）	5
総計	129

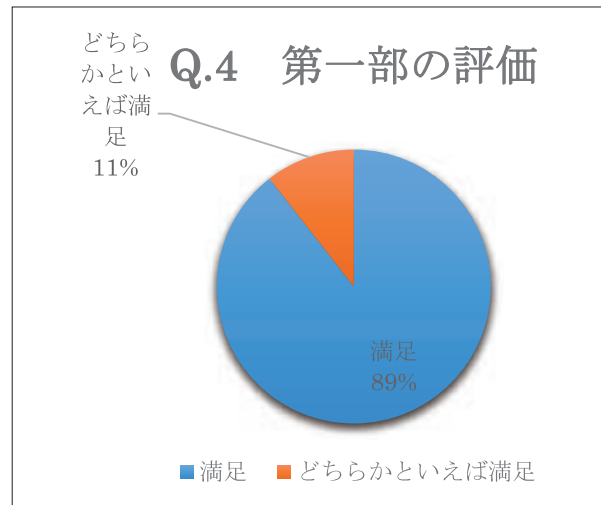


Q.3-2 大阪府内の住所	集計
茨木市	15
大阪市	13
豊中市	13
吹田市	9
高槻市	6
箕面市	6
東大阪市	3
枚方市	3
摂津市	2
寝屋川市	2
その他（四條畷市・三島郡島本町・泉佐野市・羽曳野市・池田市）	5
総計	77



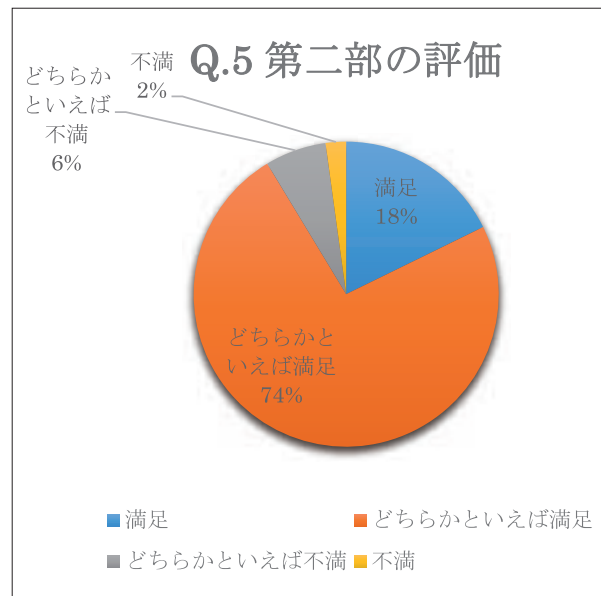
Q.4 第一部 大元神楽を舞う「市山神友会による神楽公演」についての感想を教えてください。

Q.4. 第一部の評価	集計
満足	127
どちらかといえば満足	15
どちらかといえば不満	0
不満	0
総計	142



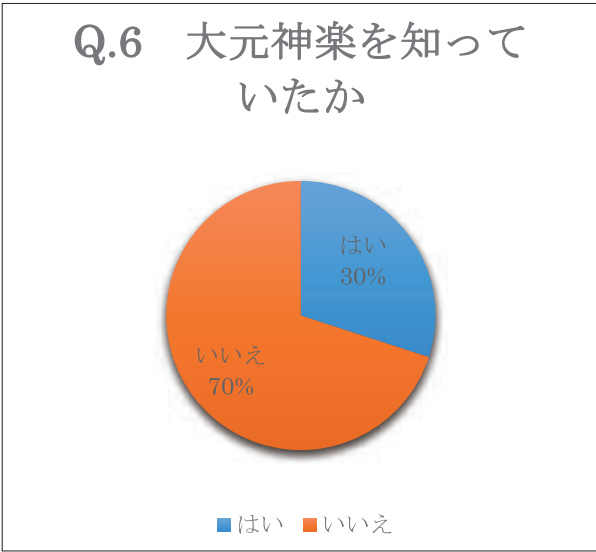
Q.5 第二部 大元神楽を語る「パネルディスカッション」についての感想を教えてください。

Q.5. 第二部の評価	集計
満足	44
どちらかといえば満足	34
どちらかといえば不満	3
不満	1
総計	82



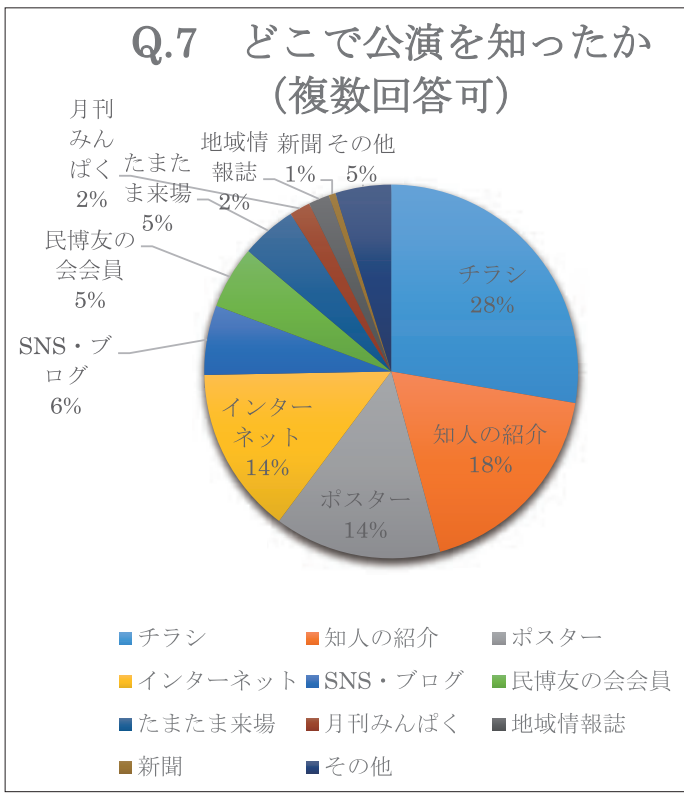
Q.6 「大元神楽」について以前からご存知でしたか。

Q.6. 大元神楽を知っていたか？	集計
はい	45
いいえ	105
総計	150



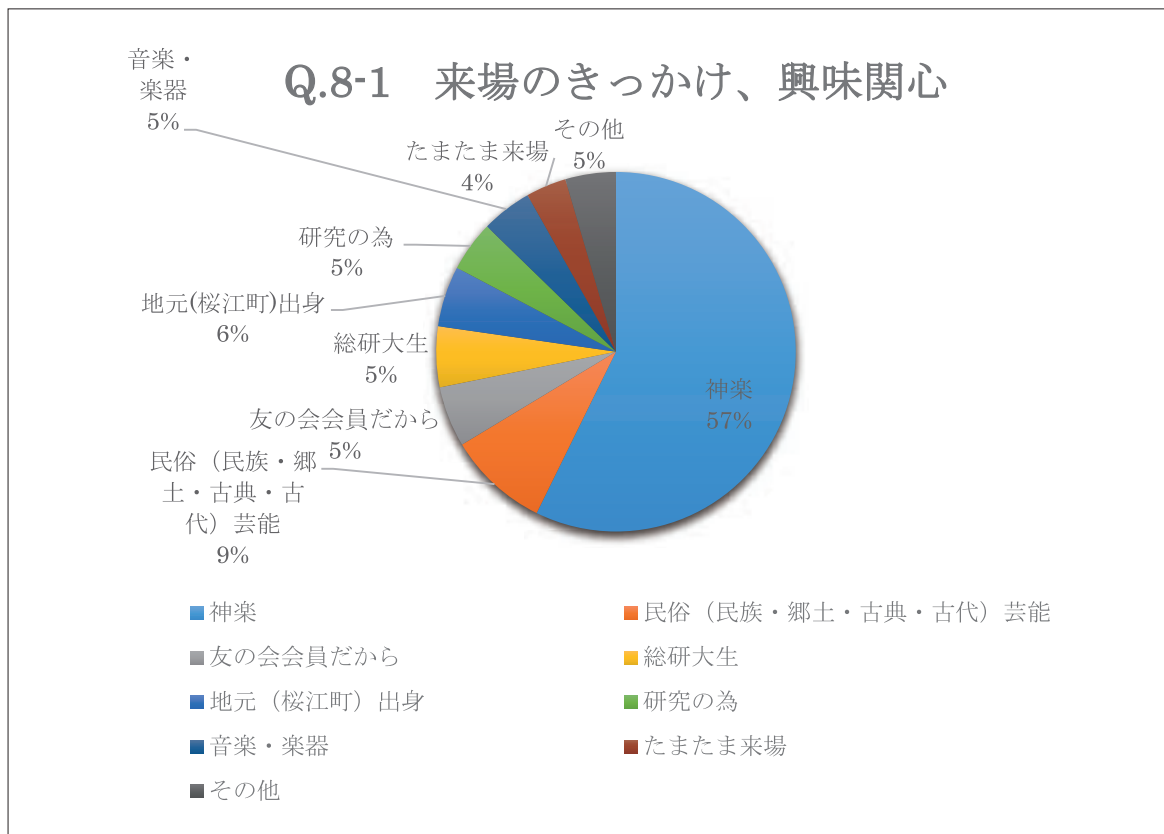
Q.7 研究公演「石見大元神楽」をどちらでお知りになりましたか。(複数回答可)

Q.7 どこで公演を知ったか (複数回答可)	集計
チラシ	46
知人の紹介	30
ポスター	24
インターネット	24
SNS・ブログ	10
民博友の会会員	9
たまたま来場	8
月刊みんぱく	3
地位情報誌	3
新聞	1
その他	8
総計	166



Q.8 来場のきっかけは何ですか？ご自身の興味関心をお書きください。
(記述式)

Q.8-1 来場のきっかけ、興味関心	集計
神楽	63
民俗（民族・郷土・古典・古代）芸能	10
民博友の会員	6
総研大生	6
地元（桜江町出身）	6
研究の為	5
音楽・楽器	5
たまたま来場	4
その他	5
総計	110



■ 「その他」に分類される回答

- ・日頃みることができないものをみれるから。
- ・知り合いのブログで知って、日本という特殊な国の文化のルーツを知ること。
- ・日本古代の神について興味があった。
- ・身体表現、文化。
- ・鬼の文化に興味があります。

■「研究の為」に分類される回答

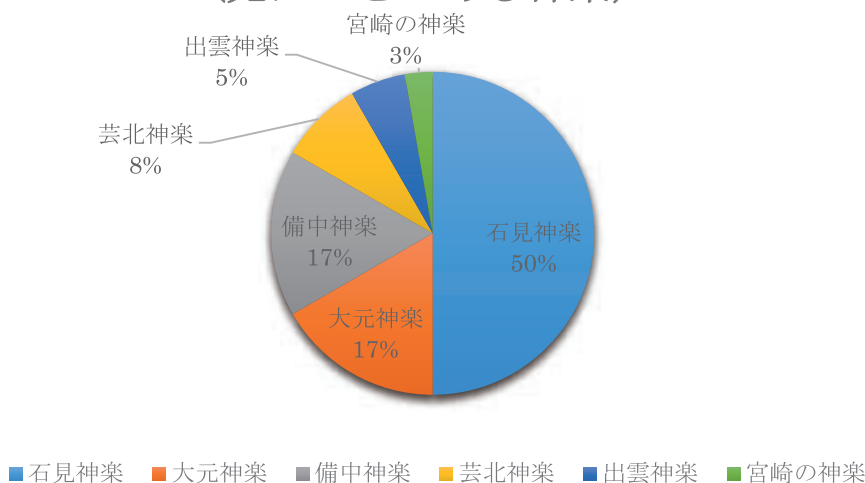
- ・無形文化遺産の保護を研究しているため。
- ・民俗研究をされている知人の紹介。日本の民族における中国由来の世界観およびそれと中国本土との違い。
- ・民間神楽やそこで読誦される祭文、講式などの儀礼テキストを研究しているため。
- ・地元の神々に捧げられる舞が、大阪という違う土地においてどのような変化があるのか見てみたかったため。
- ・40年程前から、中国地方の荒神神楽に興味を持っており、隠岐神楽、神殿神楽、備中神楽、大元神楽、周防の神舞も何度か見学しています。

◆Q.8に対し、神楽に興味関心があり来場したと答えたものの中には、「以前〇〇神楽を見た経験があるため、今回来場した」と自身の神楽経験を具体的に語る記述が多く見られる。

そこで、この記述に注目し、回答者が、今回来場するまでに、どのような場面で神楽と接し、神楽を意識してきたかをまとめた。

Q.8-2 来場のきっかけとなった神楽 (見たことがある神楽)	集計
石見神楽	18
大元神楽	6
備中神楽	6
芸北神楽	3
出雲神楽	2
宮崎の神楽	1
総計	36

Q.8-2 来場のきっかけとなった神楽
(見たことがある神楽)



◆アンケートに記された来場者の神楽経験は、神楽が行われた場所・行われた神楽の性格の観点から四通りに分類することができた。

①京都の社寺・大学、大阪の劇場など関西圏での石見・出雲神楽の公演

京都の大学での「出雲神楽」(大阪府豊中市・50代男性)(大阪府豊中市・80歳以上女性)、京都・祇園祭の八坂神社境内の能舞台での「石見神楽」(吹田市・50代男性)、節分の日松尾大社での「石見神楽」(吹田市・30代女性)、石見神楽大阪公演も見ました。(茨木市・70代女性)、「石見神楽」をやっている。(京都20代女性)

②観光地(鳥根県・広島県・宮崎県)でのイベント神楽見学

津和野での「石見神楽」(吹田・60代男性)(吹田・60代女性)、温泉津での「石見神楽」(豊中・40代女性)(寝屋川市・50代男性)、宮崎で神楽を見た(摂津市・60代女性)、今年9月、須佐での「スーパー神楽」を見て興味をもった。(大阪市・60代女性)、5年程前に「芸北神楽」を見てから毎年広島・鳥根に神楽を見に行くようになった。(泉佐野市・60代男性)

③本や博物館での公演などメディアを通じた出会い

三上敏視さんの本(『神楽と出会う本』)を読んで、是非ともと思って。(京都市・50代女性)、昨年も神楽を民博で見て、面白いと思ったので。(吹田市・60代女性)

④地元(故郷)での神楽体験

「備中神楽」の地元が自分の先祖の地。数年前収穫後の田んぼに舞台、客席をつくって公演、その折、舞台の木材を搬出。(兵庫県明石市・70代男性)

出身は岡山県でして、「備中神楽」を見ながら育ってきました。年をとるにつれ、神楽は懐かしく、心地よいものになっています。(茨木市・70代女性)

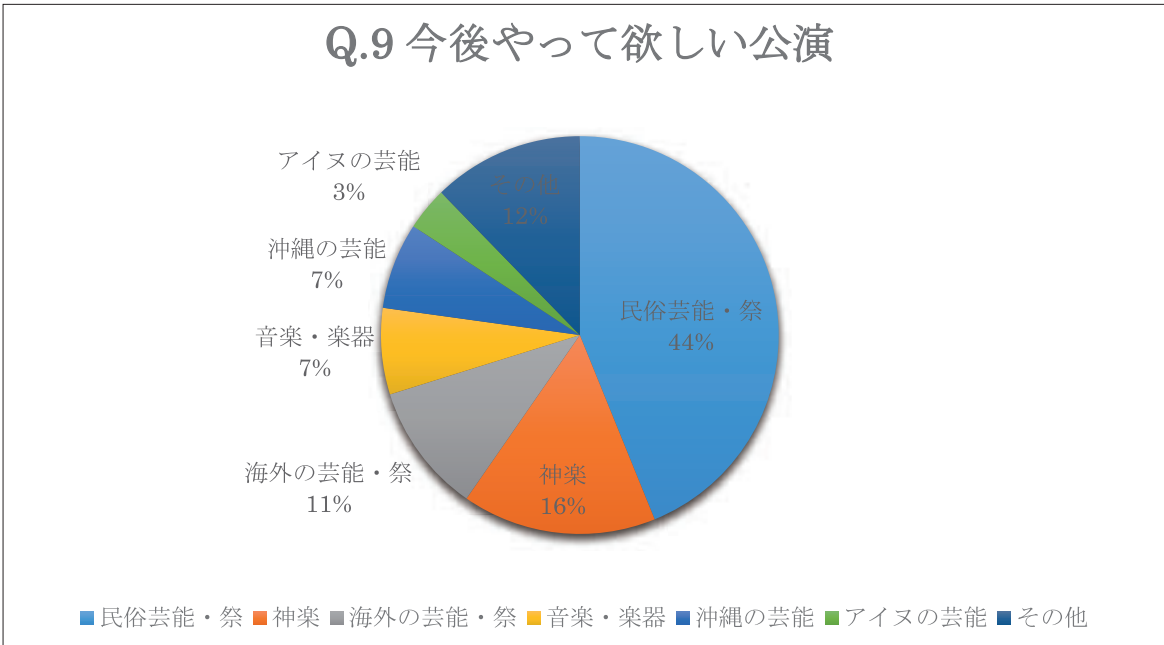
「備中神楽」で育ち、今まで見た「石見神楽」がショー的な要素が強く、少々異和感を持っていて、六調子の舞と聞いていて、どんなものかと。思った以上の演技と舞に参加させてもらいとても良かったです。(吹田市・60代男性)

私の実家(岡山県新見市)に「備中神楽保存会」があり、はからずも今年それを見る機会があった。目からうろこが落ちるように、非常に見応えがあった。(吹田市・60代男性)

この分析からわかるのは、関西圏における神楽受容のあり方である。特に、「石見神楽」は、関西圏で積極的に公演を行っており、認知度が高かった。そうした出張公演や観光地で出会うのは、観光政策のなかで、エンターテインメント性を高めた「石見神楽」や「芸北神楽」である。また「神楽」は、書籍や博物館というメディアの中でも、文化財や郷土芸能・芸術として紹介されていた。そうした新たな「神楽」に触れることで、都会で暮らす者は、かつて故郷の祭で見た「神楽」を思い起こし、自身のルーツとして「神楽」を再発見しているのではないだろうか。

Q.9 今後民博で、どのような研究公演を行って欲しいですか。
 ご自由にお書きください。(記述式)

Q.9 今後やって欲しい公演	集計
民俗芸能・祭	25
神楽	9
海外の芸能・祭	6
音楽・楽器	4
沖縄の芸能	4
アイヌの芸能	2
その他	12
総計	62



- ◆いただいた回答の中から、具体的に書かれた意見を選びそのまま掲載する。
- ・一時は失われたが、学術研究によって復活した、というような芸能があれば。
- ・石見神楽or芸北神楽の新舞（八調子）旧舞（六調子）比較。
- ・関心があるのですが、日本での伝統的食文化及びその復活再生の活動を知りたい、支援したいと思います。
- ・東京には国立劇場があって、定期的に民俗芸能をやるが、関西にはない。神楽のような地元で地道に継承されている芸能をやってほしい。
- ・高千穂の夜神楽、いざなぎ流祭文／苗族の歌掛など。
- ・全国の郷土芸能などここで見る事ができれば嬉しいです。「じゃんがら」も「みんぱくワールドシネマ」も是非見たいと思っています！！
- ・古代中国のヤンシャオ文化とギョウショウ文化について知りたい。

- ・文楽、猿楽、田楽、舞楽。
- ・日本人についての研究。島国について。
- ・地方の神楽とか剣舞など、やっていただけるとまつりのためだけに旅に出なくてすむかもです。
- ・アイリッシュダンス。京都府舞鶴市吉原地区に伝わる太刀振り。
- ・もう少し展示観覧券がいない公演をしてほしい。
- ・温泉全般について。
- ・食文化（中国南部ほか世界各地について）。
- ・歌舞伎について。
- ・奥三河花祭に関する研究公演をやって欲しいと思います。
- ・エイサーとアイヌのダンスの共演。
- ・もっと知りたい。どんどん公演して欲しい。なんでも。
- ・妖怪等について。
- ・式年で行われる儀礼を公演していただけると嬉しいです。
- ・必ずしも伝統的なものではない、さまざまな芸能の実演。
- ・神楽大会のような企画（民衆神楽、宮殿神楽…）。
- ・研究公演に地域的かたよりがあるように思う。人を招くことが難しい場合は、民族映像でよいのだが…。それと日本の場合、滅びかかっている芸能。放浪芸とか万歳とか。
- ・展示物にまつわる各地の民俗芸能。

Q.10 その他、ご意見・ご感想などございましたらご記入ください。（記述式）

紙幅の関係上すべてを掲載することはかなわないが、回答いただいた文章を趣意毎に分け、他と重複しない意見をそのまま掲載する。

【研究公演「石見大元神楽」に対する肯定的な評価】

- ・チラシ解説が、ていねいにつくられており、口上の部分まで、抜粋されていたのが良かったです。
- ・「いっしょになってやる（鈴木氏）」の意気や良し、好感。
- ・学生の研究が、この様な公演につながるのすばらしい。
- ・素晴らしい神楽を観せていただき、ありがとうございました。神友会のみなさまのご熱演に酔わせていただきました。
- ・パネルディスカッションで良くわかりました。
- ・公演も良かったです。パネルディスカッションでの会長さんのお話の人柄がよくうかがえて良かったです。このような人たちが伝統文化を支えているのだと理解することができました。ありがとうございました。
- ・実演の後、パネルディスカッションがあり、いろいろな事がよくわかり勉強になった。

- ・ 迫力があって、また司会がずっと密着して研究してこられた方だったので、とても良い研究公演でした。無料がもったいないように感じました。
- ・ まずは鬼がかわいいのなんの。布を使った演技だけどかわいかったです。頭の演奏も独特で、頭にリズムが残ります。ござ飛びもまさか連発で縄跳びするとは思わず、びっくりです。五龍王は、最終の所で、頭のキャッシュがパンパンになってしまった。配ってもらったシナリオを読ませてもらいます。
以上の素晴らしい演技を解説付きで見れて楽しかったです。知ったのが前日だったので、ハガキ申込みじゃなくて良かったです。
- ・ 島根県には、沢山の石見神楽の保存会があるようですが、今日の大元神楽も大変感銘を受けました。八幡神社で奉納しているお祭りというもの見たいものですが、守り続けていくのは本当に大変なのだと感じられました。
- ・ 神楽は場を離れて演じることは難しいと思うが、現地での神楽を想像しながら拝見させていただきありがたいと思った。
どのように伝承していくかというパネルディスカッションのテーマも興味深かった。
- ・ 五龍王の口上すごかったです。御座の「とびの段」もとても見応えがありました！！「伝承」って大切な事だというのが改めてわかりました。
- ・ 地元に行って、もう一度神楽、踊りを是非楽しんでみたい。講堂とは違った感動が得られると思う。
- ・ 第二部の鈴木昂太氏のプレゼンは簡潔でまとまっておりました。鈴木正崇氏のコメントも有益だった。
- ・ 大変素晴らしかった！若き舞手頑張れ！
飛んだ青年上手かった。鐘馗の舞手もうまい（2人とも）。鐘馗の衣装のすばらしさ、驚きました。
- ・ 大学院生鈴木君 若い人が石見神楽に目をつけたことに感心します。将来、民博を背負って立って下さい。期待しています。
- ・ とてもすばらしかったです。伝承で伝え続けることの大変さがあると思いますが、地方の誇りを持って若者にも地方の自信につなげることができればよいでしょうか。
- ・ 大元神楽の現状について、詳細に知ることができました。
- ・ 神楽を演じてくださった方々、企画し、運営をした学生に感謝の気持ちをお伝えください。神楽を見た後にパネルディスカッションがあったので勉強できてよかったです。
- ・ 楽しかったです。また見たいです。私もこの伝承に少しでも力になればいいなと思います。
- ・ 民族芸能を「舞台」で再現することの難しさも含めて、大変興味深かったです。ディスカッションも、それぞれの立場からの想いを聞かせていただき、素敵な時間となったように思います。
- ・ 学生の企画、運営というのが良いと思います。最後の閉会のあいさつなど、学生への余計な悪口を言う必要はありません。十分でした。
- ・ 神楽の演目がこのように多彩であることを知り、貴重な経験となりました。とても充実し

ていました。ありがとうございました。

- ・初めて神楽を拝見いたしました。自身の見識不足ゆえ、様々な神楽に関する事柄を知ることができました。ありがとうございました。特に五龍王の演目が非常に魅力的でした。
- ・神楽って面白いですね。神社とかの小さい空間ならきっと神と出会えることと思います。
- ・笛の音が美しく全ての楽器の息がぴったり合っていて、皆さんの緊張感が凄かった。真剣味が伝わってきた。観ている方も緊張した（良い意味で）。ゴザの「とびの段」大成功ありがとうございました。来年良いことがありそうですね。出演者の皆さんいい顔をされていて、神事神楽の伝承者としての風格を感じました。これからも素晴らしい石見大元神楽が守られますように。
- ・珍しい神楽を見せてもらった（御座←すばらしい、太鼓口）。民博公演に外れなし（入場整理に外れたことはあるが！）。
- ・司会をしていた方がほほえますぎました。研究頑張ってください。
- ・普段は現地でしか見られない神楽を関西で見られてよかった。会長さんや鈴木さんのお話で「伝承」についてのお話を聞き、ためになりました。
- ・大阪で石見神楽を見られて良かったです。又、このような機会を楽しみにしています。
- ・今日は立派なパンフレットまで用意していただき、本当にありがとうございました。笛も太鼓も舞も素晴らしかったです。特にゆるやかに始まって、終わりにかけテンポ早く舞もドラマチックに盛り上がっていくところなど感激しました。日本人にもこうした激しい情熱があるのだなあとつくづく感じました。
- ・幼い頃から、神楽と共に大きくなったので、久しぶりに観れてうれしかったです。石見神楽をもっと観たくなりました。ありがとうございました。
- ・すばらしい公演を見させていただきありがとうございました。いろいろ勉強になりました。
- ・本日のお神楽には感動致しました。
- ・総研大院生のみなさんお疲れ様でした。
- ・今回初めて石見大元神楽を見させて頂きました。近年自分の研究に神楽が関わって来ましたので、今回生の神楽を見たことは、非常に貴重な機会を得ました。非常に有意義でした。ありがとうございました。
- ・石見神楽は知っても、大元神楽は知らなかったもので、とてもよいものを見せていただけてありがとうございました。ディスカッションのほうは今回は見ずに帰りますが、民族芸能の魅力をいろんな人が知ることがこれからにつながると思います。
- ・迫力があり驚きました。色々な国のも見たいと思いました。
- ・神楽の演目がこのように多彩であることを知り、貴重な経験となりました。
- ・鈴木さんの思い入れがよく伝わる企画でした。もちろん神楽そのものも素晴らしかったです。おもむきの異なる4つの神楽がうまく配置されていたと思います。

【研究公演「石見大元神楽」に対する批判的な意見】

- ・今日の公演は長すぎる。

- ・公演としてはたいへん興味深く面白かった。配布資料の中に「口上」の紙が欠けており残念でした。
- ・私的な利用での写真撮影が禁止されてなくてありがたかった。終了時間が少し余裕がなかった。
- ・やさしく分かりやすい説明を望みます（特に高齢者にとって）。
- ・二部は各人がそれぞれ話すだけでいいのか。司会者が研究者だからか、目線が演者になく気がした。会長に話を振っておいて「短めに…」は失礼。
- ・「大元神楽とは」で始まっているが、そもそも神楽とはなんなのかなど、もっとジェネラルなイントロから始めてもらわないとわからない。全体的に専門外の人に来るには用語説明が少なく不親切。
- ・不勉強なのではずかしいのですが、神能と能について何か接点があるように思わせました。もしこのような関係があるようでしたら、解説があったらいいなと思いました。今日はありがとうございました。
- ・鈴木さんの活動方法は、アジア各地に残っている神の芸能に広く展開されるべきだと思います。かつてバルトークがヨーロッパ各地の辺境で採集した民謡は、今ほとんど現地に残っていないそうですが、欧州人は総じて生きた芸能の保存に関心が薄いのでしょうか。その意味で、急激な近代化の進むアジアの中であって、民博が人と予算を集中すべきと思います。パワポのフォントは28pt以上に限り、字数はもう少し減らしたほうが良いと思います。

【舞台での民俗芸能公演の演出について対する指摘】

- ・民俗芸能は舞台以外での上演方法を検討して欲しい。
- ・この規模ならマイクrophonは不要かと思います。
- ・もう少し会場の照明を落としてもよいのではないかと思いました。あまりにも周囲がよく見えるので、神楽への集中度が削がれてしまいます。
- ・子供の入場に関して配慮されてはと思います。

【感想】

- ・「大元神楽」は、神様からかなり抜けきって、エンターテインメント（娯楽性）として芸能に近づいていると感じられました。
- ・神楽の盛んな土地で育ちましたが、それとは違った品の良い(?)お神楽 興味深く拝見しました。すばらしい企画をありがとうございました。
- ・とても良い施設であると思う。もっともっと子供たちが学べるようにするとよいと思う。今回の企画は良かったです。
- ・早めに来たところ、ガムランの踊りと演奏が見れてラッキーでした。研究発表会の内容もくわしくHPで公開してほしい。
- ・3つの演目の台本を、最初どのような人物が造ったのか興味がつきないです。作者は京で能狂言を見物していたのでしょうか？鐘馗には大陸の演劇の影響もあるのでしょうか？

- ・ 伝承文化が人口減少になり継承が難しくなっている。是非良い継承のやり方が見つければと思います。
- ・ 私達の村（岡山）では、今年式年神楽（荒神神楽）は終止符を打つことになりました。少々寂しい気分ですが、他地域の伝承文化が上手く継承されるようアイデアで少しでも前に進みますようにと願っています。
- ・ 今年10月に荒神神楽を奉納しました。地区の人も年をとり、今年で最後にしようということになっています。大元神楽ガンバレ！！
文化！！くらし、生きがいです。
- ・ 神楽など、民間伝承芸能を体系的総合的に記録し、すべてを残しておく必要があると思います。
- ・ 伝承文化を継続させる必要は、常々感じる。観客側から見れば、一つの「芸事」、「アート」の鑑賞する立場からは、その中身、端々から、何事かを知り、別の無形の何かを感じる豊かさを、享受する限りでしかない。つまりは、現代日常性の様変わりから、ある種変わり行くものが変わり、その言葉は悪いが、廃れた方も容認すべきと考える。我々が普通の当たり前前に識るそういったものの、日本社会全般を各自おのおのがどう受け止めるのかに、至るかが肝要なのでは??
- ・ 12月17日に春日若宮おん祭のミコさんによる神楽をみましたが、神楽でもいろいろな神楽があるということをかんじました。
- ・ 神楽など、民間伝承芸能を体系的総合的に記録し、すべてを残しておく必要があると思います。
- ・ 地域で伝統を続けていくのは困難である。組織作りのリーダーが必要である。子供、家族で文化を守る事ができるのか？
伝承文化が人口減少になり継承が難しくなっている。是非良い継承のやり方が見つければと思います。

（文責：鈴木昂太）

2 企画運営の課題

1. 準備作業・役割分担

はじめに

本節は、学術交流フォーラム2014の準備作業及び役割分担に関する課題を報告するものであり、その内容は、フォーラム実施後に開かれた第7回及び第8回学生企画委員会での議論と、報告者自身の体験及び個人的に聞くことのある意見等をまとめたものである。

準備作業

準備作業最初期に行うフォーラム全体のテーマ設定に関しては、基本的には学生主体で行うべきであるが、設定の前提に関して経験者及び教員による指示、あるいは枠組みの提示がある方が、より円滑に早い段階でテーマ設定ができると考えられる。また、予算取得に関しては、金銭面の管理は葉山及び学融合主導で進めていき、そこに各基盤の教員、学生が関わって行って執行する形が円滑な運営に繋がると思われる。

事前準備に関しては、企画の主体及び準備は学生が行うものの、今回は全員ひとつ以上の企画を担当しており、このことで全体を勘案する余裕がなかったのは確かである。運営は委員のみではなく外注や基盤個々ではなく連携した基盤で運営する、あるいは早い段階で企画のアイデアを出し、学生や教員を巻き込んで投票の上、企画をひとつに絞るなど工夫する必要があることも浮き彫りとなった。

役割分担

本フォーラムは、基盤所属の委員及び事務局に負担が集中してしまった経緯がある。それを解決するためには、企画に関して小規模のプロジェクト制を取り入れ、ひとつの企画にリーダーとサポーター数名を設置するなどの協力体制強化が必要である。その際、各専攻で2名以上の委員選出が必要であり、企画リーダーと開催基盤所属のサポーターを設置し、協力体制を作ることもひとつの案であろう。

また今回は、予算及び事務作業に関しても基盤所属の委員を通じてしか話し合いの場を持つことが許されない場面が多くあったため、開催する基盤の事務とどう連携するのか、という課題が残っている。

さらに、本フォーラムでの企画・運営は各委員自身の研究と直接かかわらなくとも、人間性、学術的な広がりなど研鑽の場となったという認識が委員間にはあったものの、研究と並行して行う場合の時間配分及び役割過多に関しては要検討が必要であるとの認識も認められた。

(文責：光平有希)

2. 当日作業・フォーラム全体

はじめに

本節は、学術交流フォーラム2014（以下フォーラム）の当日作業・フォーラム全体に関する課題を報告するものである。本節の内容は、フォーラム実施後に開かれた第7回および第8回学生企画委員会での議論と、報告者自身の体験や個人的に聞くことのあった意見等をまとめたものである。

当日作業

当日作業における課題としては、学生企画委員が忙しすぎたということが言える。本フォーラムでは企画ごとに1人の企画責任者を置くことで、研究公演や料理・音ワークショップ等の魅力的な企画が実施された。しかしフォーラム会期中も企画担当者はそれぞれが受け持つ企画にほとんど張り付いて準備を進める必要があったため、自身が担当する企画以外のプログラムについては、ほとんど参加することができなかったケースが多かったようである。

また、当日は国立民族学博物館を基盤機関に持つ学生アルバイトや、文化科学研究科の各基板機関や大学本部から来ていただいた事務の方々、また何名かの学生にはボランティアとして準備を手伝っていただいた。これらのマンパワーなしには、フォーラムは実現できなかった。御協力いただいた皆様へ心より感謝申し上げます。

当日作業では、特に会期2日目の研究公演に関する準備で人出が必要になった。研究公演に関する準備は大幅に遅れており、さらには当日朝に急遽パンフレットに資料を挟み込む作業が発生する等、時間的に切羽詰まった中での作業であった。

報告者は研究公演でのアナウンスおよび、挨拶・趣旨説明部分での進行、また予定にはなかったが閉会式での進行も急遽担当した。企画責任者より台本の初稿が共有されたのは12月18日であった。19日に報告者が改訂し、研究公演当日21日朝に舞台設備担当業者との打ち合わせによりさらに改訂された。またパネルディスカッションが行われている最中にも閉会式の台本を改訂する必要があった。フォーラムのプログラムは全て大きな問題なく進行されたが、内情としてはこのような状況も存在していたことを記しておきたい。

また、これ以外にも委員間での連絡不足による混乱等も一部見られた。これは、当日の委員間での連絡のやり方を事前に確認できていなかったことに起因するミスであるだろう。

フォーラム全体

フォーラム全体に関しては、学生企画委員会でテーマ設定について多くの意見が見られた。テーマを決めるのは誰なのか？という問いに対して、教員や委員経験者がキーワードを用意して新委員がそこから案を出す、という意見が見られた一方で、委員のモチベーションのためには、自分たちでテーマを決めるのが良いという意見もあった。本年度フォーラムのテーマ設定方法は、予算の関係であらかじめ「資料・史料・試料」というようなキーワードが用意されていた。しかし委員からは、フォーラム事業の概要や目的が把握できていなかった第1回あるいは第2回の学生企画委員会でテーマを決めるのは難しかったという意見もあ

った。

また、開催時期についても多くの意見が出た。今回は12月下旬だったが、夏、春といった意見も出た。しかし秋の学会シーズンを避けること、ある程度の準備期間を設けること、その後の振り返りに必要な期間を考えると、現状、あるいは現状より少し早い程度という意見が多かった。春という意見は、1年がかりで準備をして、新入生の交流もかねて年度明けに開催する、という案であった。

また今年度フォーラムは学生が主体となり企画運営されたが、一方で教員をどのように巻き込むかが課題としてあげられた。教員の参加を増やすということを考えると、春は多くの教員が他の時期と比較して余裕があるため、春もいいのではないかという意見があった。

本年度フォーラムは非常に充実した内容であったが、懇親会に限っては、より充実させる必要があるとの意見があった。懇親会・交流会を盛り上げるような仕組み作りや、フォーラム夜の部としての懇親会・交流会を企画してはどうかという意見も見られた。

おわりに

本年度学術交流フォーラムは、これまでに無い規模のフォーラムであったが、結果的にみれば大きな問題なく終えることができた。これは、学生企画委員をはじめとする関係者の努力や苦勞の結果であるだろう。本稿が、今後のフォーラム事業の参考になれば幸いである。

(文責：春藤献一)

3 講評

1. はじめに

平成26年12月20日・21日、国立民族学博物館において開催された「文化科学研究科学術交流フォーラム2014」は、その前身を平成17年度より行われていた「学生合同セミナー」に持つ。「学生合同セミナー」は研究科内の学術的交流を目的としたもので、学生がその企画・運営を行うことを特徴として始まった。その後、教員の企画・運営による「学術フォーラム」が開催された時期があったものの、双方が合流する形になった平成20年度以降は、年に一回の開催、一切の企画・運営を学生企画委員会を中心として行うという形で定着した。本節では、本フォーラムの準備段階より関わった立場として、この学生企画委員の活動を中心として2014年度の学術交流フォーラムを振り返ることにより、講評の代わりとしたいと思う。

2. 学生企画委員の活動とその成果

本年度学生企画委員は、平成21年度より学生の新規募集を停止したメディア社会文化専攻を除く各専攻より選出された。本年度の委員は入学初年次の2名を含め、全員が企画委員に初めて任用された学生であった。25年度に学術交流フォーラムが開催されなかったこともあり、企画・運営上のノウハウ等がほぼ継承されていない中、「フォーラム」をどのようなものとして捉えるかという共通認識を作るところから活動は始まったと言ってよいだろう。

委員は、基本的に月に1回の対面の会議において企画等を検討し、その際に発生するタスクをそれぞれ宿題として持ち帰り、WEB上で報告、または話し合うという形で準備を進めていった。これは、各委員の所属する専攻が関東と関西に分かれており、すぐに会うことができない遠隔に離れた場所で、通常は博士論文執筆に向けて研究活動に勤しむ学生という立場での活動方法としては有効な形であったと考える。

情報の共有に関しては、途中よりネット上のグループウェアを用い、情報及び活動成果の蓄積を可視化できるようにしていた。これはメールでのやり取りだけでは情報の共有化に漏れが生じる可能性を考えてのことであるが、注目すべき点は大きな問題が起きる前に、その課題の「解決」の方法を模索していった結果としてこの方法が取られたということである。こうしたいわゆる課題発見型の能力（イノベーション能力）は、課題解決型の能力（ソリューション能力）のさらに高次の能力と位置付けることができ、ジェネリックスキルとして高く評価されるものであるとともに、社会からの要請も高い。委員の活動には、このようにフォーラムの企画・運営を通じて、自らの知識・技能を生かし、さらに活性化させる場面が多く見られた。

基本的に月に一回の会議で会うのみということであったが、委員間のコミュニケーションは円滑であったと言ってよい。当初より大きな人間関係の齟齬等があったということはないが、同じ目的、すなわちフォーラムの成功ということに向かって協同して活動していく中で結束力が高まっていった雰囲気を感じ取ることができた。直接対面する機会はそれほど

多くはなく、対面する場合も長時間の会議で多くの議題をこなすため、学生らしいコミュニケーションを楽しく行うような時間的余裕はなかったが、委員としての職務を通じてのコミュニケーションが人間関係をより良いものにしていったと言える。勿論、半年以上にわたる準備期間において、小さな行き違い等はあるが、全く問題が起きないということではなかった。しかし、それらが大きな問題に発展することがなかったのは積極的な協調の成果と考えられ、ここでも委員のもとのジェネリックスキルの高さとともに、活動による成長を見ることができる。

委員の成長ということで考えると、最も大きな成果を見ることができたのは、フォーラム本番の運営に関する場面であった。ただしそれは、試行錯誤を通じての学びということである。

念入りに企画を練り、準備にも余念がない中で、直前まで不安視されていたのが、本番での活動であり、その不安は確かに課題となって表れた。本フォーラムは、学術交流を主眼としており、そのため今回委員はフォーラムに様々な学術交流の方法を取り入れた。すなわち、口頭およびポスターによる研究発表、パネルディスカッション、学術的な知見に基づくワークショップ、そして研究公演である。これらの運営をわずか6人の委員でこなすということの難しさもさることながら、そもそも学生である委員たちが、日ごろ指導を受けている相手である教員の参加を募って大きな催しを開くことには困難が伴う。参加した教員の柔軟かつ積極的な対応があったこともあり大きなトラブルはなかったが、舞台裏で委員は、多発する小さな問題に全力で取り組むことになっていた。

こうした本番当日の課題に際しては、学生委員だけでは対処しきれない場面が多くあった。準備の段階でイノベティブな活動を見せていた委員たちであったが、本番で彼らをソリューションへと導いたのは、周囲の「大人」たちの活動であった。この場合の「大人」とは参加教員、そして関係各部署の事務職員を指す。特に注目すべきは事務職員からの指導であった。

例えば今回のフォーラムは、一部を国立民族学博物館との共催という形を取った。共催としたのは研究公演である。これは、国の重要無形文化財である鳥根県の「大元神楽」を招き上演してもらい、民俗芸能についてのパネルディスカッションを行うというものであったが、これを国立民族博物館の事業活動の一環として一般公開としたのである。広く民俗芸能そのものの魅力を伝えると同時に、それが抱える問題を考える場を提供し、意義の深いものとなった。一般の方々を含めて多くの参加者があり、フォーラムの締めくくりとしてふさわしい盛大なものであったが、その分準備も当日の運営も大変詳細な行程を必要とした。しかし、一般の人々を招くような大掛かりな公演会の運営に必要な作業がどんなものであるか、委員の知恵を絞っても想像外の部分の方が多かったのが現実であった。事実、委員たち自身が、どこまで準備したら当日問題なくできるのか分からないという不安を抱える状況であった。こうした状況は、学術講演会に限らず、ワークショップなど、委員たちが主催側としての経験がない分野において特に見られた。多数の人を対象とする催しのハンドリングの難しさは想像できていたものの、実際に何をやればよいのかという知識は持たない。こうした状況に働きかけたのが、博物館の職員の方々であった。フォーラム準備・運営に奔走する委員に対

して、様々な立場から自身の持つ公演運営のためのノウハウを伝授していただいた。学生である委員はそれを恐縮して受け取っていたが、これこそが、学生の学びの場として大きな意味を持っていた。

これらは、暗黙知の移転・変換を行う知識創造のモデルを実体験として経験したことになったと考えられるだろう。こうした暗黙知の形式知化のプロセスとして、この報告書自体の存在も挙げられる。この報告書は委員長の発案で、委員の総意のもと、このフォーラムを次代に担う人のために作るようになったものである。すなわち、自らの得た知識を形式知化し、SECIモデルでいう知の表出化・連結化を図ったものということになる。日常的に宣言的知識の獲得を中心に活動を行っている学生である委員が、手続き的な知識をもとに創造的な知識構成のプロセスを体験として行ったことの意味は大きいと思われる。これが次代において、高次の知識創造につながることを期待したい。

3. 学生企画事業の課題

このように本フォーラムでは、それ自体の成功とともに学生委員の活動としての意義を確認することができたのではあるが、その一方、活動を通じて最後まで困難を訴えていたものがあった。それは、「目標」の共有である。先に挙げた「フォーラムとは何か」ということが、準備の後半に至るまで共有できなかった。委員はシンポジウム・フォーラム等の企画・運営に主たる立場として関わるのはこれが初めての経験であったが、そのためだけでなく、一般的に「フォーラム」と呼ばれるものがどんな形態のものかということに関しても、定型のようなものがないというのも原因だろう。さらに、本フォーラムは学術的な交流を主眼としているが、どのような形で交流するのか、交流の先に何を見出すのか、参加者に何を得てもらおうのかという部分について、委員間で常に話し合っていたものの、最後まで漠としたものを各人が抱えるという状況であった。これは、文化科学研究科連携事業として行ってきた本フォーラムが何のために行われてきたのかということを再確認する活動につながった。その成果として、本報告書に委員長が書いた概要文があるのであるが、フォーラムが回数を重ねる中で、その本質に立ち返る時期になったとも考えることができよう。

4. おわりに

以上、2014年度の学術交流フォーラムを学生企画委員の活動から振り返り、主に成果と課題点をまとめることとなったわけであるが、最後にフォーラムの意義について考えてみたい。終了後、複数の参加者、そして委員の学生にフォーラムをどう思うかということについて意見を聞いた。アンケートのような網羅的なものではないため、その意見に偏りはあるかと思われるが、総じてフォーラムは交流の場としても、学術的な刺激を受ける場としても実に「楽しい」ところであるということが言われていた。2日間にわたって「脳をフル回転」する必要があるから「大変疲れる」という意見もあったが、これはややもすると交流が単なる友人関係の拡大・延長として捉えられることが多い中、それよりも一歩進んだ学術交流の場として機能しているということなのであろう。これは本来の趣旨に合致している。

様々な分野の多くの教員が学生の研究活動に意見を述べる場は、自らの専門性の中に閉じがちな大学院博士課程の学生にとって貴重である。これが研究の深化に与える効果は言を俟たないだろう。こうした意義を持つフォーラムが、今後一層の進化を遂げ拡大していき、そこに多くの参加者が集うよう、今後ますますの発展を願うものである。

(文責：学融合推進センター 七田麻美子)

第5部 総括

1 文化科学研究科 学術交流フォーラム2014 成果瞥見と将来への展望

まずは画期的といってもよい企画の実現に漕ぎ着けた学生企画委員、担当の先生方、それに実施会場を提供された国立民族学博物館の先生方にも、深く御礼もうしあげます。

本年度の実施のうち、将来への布石となるのは、まず全体管理方式を改め、個別企画ごとにできるかぎり個別の責任者、企画者を立てた運営方針でしょう。たしかに最終的に全体を統御する東城義則委員長には思わぬ責任が伴い、全体調整も楽ではなかったことと思います。また国立民族学博物館が開催地であった特殊要因は勘定に入れるべきでしょう。とはいえ、ある程度以上の規模の複合的な企画には、全体管理方式では対応不可能です。

大きく3つの企画が設けられました。順不同ですが、まず料理体験ワークショップでは菅瀬晶子先生によりパレスティナの日常食、ムジャダラの文化背景まで浮彫にされました。復活祭の聖週間の行事や聖母信仰などに触れた一方、ドルーズ派には輪廻転生の信仰がありますが、その背景をめぐって哲学史的な議論まで展開されました。管理上の問題があつて、調理室への出入りがやや面倒だったのは事実です。つぎに博物館ホールで開催された音・音楽ワークショップでは、まず伊藤悟研究員により瓢箪笛の実演と解説が聴衆を魅了し、後半ではチャンドラ・バスカラの演奏に仁科エミ先生の講演が組み合わせられました。ガムランの非可聴領域音が可聴領域音と競合して人間の脳に好ましい影響を与えているといった実験成果は、演奏者の皆さんも初耳だったようです。ミンパク所蔵の楽器がメディア研究科の教員の働きによって活性化されたのも、専攻横断による学術的成果として貴重でした。聴講者による即興の演奏まで実現してしまう授業技術からも、大いに学ぶところがありました。座学だけでは得られない達成感が、演奏に参加して初めて体得できました。

これらが2日目午前中だったのに対して初日には研究講演が催されました。2部構成となったため、半分しか傍聴できていません。その範囲で取って意見するならば、通常の学会発表を踏襲したような小講演を専攻ごとに羅列して披露するのではなく、話題をより有機的に収斂させると、議論がさらに盛り上がるように思います。また講評は教員に担当させておけばよいのでしょうか？必ずしも専門家ではない聴衆を相手になにを訴えるか、も大切です。パネル・ディスカッション「共同研究から見つめる文科のいまとこれから」では「ハワイにおける日本文化の変容」のみを聴講しましたが、事前に今少し打ち合わせをしておけば、関連の人類学研究者などから、より有益な補助情報が得られるかな、と思いました。

2日目の最後は大元神楽の研究公演でした。これは鈴木昂太さんの研究とミンパクの一般公演とが手を結んで初めて実現できる祭典でした。あらためて物心両面でお力添えを頂いた須藤館長にも御礼申し上げます。現在、学術フォーラムは必修といった位置づけはしていませんが、参加すればタメになるという実績から、他研究科も含めた参加者が増えればなによりと考えます。学生企画委員の負担がいささか過剰であるのは事実ですが、これは将来への投資となれば相殺以上の価値があるはずです。ポスター発表にあれだけの数の応募があった

のですから、潜在的にはまだ開発の余地が多々あるでしょう。逆にプログラムがいささか過密になりすぎ、時間管理が煩くなりすぎる傾向には注意したほうがよいでしょう。分科会方式が最良なのかどうかにも、検討の余地がありそうです。敢えて題目を絞ることも、ひとつの見識でしょう。研究科長として最後に個人的な感想を差し挟むなら、SOKENDAIの文理融合プログラムでの成果（科長担当）と、通称「海賊科研」での成果を是非とも「共同研究」の先行事例の教訓として発表したかったのですが、ポスター発表に留まって、折角のノウハウや失敗談を在籍院生の皆様に開陳する機会を逸しました。これには捲土重来、またの機会を期待したいと思います。運営経費が来年度以降も確保されるか否かも不安定要因ですが、実績を根拠に学長に訴える所存。関係者一同の労を労いつつ。

平成27年2月10日

研究科長

稲賀繁美

2 平成26年度学術交流フォーラムを終えて

平成26年度の総合研究大学院大学文化科学研究科の学術交流フォーラムは1年あけての開催だったことから(平成25年度には実施しなかった)、担当教員としては非常に緊張していた。前回の平成24年度実施のフォーラムは国立歴史民俗博物館を会場として実施し、担当の仁藤敦史先生が学生たちを組織して見事な采配をふるって実施されており、こちらは2年かけて準備しておいて無様なものをやるわけにはいかないというプレッシャーがかかっていたことは否めない。しかも、担当教員を引き受けたものの、前回の見事なフォーラムに圧倒されるばかりでこちらには何のアイデアも浮かばない。

しかし、教員側がだめな場合にはその下にいる学生たちが動かざるをえないために、逆に学生側から次々とアイデアが生まれて結果的にうまくいくこともある。今回学生企画委員として集まってくれた学生たちはいずれも個性豊かであるとともに、新鮮な発想の持ち主ばかりだった。少々危ないものもあったが、正直彼らが出してくるアイデアにこちらが舌を巻くことが多かった。まず強烈だったのは神楽を上演するという日本歴史研究専攻の鈴木昂太さんの企画だった。それは準備のかなり早い段階で提案されてきて、実は私は準備期間中ずっとそのことが頭から離れなかった。その上で国際日本研究専攻の光平有希さんの音楽ワークショップと比較文化学専攻の西山文愛さんの料理ワークショップが提案されてきて、これらの行事だけで私の頭の中のフォーラムはいっぱいになってしまった。そのために、国際日本研究専攻の春藤献一さんと日本文学研究専攻の黄昱さんがポスター発表や口頭発表、それにパネルディスカッションなどを準備していると聞いて正直ほっとした。そして、当日報告やポスターの様子を観察していて、これだけのことをよく短時間にここまで準備できたなど感心していたのである。これもおそらくは事務局を引き受けてくれた卒業生の宮脇千絵さんと、今年度の学生企画委員長としてフォーラム全体を統括していた地域文化学専攻の東城義則さんの采配によるものだったのだろう。

12月20日と21日の両日には研究科の教員と学生併せて70名ほどが会場に集まり、研究報告、ポスター発表ともに活発な議論が行われた。さらに21日のワークショップと神楽には一般の来館者も多数集まった。したがって、人の集まりという意味でのフォーラムとしては成功だったといえるだろう。しかし、本フォーラムの主題である「文化をカガクする？」という問題提起に対してどこまで応えることができたかについては、参加した学生たちの今後の研究の行方を見定める必要があるかもしれない。

最後になりましたが、学生企画委員会で貴重な助言をいただいていた学融合推進センター特任教員の藤井龍彦先生と七田麻美子先生、ワークショップでご指導いただきましたメディア社会文化研究専攻の仁科エミ先生と国立民族学博物館の菅瀬晶子先生、見事な神楽を上演してくださった市山神友会の皆さん、口頭発表、ポスター発表、パネルディスカッションでご報告いただきました教員と学生の皆様、そして会場に集まっていた方々全員に心より感謝申し上げます。また、本フォーラムの開催に全面的にご協力いただきました総合研究

大学院大学学融合推進センターと国立民族学博物館に御礼申し上げます。

平成27年2月13日

地域文化学専攻長（フォーラム担当）

佐々木史郎

平成 26 年度 学生企画委員事業実施要領

平成 26 年 3 月 14 日

文化科学研究科専攻長会議承認

(趣旨)

- 1 この要領は、文化科学研究科における学生企画委員事業（以下「本事業」という。）の実施に関して必要な事項を定める。

(事業の取扱い)

- 2 文化科学研究科が実施する各種事業を推進するために、本研究科の専攻に学生企画委員を配置する。

(対象者)

- 3 学生企画委員の対象者は、本研究科の専攻の学生（休学者又は留学期間中の者を除く。）であって、学生の所属専攻を置く基盤機関等においてリサーチアシスタント又はティーチングアシスタントとして雇用されている者とする。

(2)前項に規定する者のほか、本研究科専攻長会議において認められた者とする。

(学生企画委員の業務)

- 4 学生企画委員は、リサーチアシスタント又はティーチングアシスタントとして雇用する基盤機関が定めた業務を遂行するもののほか、本プロジェクトの事業を推進するとともに、所属する専攻の専攻長の指導又は助言を得て、学生の研究活動等に対する研究的又は教育的支援に係る次の各号に掲げる業務を行う。

(1) 学生が所属する専攻以外の専攻を置く基盤機関等の研究環境を活用するときに、当該学生の研究計画作成等の相談又は助言、並びに当該基盤機関等における研究活動等の支援を行う業務

(2) 学生が所属する専攻が実施する中間論文報告会又は博士論文公開審査会、もしくは当該専攻を置く基盤機関等が実施する研究会その他の事業に係る情報収集又は学生周知等支援業務

(3) 文化科学研究科が主催するフォーラム等の企画・運営に関する業務

(4) 前各号に掲げるもののほか、事業遂行により学生の研究能力又は教育能力の開発、育成に資すると専攻長が認めた業務

(学生企画委員に係る雇用経費の送金額算定基準)

- 5 学生企画委員に係る雇用経費の送金額算定基準は、学生の年間授業料相当額を目安とし、リサーチアシスタント又はティーチングアシスタントとして雇用する基盤機関等が定めた1時間当たりの給与単価を基準として本研究科が別に定める。

(学生企画委員に係る雇用経費の送金処理)

- 6 事務局は、本研究科が別に定めるところにより、学生企画委員に係る雇用経費は当該専攻を置く基盤機関等に送金するものとする。

(学生企画委員に係る謝金及び旅費について)

- 7 前各項に定めるもののほか、本事業の実施に際し必要があると研究科長が認めた場合、学生企画委員に対し謝金及び旅費を支給できるものとする。

(2)前号に定める謝金及び旅費の支給に関する事務は、葉山本部基盤総括事務係で処理する。

附則（平成 26 年 3 月 14 日文化科学研究科専攻長会議承認）

本要領は、平成 26 年 4 月 1 日から施行する。

平成 26 年度学生企画委員会（第 1 回）議事次第

平成 26 年 6 月 16 日(月)15:00~17:00

国立民族学博物館

国文学研究資料館（TV 接続）

議題

1. 自己紹介（15分）

- お名前（所属）
- 専門
- フォーラムへの意気込み

2. 事務局スタッフの紹介（5分）

3. 担当教員よりフォーラム実施にあたって（経緯説明）（5分）

4. 平成 26 年度学生企画委員会委員長 及び副委員長の選出（5分）

5. 各教員・事務局・学生企画委員の役割分担の確認（30分）

6. 休憩・会場下見（10分）

7. 平成 26 年度学術交流フォーラムについて（30分）

- 日程・会場・宿泊場所について
- テーマについて
- プログラム概要の検討について

研究発表・ワークショップ・交流・共同作業・シンポジウム・懇親会 博士論文執筆者
--

- 学生の参加形式について
- 学生企画委員の担当割り振り

8. 広報について（10分）

- 具体的なPR方法について（ポスター作成、SNS）

9. その他（10分）

- 次回学生企画委員会の開催について

平成 26 年度学生企画委員会（第 2 回）議事次第

平成 26 年 7 月 10 日(月)15:00~17:00
各基盤機関 TV 会議室

議題

1. 平成 26 年度学術交流フォーラムの企画案について（90分）
 - ①各自の企画案について発表
 - ②互いの企画案に対する感想・評価
 - ③全員で共有できるテーマ・開催趣旨の設定
 - ④プログラム原案の策定

2. 平成 26 年度学生企画委員会スケジュールについて（10分）

3. 予稿集について（10分）

4. その他（10分）
 - 次回学生企画委員会の開催について

平成 26 年度学生企画委員会（第 3 回）議事次第

平成 26 年 8 月 29 日(金)13:30～

国立民族学博物館 第 7 セミナー室

今回の議決事項

- ◎テーマ・開催骨子・プログラムを決める
- ◎プログラム担当者を決める
- ◎神楽公演に向けたスケジュールを確認する
- 神楽公演の予算案について検討する
- ◎宿泊方法を決める
- ◎予稿集の作成方法を決める
- ◎発表者・参加者の募集要項を決める

※ ◎は絶対議決事項

議事進行

1. 平成 26 年度学術交流フォーラムのテーマについて（45分）
 - ①前回の委員会で出た案の復習、新案について
 - ②テーマを決める／開催趣旨を定める
 - ③プログラムを決定する
2. 神楽公演の予算案・スケジュールについて（15分）
3. 企画広報について（15分）
 - ▽担当 / 広報方法 / 広報先・広報対象 / チラシ・ポスター
4. 発表者・参加者募集方法について（20分）
 - ▽募集方法 / 義務・依頼による発表 / 募集要項
5. 予稿集について（15分）
 - ▽業者委託 or 自主制作
6. 今後の学生企画委員会スケジュールについて（10分）
 - ▽次回学生企画委員会の日程

注記

途中休憩あり。案が出ない場合、プレストします。

平成 26 年度学生企画委員会（第 4 回）議事次第

平成 26 年 10 月 2 日(木) 13:30～

国立民族学博物館 第 7 セミナー室

議題

1. 学術交流フォーラム これまでの確認（5分）

2. 各担当セッションの確認（60分）

- ▽ポスター発表セッション
- ▽口頭発表セッション
- ▽ワークショップセッション
- ▽研究公演セッション

【確認事項】

セッション名、手順、学生企画委員の動き、参加者の動き、必要消耗品・備品
招聘者のリストアップ、予算・謝金

3. 参加募集要項の確認（15分）

- ▽開催趣旨の確認
- ▽参加募集・登録期間の確認
- ▽懇親会の予算・準備
- ▽予稿集・プロシーディングズのフォーマット

4. チラシ案の検討（10分）

- ▽デザイン、記載情報、写真の利用？

5. 広報について（10分）

- ▽専攻長会議における告知
- ▽民博公式アカウントの活用（Twitter、Facebook）

6. 消耗品・備品のリストアップ（10分）

- ▽ネームプレート ほか

7. 今後の学生企画委員会スケジュールについて（5分）

- ▽次回学生企画委員会の日程

平成 26 年度学生企画委員会（第 5 回）議事次第

平成 26 年 11 月 4 日(木) 13:30～

国立民族学博物館 第 7 セミナー室

議題

1. 前回委員会からの進捗状況（10分）
 - ▽広報告知状況（各基盤の学生企画委員）
 - ▽参加者数の確認

2. 各担当セッションの進捗状況（50分） 資料 1
 - ▽ポスター発表セッション
 - ▽口頭発表セッション
 - ▽パネルセッション
 - ▽ワークショップセッション
 - ▽神楽公演セッション

- 【確認事項】

セッション名、手順、学生企画委員の動き、参加者の動き
必要消耗品・備品のリストアップ、招聘者の確認、予算・謝金
当日までの準備スケジュール

3. 運営体制・シフトについて（20分） 資料 2
 - ▽前日の準備内容
 - ▽竹の切り出し
 - ▽参加報告記事の作成（報告書）
 - ▽アルバイトによる準備

4. 予稿集掲載原稿について（20分） 資料 3
 - ▽セッションごとの説明文（意義）
 - ▽招聘研究者の紹介文

5. 広報について（10分） 資料 4
 - ▽チラシ・ポスターの配布

6. 今後のスケジュールについて（10分） 資料 5
 - ▽予稿集作成スケジュール
 - ▽次回学生企画委員会の日程
 - ▽その他

平成 26 年度学生企画委員会（第 6 回）議事次第

平成 26 年 12 月 2 日(火)13:30～
国立民族学博物館 第 7 セミナー室

議題

1. 次回委員会の日程調整（10分）
2. 前回委員会からの進捗状況（40分） 資料 1
 - ▽各セッションの中間報告（予稿集内容をふまえて）
 - ▽備品の確認
 - ▽アンケートの作成
3. 予稿集原稿の確認（20分） 資料 2
 - ▽構成の確認
4. 当日シフトについて確認（20分） 資料 3
 - ▽アルバイトの動き
5. 事後作業の確認（20分） 資料 4
 - ▽アンケートの集計
 - ▽ウェブ報告書への所感
 - ▽学融合 PDF 報告書の件
6. その他（10分）

平成 26 年度学生企画委員会（第 7 回）議事次第

平成 27 年 1 月 6 日(火)13:30～

国立民族学博物館 第 7 セミナー室 他

議題

1. 今後のスケジュール確認（10分） （資料1）
 - ・写真・撮影の使用に関する同意書

2. 成果報告書の作成について（40分） （資料2）
 - ・目次案の確認・検討
 - ・役割分担
 - ・スケジュール（工程表）

3. WEB 報告書の作成について（20分） （資料3）
 - ・作業の流れ
 - ・スケジュール（工程表）

3. 反省会の準備（40分） （資料4）
 - ・取り上げる項目のピックアップ
 - ・引継項目のピックアップ
 - ・次回までの課題

4. 次回委員会の日程調整（10分）

5. その他

平成 26 年度学生企画委員会（第 8 回）議事次第

平成 27 年 1 月 19 日(月)15:10～
国立民族学博物館 大演習室 他

議題

1. 今後のスケジュール確認ほか（10分）
 - ・成果報告書について（進捗状況等） （資料1）
 - ・ニュースレター原稿について （資料2）

2. 反省会（100分）
 - ・フリップディスカッション （資料3）
 - ・ロールプレイ

3. 次回（次年度）委員会について、その他（10分）

資料目次

- 資料1 『学術交流フォーラム2014 「文化をかガクする？」活動報告書』目次案
- 資料2 総研大ニュースレター原稿（東城）
- 資料3-1. フォーラムをかガクする（2）
 - ～私とあなたとフォーラムの未来を築くためのWS～
- 資料3-2. プレスト写真



学術交流フォーラム 2014 参加募集要項

平成 26 年 12 月 20 日（土）・21 日（日）

総合研究大学院大学 文化科学研究科 学生企画委員
東城義則・西山文愛・光平有希・春藤献一・鈴木昂大・黄昱

総合研究大学院大学 文化科学研究科長
稲賀繁美

国立民族学博物館 フォーラム担当
佐々木史郎

開催趣旨

学術交流フォーラムが2年ぶりにかえってきました。今回のテーマは「文化をカガクする？」です。

私たちの所属する文化科学研究科は、4つの基盤機関においてさまざまな対象を扱い、多様な方法論を用いて研究を進めています。その一方で、テーマ設定の相違や方法論の認識について、横断的に問いなおす機会は多くはありませんでした。

そこで今回、学術交流フォーラムの再出発にあたり、私たちはいまいちど学生・教員間の交流を通して、私たちが取り組んでいる研究課題の特徴、各研究分野において蓄積されてきた研究方法論の役割について考え共有することを目的としました。

これらを達成するため、本フォーラムは次のセッションから構成されます。意見交換と問題解決を促進する口頭発表・ポスター発表、総研大のプロジェクトを知るパネルディスカッション、音に親しみながら研究に用いる「しりょう」の様態を問いなおす探究型ワークショップ、伝統的なレシピの再現を通して飲食文化を学ぶ体験型ワークショップ、そして身体表現と伝承の役割を再考する神楽の研究公演です。私たちはこれらのセッションを通して、改めて文化科学研究科における学術研究“カガク”のいまを、参加の方々とともに考え共有することで、人文科学の研究が担う“文化”の未来について発信します。

今回は全セッションを一般公開いたします。また他研究科の方の発表、他大学一般の方の参加も歓迎します。多くの方々の参加をお待ちしています。

10月吉日 学術交流フォーラム 2014 学生企画委員長 東城義則

日程

○日程・集合場所

日程：平成 26 年 12 月 20 日（土）13:00 ～ 21 日（日）16:45

場所：国立民族学博物館

○スケジュール

12月20日（土） 口頭発表・ポスター発表・パネルディスカッション

時間	内容	場所
12:30 - 13:00	受付	セミナー室 ・ エントランス ホール
13:00 - 13:10	オープニング	
13:10 - 15:10	口頭発表	
15:10 - 15:20	休憩・移動	
15:20 - 16:20	ポスター発表	
16:20 - 16:30	休憩・移動	
16:30 - 17:45	パネルディスカッション	
17:45 - 18:00	移動	
18:00 - 20:00	懇親会	みんなく レストラン

12月21日（日） ワークショップ・研究公演

時間	内容	場所
10:00 - 12:00	①食文化体験WS 「みんなくクッキングスクール in 総研大」(仮) ②音から「しりょう」をたずねるWS 「寄り添いの音・音楽—伝える・祝う・送る—」(仮)	生活科学実験室 ・ エントランス ホール(予定)
12:00 - 13:00	昼食	セミナー室 レストラン
13:00 - 16:45	研究公演 (含 クロージング)	講堂

対象者

本学学生・教員、その他一般

募集人員

50名程度

使用言語

日本語

申込み締切日

発表登録：11月7日（金）

参加登録：11月14日（金）

※ 定員になり次第、募集を締め切らせていただきます。

懇親会費（予定）

[教員] 5,000 円

[学生・職員・その他一般] 3,000 円

参加申込方法

○学生・他研究科教員・その他一般

WEBによる参加登録にて受け付けています。下記、参加登録フォームより申し込みをお願いします。なお参加登録は先着順となります。ご了承ください。

★参加登録

<https://ssl.form-mailer.jp/fms/50737861319375>

○文化科学研究科 教員

総合研究大学院大学 葉山本部より、出欠の確認をさせていただきます。ご協力をお願いいたします。

発表登録にあたっての注意事項

○口頭発表

6名まで受け付けます。人数を超過した場合は、抽選とさせていただきます。ご了承ください。参加登録後、予稿集用のフォーマットを事務局より送信させていただきます。

○ポスター発表

最大30名まで受け付けます。先着順とさせていただきます。参加登録後、予稿集のフォーマットを事務局より送信させていただきます。

ット、ポスター発表用のフォーマットを事務局より送信させていただきます。

○パネルディスカッション

学生企画委員から依頼した、特定の学生のみしかエントリーできません。ご了承ください。

○他研究科の方のエントリーについて

本学他研究科の方は、人文科学・社会科学分野の研究者が内容を理解できるよう、研究方法や分析手法の丁寧な記述をお願いいたします。学生企画委員長が予稿原稿を査読のうえ、場合によっては発表を謝絶させていただきます。ご了承ください。

ワークショップ参加にあたっての注意事項

食文化体験ワークショップにつきましては、人数を20名までに限定させていただきます。また当日、参加者の方には別途材料費を頂戴いたします(1,000円前後を予定)。ご了承ください。

旅費・宿泊について

本学学生・教員については、総合研究大学院大学の規定に従い旅費・宿泊費を支給いたします。宿泊については、参加者各自で予約をお願いいたします。なお主催者側からは、参加登録時の自動返信メールにて茨木市内のホテルをご案内しております。

※国立民族学博物館所属の教員・学生については、旅費・宿泊費の支給はございません。また、国際日本文化研究センターの教員・学生については宿泊費の支給がございません。ご了承ください。

問い合わせ先

国立大学法人 総合研究大学院大学 学務課基盤総括事務係

〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町(湘南国際村)

TEL : 046-858-1583 (基盤総括事務室)

E-mail : soukatsu1(at)ml.soken.ac.jp

◆ (at)を@に変換のうえ、メールを送信してください。

Academic Interdisciplinary- Communication

Sokendai

Forum

2014

食文化体験

神楽公演

音・しりょう

文化をカガクする？

文化科学研究科 学術交流フォーラム 2014

日時：平成 26 年 12 月 20 日（土）、21 日（日）

場所：国立民族学博物館 2 階セミナー室・講堂・生活化学実験室

対象者：学生・教員・その他一般

募集人員：50 名程度

文化をかガクする？

学術フォーラム 2014 開催趣旨

学術交流フォーラムが2年ぶりにかえってきました。今回のテーマは「文化をかガクする？」です。

私たちの所属する文化科学研究科は、5つの基盤機関においてさまざまな対象を扱い、多様な方法論を用いて研究を進めています。それゆえ同研究科に所属する私たちにとって、「かガク」とは人文科学の規範に根ざした学術研究を指しているといえます。しかしそれは特定の普遍的な分析手法が確立される代わりに、価値判断の留保がなされる“science”とは異なるものであり、明確な定義を行うことは難しいのが現状です。それでも最大公約数的には、文化を“かガク”する営為には、以下の2つの内容が含意されているはずです。1つめは研究に関わる者として、先行の研究史や方法論を咀嚼することで、次世代の人々のために新たな知識を産出するという事です。2つめは現代社会を形成する一員として、成果創出の過程で生じた知識や経験を、人々と分かち合い、よりよく生きるための理念や価値を生み出すということです。このことは「公共」という言葉を冠した研究領域が、さまざまな研究分野で出現している状況からも窺うことができます。

以上のような現状認識のもと、学術交流フォーラムの再出発にあたり、私たちは学生・教員間の交流を通して、各自が取り組んでいる研究課題の特徴、各研究分野において蓄積されてきた研究方法論の役割について考え共有することを目的としました。

これらを達成するため、本フォーラムは次のセッションから構成されます。意見交換と問題解決を促進する口頭発表・ポスター発表、総研大のプロジェクトを知るパネルディスカッション、音に親しみながら研究に用いる「しりょう」の様態を問いなおす探究型ワークショップ、イスラム文化圏に伝わるレシピの再現を通して、中東地域特有の食と慣習を体系的に学ぶ体験型ワークショップ、そして身体表現と伝承の役割を再考する神楽の公演です。私たちはこれらのセッションを通して、改めて文化科学研究科における学術研究“かガク”のいまを、参加の方々とともに考え共有することで、人文科学の研究が担う“文化”の未来について発信します。

今回は全セッションを一般公開いたします。また他研究科の方の発表、他大学一般の方の参加も歓迎します。多くの方々の参加をお待ちしています。

学術交流フォーラム 2014 学生企画委員長 東城義則

20日

12:30 - 13:00 受付

13:00 - 13:10 オープニング

13:10 - 15:10 口頭発表

15:20 - 16:20 ポスター発表

16:30 - 17:45 パネルディスカッション

18:00 - 20:00 懇親会

(懇親会参加費：教員 5,000 円、学生・職員・その他一般 3,000 円)

21日

10:00 - 12:00 ワークショップ

①食文化体験WS

「みんなくッキングスクール in 総研大」

【先着 20 名；当日材料費を徴収します】

②音・しりょう探究WS

「寄り添いの音・音楽一伝える・祝う・送る」

13:00 - 16:30 神楽公演 (含 クロージング)

【申込み締切日】

発表登録：11月7日(金) / 参加登録：11月14日(金) ※ 定員になり次第、募集を締め切らせていただきます。

【参加申込方法】

本学学生・教員・その他一般

WEBによる参加登録にて受け付けています。参加登録フォームより申し込みをお願いします。

なお参加登録は先着順となります。ご了承ください。

参加登録フォーム：<https://ssl.form-mailer.jp/fms/50737861319375>

(本学教員に付きましては葉山本部で参加申し込みとなります。)



参加登録フォーム



国立大学法人
総合研究大学院大学
The Graduate University for Advanced Studies

問い合わせ先

総合研究大学文化科学研究科
基盤統括事務係
mail:soukatu1@ml.soken.ac.jp

開催場所
国立民族学博物館
565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1

交通のご案内

●大阪モノレール…「万博記念公園駅」徒歩約 15 分

「公園東口駅」徒歩約 15 分
●自然文化園(有料区域)を通行せずに来館できます。

●バス……………「近鉄バス」(阪大本部前行き)阪急茨木市駅から約 20 分、
茨木駅から約 10 分、「日本庭園前」下車徒歩約 13 分

●鉄路線……………万博記念公園「日本庭園前」(有料)から徒歩約 5 分
●「日本庭園前ゲート」横にある出館専用通行口をお通りください。

万博記念公園内地図



文化をかガクする？

12月20日(土)

13:10~15:10

於:第3、第5セミナー室

「ペルー北海岸における考古遺産の研究」

サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ(国立民族学博物館外来研究員・比較文化学専攻修了)

「台所と食に関するプロトタイプの中のモノに見る高度成長期日本の「生活」と「身の回り」

—女性用家庭百科を例に—

大石 真澄(国際日本研究専攻)

「大正期の憲法学者としての筧克彦の位置づけについて」

西田 彰一(国際日本研究専攻)

「戦没者慰霊におけるマリア観音の諸相—グアム島・サイパン島の事例を中心に」

君島 彩子(日本歴史専攻)

「教科指導におけるICT活用に影響を与える要因に関する事例研究」

中尾 教子(メディア社会文化専攻)

「日本近現代文学における「親相」言説研究へのアプローチ—「親相」は「科学」なのか—

屋代(高野) 純子(日本文学研究専攻)

ポスター発表

日本歴史研究専攻

永越 信吾

地域文化学専攻

池永 禎子

金 セツピョル

チョルテンジャブ

国際日本研究専攻

SEVILLA Anton Luis

宇佐美 智之

光平 有希

春藤 献一

稲賀 繁美

稲賀 繁美・鈴木 貞美

松田 利彦

日本文学研究専攻

相田 満

伊藤 鉄也

太田 尚宏

山下 則子

15:20~16:20

於:本館エントランス

比較文化学専攻

中川 渚

TSAI KUN CHAN

呂 怡屏

吉村 健司

RUAN LI

ピーター J. マシウス

物理化学研究科・核融合科学専攻

坂東 隆宏

生命科学研究科・遺伝学専攻

松本 悠貴

パネル ディスカッション

16:30~17:45

於:第3、第5セミナー室

「共同研究から見つめる、文科のいまとこれから」

パネル①「親相資料の学際的研究」

相田 満(日本文学研究専攻・准教授)・三田 明弘(日本女子大学・教授)

パネル②「在ハワイの日本歴史・文化資料をめぐる国際共同研究—ハワイにおける日本文化の受容」

大久保 純一(日本歴史研究専攻・教授)・秋山 かおり(日本歴史研究専攻)

文化をかガクする？

12月21日(日)

ワークショップ①「総研大クッキングスクール」 「パレスチナ:シャーム地方のムジャッダラを食す」

10:00～10:30 ムジャッダラについてお話とスライド
10:30～11:30 調理
11:30～12:00 お食事
12:30～13:00 片づけ

講師: **菅瀬 晶子** (国立民族学博物館・助教)
於: 本館4階 生活科学実験室

* 参加は登録制です。お問い合わせ下さい。

ワークショップ② 「寄り添いの音・音楽—伝える・祝う・送る—」

10:00 開場
10:15～11:00 ひょうたん笛演奏&レクチャー
演奏: **伊藤 悟** (国立民族学博物館外来研究員・
地域文化学専攻修了)
11:15～12:00 ガムラン演奏&レクチャー
演奏: **チャンドラ・バスカラ**
レクチャー: **仁科 エミ** (メディア社会文化専攻・教授)

於: 本館エントランス

研究公演「石見大元神楽」

12:30 開場
13:00～15:00 「大元神楽を舞う」
市山神友会による特別公演
大太鼓・御座などの演目
15:10～16:40 パネルディスカッション「大元神楽を語る」
鈴木 正崇 (慶應義塾大学・教授)
笹原 亮二 (比較文化学専攻・教授)
本山 徳幸 (市山神友会)
鈴木 昂太 (日本歴史研究専攻)

於: 本館2階 講堂



総合研究大学院大学 文化科学研究科 学術交流フォーラム2014
2014年12月20日(土)、21日(日) 国立民族学博物館

問い合わせ先: 東城義則(学生企画委員長) 内線: 2525

宮脇千絵(フォーラム事務局) Email: forumjimu@idc.minpaku.ac.jp



国立大学法人
総合研究大学院大学

学術交流フォーラム関連事業

石見 元見 神楽

いわみおおもとかぐら

演舞 市山神友会

司会 鈴木昂太(総合研究大学院大学学生企画委員)

2014年12月21日(日)

13時～16時40分(開場12時30分)

場所 国立民族学博物館 講堂

定員 450名(参加無料) 事前申し込み不要/先着順

主催 総合研究大学院大学 文化科学研究科 共催 国立民族学博物館



石見 大元神楽

いわみおおもとかぐら



国立大学法人
総合研究大学院大学

学術交流フォーラム関連事業

石見大元神楽の公演は、総合研究大学院大学文化科学研究科の大学院生が中心となって企画・運営する学術交流フォーラムの一環として開催されます。今回は中国地方に伝承されてきた大元神楽の公演を通して、継承されてきた演目の内容と信仰の役割とについて、大学院生・研究者・神楽の担い手の方々と共に考え、伝統文化の継承のために協力することを目的としています。

また、今回ご出演いただく市山神友会の地元桜江町は、昨夏豪雨被害に遭いました。公演を通して被災された方々と共に、無形民俗文化財の保存と活用の課題について共有し、神楽が伝える歴史の深みや、自分たちの宝として誇らしく舞い踊る団員の方々の想いを、関西のみならずにお伝えできれば幸いです。

学術交流フォーラム2014
学生企画副委員長 鈴木昂太



プログラム

- 12:30 開場
- 13:00～15:00 「大元神楽を舞う」
市山神友会による特別公演
太鼓口・御座など四演目を予定
- 15:10～16:40 「大元神楽を語る」
研究者と市山神友会会長が壇上にあがり、
パネルディスカッションを行います。
- 16:40 閉会のごあいさつ

交通のご案内

- 大塚モノレール
[万博記念公園駅]徒歩約15分
●公演のみ参加される方は、自然文化園(有料区域)を通行される場合、入場料が必要です。
[公園東口駅]徒歩約15分
●自然文化園(有料区域)を通行せずに来館できます。
- バス
[近鉄]バス(阪大本部前行き)阪急茨木市駅から約20分、
JR茨木駅から約10分[日本庭園前]下車徒歩約13分
- 乗車券
万博記念公園の駐車場(有料)をご利用ください。最寄りの「日本庭園前駐車場」から徒歩約5分
●「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。

大元神楽とは

大元神楽は、島根県邑智郡から那賀郡にかけての山間部に残されている神楽で、昭和54年には、国の重要無形民俗文化財に指定されています。明治以降に急速に広まった、華やかな衣装でテンポの早い舞を行う「八調子」の他の石見神楽とは違い、地域に古くから伝わる、ゆったりとしたテンポに合わせて、優美な所作で魅せる「六調子」の神楽であるのが特徴です。七年に一度の式年祭では、厳格な神事である巻籠を用いた神懸かりの託舞も奉納されるため、他地域で演じる機会は少なく、今回の大原公演は非常に貴重な機会です。

市山神友会

所在地 島根県津和野市桜江町市山地区
会長 本山徳幸
市山神友会は、大元神楽に欠かせない最少演目の復元や神楽歌口上書の発行など、活発な活動をおこなっている伝承団体です。この地域では、神職として活動していた牛尾三千夫氏や音楽の名手でもあった竹内幸夫氏が中心となり、早くから神楽研究に取り組んできました。そのため古舞の伝統を守るという意識が強く、桜江町市山地区は大元神楽の伝承の中心地となっています。

問い合わせ

国立大学法人
総合研究大学院大学 学務課基盤総務事務係
〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町(湘南国際村)
TEL:046-858-1583(基盤総務事務係)
E-mail:soukatsu1@ml.soken.ac.jp

総合研究大学院大学 学術交流フォーラム事務局
〒565-8511
大阪府吹田市千里万博公園10-1 国立民族学博物館内
E-mail:forumjmu@idc.minpaku.ac.jp



国立民族学博物館

[大阪・万博記念公園]
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10番1号
www.minpaku.ac.jp

プログラム

1日目 12月20日(土) 12:30~20:00

- 12:30~13:00 受付
会場：第5セミナー室
- 13:00~13:10 開会式
会場：第5セミナー室
- | | | |
|------|-------|-------------------|
| 司会 | 鈴木 昂太 | 日本歴史研究専攻 学生企画副委員長 |
| 宣言 | 稲賀 繁美 | 文化科学研究科長 |
| 趣旨説明 | 東城 義則 | 地域文化学専攻 学生企画委員長 |
- 13:00~13:10 宣言・趣旨説明
- 13:10~13:20 移動(10分)
- 13:20~15:20 口頭発表①
会場：第3セミナー室
- | | | |
|----|-------|-----------------|
| 司会 | 光平 有希 | 国際日本研究専攻 学生企画委員 |
|----|-------|-----------------|
- 13:20~14:00 ペルー北海岸における考古遺産の研究
サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ 国立民族学博物館 外来研究員
- 14:00~14:40 台所と食に関するプロトタイプの中のモノに見る高度成長期日本の「生活」と「身の回り」—女性用家庭百科を例に—
大石 真澄 国際日本研究専攻
- 14:40~15:20 戦没者慰霊におけるマリア観音の諸相
—グアム島・サイパン島の事例を中心に—
君島 彩子 日本歴史研究専攻

口頭発表②

会場：第5セミナー室

司会 黄 昱 日本文学研究専攻 学生企画委員

- 13:20~14:00 大正期の憲法学者としての寛克彦の位置づけについて
西田 彰一 国際日本研究専攻
- 14:00~14:40 教科指導におけるICT活用に影響を与える要因に関する事例研究
中尾 教子 メディア社会文化専攻
- 14:40~15:20 日本近現代文学における「観相」言説研究へのアプローチ
—「観相」は「科学」なのか—
屋代（高野）純子 日本文学研究専攻
- 15:20~15:30 移 動（10分）

15:30~16:30 ポスター発表

会場：エントランスホール

司会 春藤 献一 国際日本研究専攻 学生企画委員

- 15:30~16:00 Group A 発表
- 16:00~16:30 Group B 発表
- 16:30~16:40 移 動（10分）

16:40~17:55 パネルディスカッション①

観相資料の学際的研究

会場：第3セミナー室

司会 黄 昱 日本文学研究専攻 学生企画委員

パネリスト 相田 満 日本文学研究専攻 教授

三田 明弘 日本女子大学 教授

パネルディスカッション②

在ハワイの日本歴史・文化資料をめぐる国際共同研究 —ハワイにおける日本文化の受容

会場：第5セミナー室

司 会 西山 文愛 比較文化学専攻 学生企画委員
パネリスト 大久保 純一 日本歴史研究専攻 教授
秋山 かおり 日本歴史研究専攻

16:40~17:40 パネルディスカッション
17:40~17:55 質疑応答・コメントペーパー記入
17:55~18:30 移 動 (35分)

18:30~20:00 懇親会

会場：レストラン みんなく

司 会 東城 義剛 地域文化学専攻 学生企画委員長
挨 拶 稲賀 繁美 文化科学研究科長

2日目 12月21日(日) 10:00~17:00

10:00~12:30 料理体験ワークショップ

総研大クッキングスクール：

パレスチナシャーム地方のムジャッダラを食す

会場：生活科学実験室

司 会 西山 文愛 比較文化学専攻 学生企画委員

講 師 菅瀬 晶子 国立民族学博物館 助教

10:00~10:30 レクチャー

10:30~11:30 調理

11:30~12:30 食事（ムジャッダラ、サラダ、セージティー）

12:30~13:00 休 憩（30分）

10:00~12:00 音・音楽ワークショップ

寄り添いの音・音楽 —伝える・祝う・送る—

会場：エントランスホール

司 会 光平 有希 国際日本研究専攻 学生企画委員

演奏・講師 伊藤 悟 国立民族学博物館 外来研究員

演 奏 チャンドラ・バスカラ

講 師 仁科 エミ メディア社会文化専攻 教授

10:00~10:05 趣旨説明

10:05~11:00 ひょうたん笛レクチャー・演奏

11:00~12:00 ガムランレクチャー・演奏

12:00~13:00 休 憩（60分）

13:00～16:40 研究公演

大元神楽研究公演

会場：講堂

司 会	鈴木 昂太	日本歴史研究専攻 学生企画副委員長
挨拶	須藤 健一	国立民族学博物館長
演 舞	市山神友会	

12:30

開 場

第一部 大元神楽を舞う 市山神友会による神楽公演

13:00～13:10 挨拶・趣旨説明

13:10～13:55 ①「太鼓口」 ②「御座」

13:55～14:05 休 憩 (10分)

14:05～15:20 ③「鐘馗」 ④「五龍王」

15:20～15:30 休 憩 (10分)

第二部 大元神楽を語る

15:30～16:30 パネルディスカッション

大元神楽のイマ ―無形文化財制度と民俗芸能の伝承活動―

司 会 春藤 献一 国際日本研究専攻 学生企画委員

パネリスト 鈴木 正崇 慶應義塾大学 教授

本山 徳幸 市山神友会長

鈴木 昂太 日本歴史研究専攻 学生企画副委員長

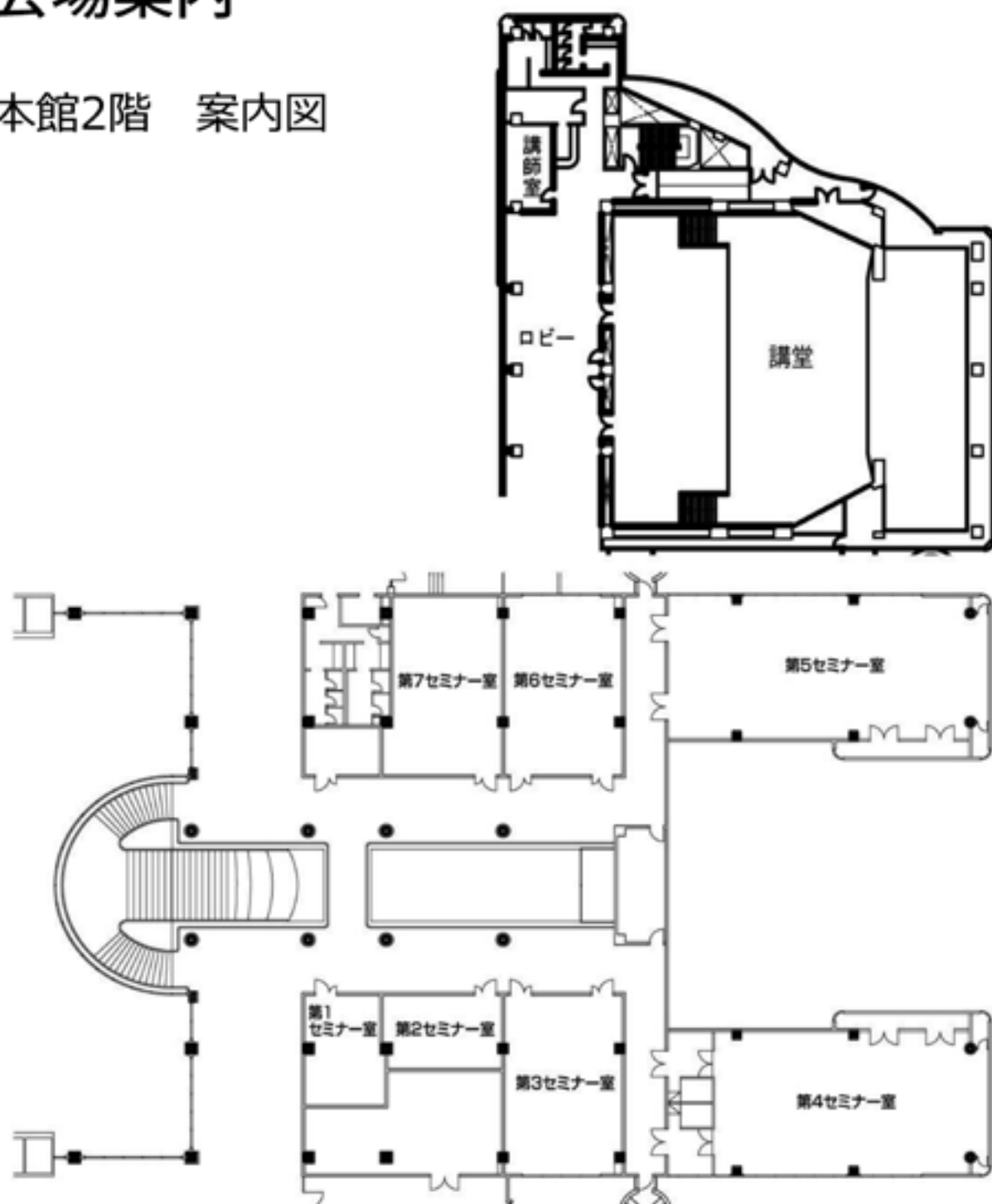
16:30～16:40 閉会式

会場：講堂

司 会	鈴木 昂太	日本歴史研究専攻 学生企画副委員長
講 評	田村 克己	総合研究大学院大学 理事
挨拶	佐々木 史郎	地域文化学専攻長

会場案内

本館2階 案内図



開会式：本館2階 第5セミナー室

口頭発表・パネルディスカッション：本館2階 第3・第5セミナー室

ポスター発表：本館1階 エントランスホール

ワークショップ「総研大クッキングスクール」：本館4階 生活科学実験室

ワークショップ「寄り添いの音・音楽」：本館1階 エントランスホール

研究公演：本館2階 講堂

閉会式：本館2階 講堂

事務局：本館2階 第2セミナー室



国立大学法人
総合研究大学院大学

学術交流フォーラム関連事業

石見 太元 神楽

いわみおおもとかぐら

演舞 市山神友会

司会 鈴木昂太 (総合研究大学院大学 学生企画委員)

2014年12月21日(日)

13時～16時40分(開場12時30分)

場所 国立民族学博物館 講堂

定員 450名(参加無料) 事前申し込み不要/先着順

主催 総合研究大学院大学 文化科学研究科 共催 国立民族学博物館



御挨拶

本日は、総合研究大学院大学学術交流フォーラム関連事業「石見大元神楽」にご来場いただき誠にありがとうございます。

総合研究大学院大学は、国立民族学博物館や国立天文台など、人文・理工の各学術分野における共同研究を推進し、高度な研究活動の拠点となる大学共同利用機関等と連携して大学院教育を行う国立大学です。その学生のなかに、島根県石見地方に伝承される「大元神楽」を研究する者がいたことから、大阪公演が実現しました。

日本の各地には、それぞれの土地の風俗・習慣・信仰に根ざして伝承されてきた民俗芸能が残されています。しかし、その伝承を支える農村は、グローバル化に伴う大都市への一極集中や、農業からの離脱という社会構造の変化に直面しており、民俗芸能も危機の時代を迎えているといえるでしょう。

こうした地域の現状を多くの方に伝え関心を持っていただき、現地の方々と一緒に考えて考え行動していく場を作りたいことを企画しました。総研大の学生、さまざまな機関に所属する研究者、公演を行う現地の方々、そして、関西に在住の一般の方々、それぞれの立場から、地域に伝承される民俗文化のこれらについて考えていくことが本公演の目的です。

また、今回の大元神楽研究公演は、総合研究大学院大学文化科学研究科が主催する学術交流フォーラム2016「文化をカガクする？」の一環として行われます。ここではどんな「カガク」ができるでしょうか？

例えば、民博の日本文化の展示室「祭りと芸能」のコーナーには、大元神楽の会場の天井飾りである天蓋が展示されています。この天蓋は、祭りの場に於いて、神様が降りてくるさまを表示する象徴となったり、舞う範囲を示す目印となったりするのです。博物館の展示物が、実際にはどういった使われ方をされ、どんな意味が生まれるのかという観点からも、「カガク」することができるといえます。

このように、来場して下さった方、それぞれの視点から、この公演を「カガク」していただければ幸いです。

総合研究大学院大学 学術交流フォーラム学生企画副委員長 鈴木昂太

研究公演「石見大元神楽」プログラム

於：国立民族学博物館

一二時三〇分

開場

一三時

【開会のあいさつ】

須藤 健一

国立民族学博物館長

第一部 大元神楽を舞う「市山神友会による神楽公演」

一三時一〇分

①「太鼓口」 ②「御座」

③「鐘植」 ④「五龍王」

一五時二〇分

【休憩】(十分)

第二部 大元神楽を語る

「大元神楽のイマ——無形文化財制度と民俗芸能の伝承活動——」

一五時三〇分

パネルディスカッション

パネラー

鈴木正隆(慶應義塾大学)

本山徳幸(市山神友会)

鈴木昂太(総合研究大学院大学)

一六時三〇分

【講評】

田村 克己

総合研究大学院大学 理事

一六時三五分

【閉会の挨拶】

佐々木 史郎

地域文化学専攻長

一六時四〇分

終了

大元神楽とは

大元神楽は、島根県邑智郡から那賀郡にかけての山間部に残されている神楽で、昭和五十四年には、国の重要無形民俗文化財に指定されている。石見地方で明治以降に急速に広まった、華美な衣装でテンポの早い舞を行う「八調子」の石見神楽とは違い、地域に古くから伝わる、ゆったりとしたテンポに合わせて、優美な所作で魅せる「六調子」の神楽であるのが特徴となっている。大元神楽に関する最も古い資料とされているのは、邑智郡吾郷村天津神社の元和元年（一六一五）の年号が残る『大元舞熟書之事』である。こうした資料より、少なくとも、江戸初期には、近郊の神職が共同して神楽組を結成し、四年、五年、七年などに一度という式年の形で行われる「大元舞」に神楽を奉納していたと考えられている。

神楽が奉納される「大元さん」は、今でも社を持たず、神木に祀られているものが多く、古い信仰の形を伝えていると言われている。また、一つの村のなかに複数祀られていることが多く、村を単位とする産土の神（氏神）とは別の意味の神様であった。それは、同じ一つの谷筋に住み、水源などの生活基盤を共有する、同じ血縁の集団（「名」）にとつての神様であり、彼らにとつて一番身近で大切な「おおもと」の神様である。その神様は、人々が託す願いに応じて、土地に先住の地主神になったり、人々の生活を見守る農耕神になったり、祖先（祖霊）神にもなったりする多様な存在であった。

そのため、式年の「大元舞」は、地区の氏神の祭り（秋祭り）と区別されており、式年祭が行われる年には、夜通しの神楽が、氏神に奉納する秋祭りとは「大元舞」の二度行われる。また、演目を見ても、薰蛇（託綱）を用いた神懸かり託宣のほか、「五龍王」「天蓋」など「大元舞」にしか奉納されない演目も多い。

「大元舞」では、その年の新穀の薫で造られた薰蛇を御神体として祭場に迎え、「大元さま」をはじめとする村落の神様すべてをお招きして、一晚中神楽を奉納する。そして、夜が白々と明け始める頃に、薰蛇を用いた神懸かりの託舞が奉納され、人の身体を介して神の声を直接聞く厳肅な神事が行われる。すべての舞が終わると、薰蛇は「大元さん」の神木に、神楽で用いられた一束幣などの祭具とともに巻き付けられ、次の式年の時を待つ。

こうした大元神楽は、江戸時代を通じて神職が神事と能舞のすべてを担って行われてきた。しかし、明治になると、神懸かりが禁止されるとともに、神職が神楽の舞に関わることを止める風が起きた。こうした状況下で、神懸かりは、内密に行われてきた二、三の村があったおかげで、また、神楽のなかで余興的な性格も持っていた能舞を、村人が舞うようになったことで、現在まで伝えられてきた。こうした「地下」（村人たち）の舞の伝統に連なっているのが、今回出演していただく市山神友会である。

出演団体の紹介

市山神友会

所在地 島根県江津市桜江町市山地区

会長 本山徳幸

市山神友会は、大元神楽に欠かせない希少演目の復元や神楽歌口上書の発行など、旺盛な活動を行っている伝承団体である。

昭和四五年に、神楽好きが集まって活動していた市山舞子達中から、市山神友会という神楽団が結成された。辰年と戌年の「市山大元舞」、鎮守である市山飯尾山八幡神社の「秋祭り」、八月三十一日の「八朔の舞」など地元の祭りへの奉納の他、国立劇場や島根県民会館などでの出張公演も行ってきた。

この地区に、市山飯尾山八幡神社宮司として大元神楽に関わりつつ、学者として神楽研究を行い、全国に大元神楽の名を知らしめた牛尾三千夫氏や、神楽文遊会を主宰し、石見・芸北地域の神楽団と広く付き合いながら神楽研究を行い、奏楽の名手として市山の大神楽を長年支えた竹内幸夫氏がいたことなどから、伝統を守るという意識が強く、大元神楽の伝承の中心地となっている。得意演目は、「鐘旭」「磐戸」「太鼓口」。

また、市山公民館には、大元神楽に関する様々な資料が展示されている「大元神楽伝承館」が設置され、大元神楽の情報発信基地ともなっている。



太鼓口

どうのくち

出演者

大胴

中西一郎

大胴

竹内修二

大胴

湯浅泰男

小太鼓

田中兼司

小太鼓

山本周平

笛

石津久明

手拍子

森野順



御座
ござ

出演者

舞

森野茂

大胴

湯浅泰男

小太鼓

石津久明

笛

山本周平

手拍子

田中兼司



鐘 馗

しようき

出演者

神

森岡友昭

鬼

宇都宮将

大胴

湯浅泰男

小太鼓

山本周平

笛

竹内修二

手拍子

田中兼司



五龍王

ごりゅうおう

出演者

青林青龍王
森下圭三
赤林赤龍王
田中兼司
白林白龍王
森野順
黒林黒龍王
本山徳幸
五郎使
森野茂
黄林黄龍王
湯淺泰男
文探博士
石津久明
大朋
中西一郎
小太鼓
山本周平
笛
竹内修二
手拍子
森岡友昭



研究公演「石見大元神楽」
プログラム

於：国立民族学博物館講堂
二〇一四年十二月二日

総合研究大学院大学
学術交流フォーラム二〇一四
「文化をカガクする？」
学生企画委員会

2014年度 学術交流フォーラム 全体アンケート

このたびは、学術交流フォーラムにご参加いただきありがとうございました。今回のフォーラムを振り返り、今後の改善に生かすためご参加いただいた皆様にアンケートへの回答をお願いしたいと思います。本アンケートにご回答いただいた内容は統計的に処理され、皆様の個人的な情報が出ることは一切ございません。本アンケートの結果は、今後の活動の参考にさせていただくとともに、教育・研究のために利用させていただくことがあります。

アンケートは **10分程度**で答えられるものになっておりますが、答えたくない項目には無理にお答えいただく必要はございません。ご協力よろしくお願いたします。

2014年 学術交流フォーラム 学生企画委員会

2014年 学術交流フォーラム企画・運営一同

最初にお名前とご所属についてお聞きいたします。

御氏名 () 御所属 ()

1 フォーラム開催について

1-1. フォーラムの開催趣旨について

- 大変興味を持った 興味をもった どちらとも言えない
興味を持たなかった 全く興味を持たなかった

1-2. 開催時期について

- 大変参加しやすかった 参加しやすかった どちらともいえない
参加しにくかった 大変参加しにくかった

1-2. 会場について

- 大変参加しやすかった 参加しやすかった どちらともいえない
参加しにくかった 大変参加しにくかった

2 学生の口頭発表について

2-1. 発表時間について

- 長い やや長い 適切な長さ やや短い 短い

2-2. 発表本数について

- 多い やや多い 適切な本数 やや少ない 少ない

2-3. 発表形式でわかりやすかったものは

- レジュメ形式 映像形式 スライド形式 その他 ()

3 ポスター発表について

3-1. 発表時間について

長い やや長い 適切な長さ やや短い 短い

3-2. ポスターの配置について

大変見やすかった 見やすかった どちらとも言えない

見にくかった 大変見にくかった

3-3. 興味を持たれた発表があったら、ポスターのタイトルまたは発表者名をご記入ください。

① ()

② ()

4 パネルディスカッションについて

4-1. 趣旨設定について

大変興味を持った 興味をもった どちらとも言えない

興味を持たなかった 全く興味を持たなかった

4-2. 各パネル内容について

大変興味を持った 興味をもった どちらとも言えない

興味を持たなかった 全く興味を持たなかった

4-3. 今後企画してほしいテーマなどありましたら、お書き下さい。

()

5 ワークショップについて

5-1. 御参加いただきましたのワークショップをお選びください。

料理 音 ワークショップには参加していない。

5-2. ワークショップの内容について

大変興味を持った 興味をもった どちらとも言えない

興味を持たなかった 全く興味を持たなかった

5-3. 今後企画してほしいテーマなどありましたら、お書き下さい。

()

6 研究公演について

6-1. 研究公演の趣旨について

大変興味を持った 興味をもった どちらとも言えない

興味を持たなかった 全く興味を持たなかった

6-2. 大元神楽の公演について

- 大変興味を持った 興味をもった どちらとも言えない
興味を持たなかった 全く興味を持たなかった

6-3. 研究公演のパネルディスカッションについて

- 大変興味を持った 興味をもった どちらとも言えない
興味を持たなかった 全く興味を持たなかった

7 フォーラム全体について

7-1. フォーラムへの参加は、今回で何回目ですか？

- 初めて 2回目 3回目以上

7-2. 今回のフォーラム開催を、何で知りましたか？

- メール チラシ・ポスター 総研大 HP 委員から
その他 ()

7-3. フォーラムに参加されたきっかけはなんですか？（複数回答可）

- 口頭発表に興味をもった シンポジウムに興味をもった
ポスター発表に興味をもった 他専攻の人と交流がしたかった
その他 ()

7-4. フォーラムで、他専攻の人との理解や交流は深まりましたか？

- 深まった 深まらなかった
その他 ()

7-5. 今後、フォーラムで設けてほしい催しがありましたら、お書きください。

()

5-6. その他、良かった点・改善してほしい点など、感想もまじえてご自由にお書き下さい。

()

アンケートは以上です。
ご参加&ご回答ありがとうございました。

研究公演「石見大元神楽」に関するアンケートのお願い

本日は、総合研究大学院大学 学術交流フォーラム関連事業研究公演「石見大元神楽」にご来場いただき、誠にありがとうございます。今後の運営に生かしていくため、今回の公演に対する評価をお聞かせください。なお、いただいた回答は、運営上の参考にさせていただくとともに、研究教育活動において使わせていただきます。

2014年 学術交流フォーラム企画・運営一同

■性別を教えてください。				
<input type="checkbox"/> 女性	<input type="checkbox"/> 男性			
■年齢を教えてください。				
<input type="checkbox"/> 10代未満	<input type="checkbox"/> 10代	<input type="checkbox"/> 20代	<input type="checkbox"/> 30代	<input type="checkbox"/> 40代
<input type="checkbox"/> 50代	<input type="checkbox"/> 60代	<input type="checkbox"/> 70代	<input type="checkbox"/> 80歳以上	
■どちらにお住まいですか。				
	都道 府県			区 市
■第一部 大元神楽を舞う「市山神友会による神楽公演」についての感想を教えてください。				
<input type="checkbox"/> 満足	<input type="checkbox"/> どちらかといえば満足	<input type="checkbox"/> どちらかといえば不満	<input type="checkbox"/> 不満	
■第二部 大元神楽を語る「パネルディスカッション」についての感想を教えてください。				
<input type="checkbox"/> 満足	<input type="checkbox"/> どちらかといえば満足	<input type="checkbox"/> どちらかといえば不満	<input type="checkbox"/> 不満	
■「大元神楽」について以前からご存知でしたか。				
<input type="checkbox"/> はい	<input type="checkbox"/> いいえ			
■研究公演「石見大元神楽」をどちらでお知りになりましたか。(複数回答可)				
<input type="checkbox"/> テレビ	<input type="checkbox"/> チラシ	<input type="checkbox"/> ポスター	<input type="checkbox"/> 新聞	<input type="checkbox"/> SNS・ブログ
<input type="checkbox"/> インターネッ	<input type="checkbox"/> 地域情報誌	<input type="checkbox"/> 知人の紹介	<input type="checkbox"/> その他	()
■来場のきっかけは何ですか？ご自身の興味関心をお書きください。				
■今後民博で、どのような研究公演を行って欲しいですか。ご自由にお書きください。				
■ご協力ありがとうございました。その他、ご意見・ご感想などがございましたらご記入ください。				

学術交流フォーラム2014 参加者所属内訳

平成26(2014)年12月20日(土)

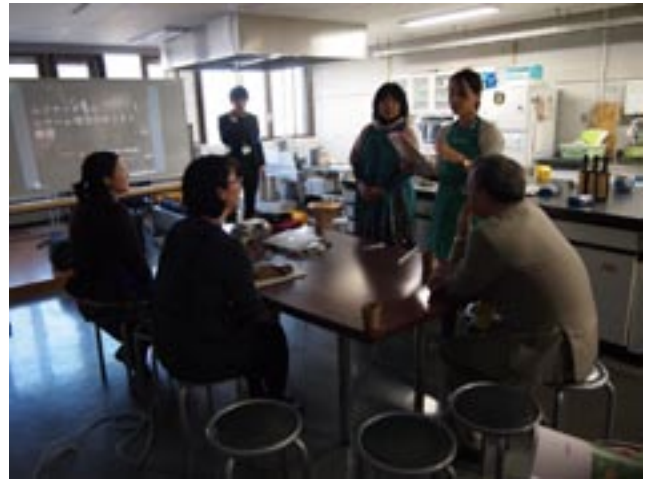
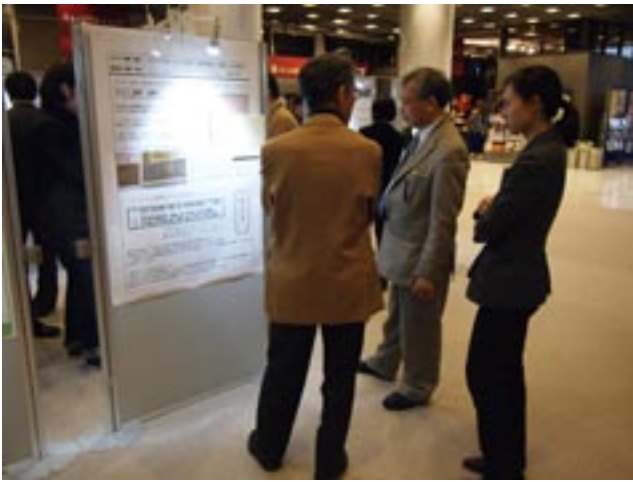
(単位:人)

学生	文化科学研究科	地域・比較文化学専攻	9
		国際日本研究専攻	5
		日本歴史研究専攻	4
		メディア社会文化専攻	2
		日本文学研究専攻	1
	物理科学研究科	核融合科学専攻	1
生命科学研究所	遺伝学専攻	1	
学生合計			23
教員	文化科学研究科	地域・比較文化学専攻	4
		国際日本研究専攻	3
		日本歴史研究専攻	1
		メディア社会文化専攻	2
		日本文学研究専攻	6
	高エネルギー加速器科学研究科	加速器科学専攻	1
	葉山本部	学融合推進センター	7
	他大学		3
教員合計			27
出席者合計			50

平成26(2014)年12月21日(日)

学生	文化科学研究科	地域・比較文化学専攻	11
		国際日本研究専攻	3
		日本歴史研究専攻	4
		メディア社会文化専攻	1
		日本文学研究専攻	1
	物理科学研究科	核融合科学専攻	1
生命科学研究所	遺伝学専攻	1	
学生合計			22
教員	文化科学研究科	地域・比較文化学専攻	4
		国際日本研究専攻	0
		日本歴史研究専攻	1
		メディア社会文化専攻	1
		日本文学研究専攻	5
	高エネルギー加速器科学研究科	加速器科学専攻	1
	葉山本部	学融合推進センター	5
	他大学		3
教員合計			20
出席者合計			42







フォーラムをカガクする（1）

～反省会事前プレスト～

2015.1.6

第7回学生企画委員会

適切な反省会を行う理由

- ・次年度への引き継ぎのため
- ・個々の長所・能力をさらに伸ばすため
- ・さまざまな失敗・ミスを省みること、各自のこれからの作業に生かしてゆくため
- ・今回の経験が今後どのような場面で役立つのか検証しておくため

ルール

- ・自由に着想しましょう
- ・批評批判は厳禁、前提概念の検討もやめましょう
- ・人の意見に便乗するのはOK
- ・たくさんアイデアを出していきましょう

1. 今年度のフォーラムで、取り上げるべき反省課題を1フレーズで列挙していきましょう。

例：開催規模、よりよい役割分担の方法、適切な予算枠、企画立案の方法

Keyword：企画、予算、チームワーク、準備、時間

2. 次年度のフォーラム（あるいは類似企画）のために、意見交換するべき課題を1フレーズで列挙してみましょう。

例：基盤機関での開催、開催趣旨、引き継ぎ方法

Keyword：場所、委員の人数、委員会の回数、開催時期、連絡手段

フォーラムをカガクする（2）

～私とあなたとフォーラムの未来を築くためのWS～

2015.1.19

第8回学生企画委員会

ねらい

- ・体験を思い返して、次の委員に伝えられる経験を形成する。
- ・自分の言葉で語ることによって、今後の活動で用いることのできる言葉を生成する。
- ・新たな自分の可能性を見出し、次の役割に挑戦できるよう準備を整える。

ルール

- ・ぜひ、率直に発言してください。
- ・誰の意見が正しいわけでも、間違っているわけでもありません。

1. 用意したテーマに対して、ボードに自分の意見を書き込みましょう（3～5分）

例：研究との向き合い方 ……………→

①テーマの設定

P：企画立案の主体は？誰が何を決める？

②予算のあり方、どう考えますか？

P：誰が予算枠をつくりますか？

③開催時期

P：判断基準をどこに置きますか？基盤？委員の都合？

④準備運営はどうあるべき？

P：誰が何をになう？学生？基盤？業者？シンクタンク？

⑤役割分担をどう考える？

P：教員・実行委員長主導？プロジェクト制（相応の企画）？少数プロジェクト制（小規模な企画）？

⑥研究との向き合い方

P：研究のペースが崩れないこと？研究と一体的に進める？意味がないからもうフォーラムやらない？

【ボード書き込み例】

私の考え

やっぱり自分の研究が優先！

理由

学位をとるために入学してる！

これからどうあるべき？

学生の負担を減らすため、
プログラムを定型化して縮小する

2. ワークシートを用いて、私とフォーラムの未来を構想しよう（7分×6名）

例：あなたが実行委員長になった場合、どのようなフォーラムを構想しますか？

3. 次期委員の選出方法、引継ぎの方法について提言

ロールプレイ①：委員長編

次年度、フォーラムを開催するとします。どのようなフォーラムを構想しますか

以下、来年度フォーラムを構想してみてください。 来年度に引き継ぐべきことは（課題・内容・メンバーに残って欲しい人）
フォーラム開催の目的は、どこに置きますか？
役割分担について（学生・教員・事務・外部業者）
予算の規模について
開催場所（基盤機関・貸しホール・合宿施設 等々）をどのように設定する、使用する？
プログラムについて

【最後に】今回、学生企画委員としてフォーラムに関わった率直な感想を開かせてください。
--

ロールプレイ②：未来の委員長・委員編

あなたは今回のフォーラム経験を、これからの大学院生活にどのように生かしていきますか？

今回のフォーラム経験は、今後の大学院の研究活動にどのように役に立ちそうですか？

今後もしフォーラムに関わるとしたら、どのようなフォーラムを構想したいですか？

困った時のヒント：自分の役割、テーマ、予算、役割分担、開催地

【最後に】今回、学生企画委員としてフォーラムに関わった率直な感想を開かせてください。

ロールプレイ③：未来の研究者編

あなたは今回のフォーラム経験を、これからの研究活動にどのように生かしていきますか？

今回のフォーラムで行ったこと学んだことを、あなたは自分の研究活動にどのように生かしていきますか？

困った時のヒント1：今後の研究方向性、企画の立て方、お金の使い方、これからの研究者としての活動について

困った時のヒント2：短期的に（1～3年）、中期的に（3年～5年）、長期的に（5年～20年）

【最後に】今回、学生企画委員としてフォーラムに関わった率直な感想を聞かせてください。

学術交流フォーラム2014 企画・運営 <執筆分担>

<平成26年度 学生企画委員>

委員長	東 城 義 則	地域文化学専攻	<第1部第1章・第2部第3章>
	西 山 文 愛	比較文化学専攻	<第3部第1章>
	光 平 有 希	国際日本研究専攻	<第3部第2章・第4部第2章>
	春 藤 献 一	国際日本研究専攻	<第2部第2章・第4部第1章・第4部第2章>
副委員長	鈴 木 昂 太	日本歴史研究専攻	<第3部第3章・第4部第1章>
	黄 昱	日本文学研究専攻	<第2部第1章>

<学術交流フォーラム事務局>

宮 脇 千 絵	国立民族学博物館	外来研究員	<第1部第2章>
---------	----------	-------	----------

<フォーラム担当教員>

稲 賀 繁 美教授	文化科学研究科長	<第5部第1章>
佐々木史郎教授	地域文化学専攻長	<第5部第2章>
藤 井 龍 彦特任教授	学融合推進センター	
七 田 麻 美子特任准教授	学融合推進センター	<第4部第3章>

総合研究大学院大学 文化科学研究科

学術交流フォーラム2014
活動報告書

発行日	平成27年3月31日
編集	総合研究大学院大学 文化科学研究科 平成26年度 学生企画委員
表紙デザイン	西山 文愛 (平成26年度 学生企画委員)
発行所	総合研究大学院大学 文化科学研究科
事務局	総合研究大学院大学 学務課基盤総括事務係 〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町(湘南国際村) 電話 046-858-1583 FAX 046-858-1541
印刷	株式会社 弘文社

